第5章

資料

感染症発生動向調査事業定点一覧

内科定点(59)　　(平成22年12月31日現在)

医療機関名	所在地	電話番号
坂本クリニック	鶴見区生麦5-6-2	505-0347
渡辺医院	鶴見区潮田町3-133-2	501-6457
橋本小児科	鶴見区下末吉1-24-15	581-5447
内科・小児科前広医院	鶴見区豊岡町10-7	571-2333
杉浦内科クリニック	神奈川区白楽100-5　白楽コミュニティプラザ3F	402-5650
藤江医院	神奈川区平川町26-2	491-8578
薩田内科クリニック	神奈川区菅田町2647　菅田町メディカルビル1F	477-4022
福澤クリニック	神奈川区片倉1-9-3　まるあびる1F	488-5123
鈴木内科クリニック	西区戸部町5-204	231-3355
スカイビル内科	西区高島2-19-12　スカイビル21F	461-1603
新妻クリニック	中区根岸町3-176-39	629-3585
川俣クリニック	中区麦田町4-107　ライフ山手2F	624-2960
室橋内科医院	中区本牧三之谷23-16	621-0139
鵜養医院	南区宮元町3-55	731-2308
よなみね内科クリニック	南区共進町1-34　森ビル1F	720-6008
あずま医院	南区清水ヶ丘1-21	231-7026
木庭医院	港南区野庭町672-5	844-2665
古家内科医院	港南区丸山台2-34-8	844-3080
宮川医院	港南区上大岡西1-12-17	842-0978
川村クリニック	保土ケ谷区権太坂1-52-14	742-1010
篠崎医院	保土ケ谷区上星川3-15-5	371-0038
浅野医院	保土ケ谷区西谷町866	371-3018
黒田医院	旭区柏町47-11	364-9772
左近山クリニック	旭区左近山1186-2　左近山団地7-14-101	351-6541
若葉台クリニック	旭区若葉台1-3-116	921-3700
石田クリニック	旭区白根6-1-3	953-3308
遠藤内科	磯子区栗木1-28-27	773-7273
板垣医院	磯子区洋光台3-5-31	833-6141
冨野医院	磯子区岡村6-5-35	752-3221
いとうファミリークリニック	金沢区釜利谷東2-1-1　バザァル金沢文庫4F	783-5769
林内科眼科クリニック	金沢区並木2-10-5	785-2000
桑原内科クリニック	金沢区六浦5-21-3-106	791-5751
中野こどもクリニック	港北区富士塚1-1-1	434-6500
服部クリニック	港北区大倉山1-28-3	545-0001
横山クリニック	港北区大倉山4-5-1　大倉山ハイム1-101	531-1575
石井内科医院	港北区日吉本町6-26-5	561-4704
椎橋医院	港北区大豆戸町220　菊名レジデンシアプラザ101号	401-9092
野村医院	緑区いぶき野8-15	981-2568
みなみ台小に科	緑区長津田みなみ台1-20-9	982-7041
田村内科クリニック	緑区十日市場町804-2　ホーメストプラザ十日市場西館101	989-6388
西川内科・胃腸科	青葉区あざみ野1-26-6	901-1241
徳岡クリニック	青葉区荏田町477	911-6000
岡本診療所	青葉区青葉台1-29-5	981-9541
えなみクリニック	青葉区桂台2-27-21	962-9980
斉木クリニック	都筑区高山1-45　沖商事ビル102	941-0082

葛が谷つばさクリニック	都筑区葛が谷4-14　ベルテセゾン1F	945-2772
小林クリニック	都筑区すみれが丘38-31	592-0041
川上診療所	戸塚区川上町359	822-5074
内科小児科むかひら医院	戸塚区汲沢1-39-24	861-4160
半田医院	戸塚区平戸2-30-8	821-1235
おかもと内科皮膚科クリニック	戸塚区川上町84-1　ケアハウスゆうあい4FB	822-3333
江口医院	栄区飯島町1413	891-0067
米田クリニック	栄区桂台北10-22	895-1300
小林内科クリニック	泉区中田南2-2-2	801-2551
柏木医院	泉区和泉町2812	802-8253
かねむらクリニック	泉区中田北2-6-14　アイエイチビルⅡ　1F-B	805-6685
まいえ内科	瀬谷区橋戸2-31-3　グランデュールプラザ2F	301-8561
三ツ境ライフクリニック渡部内科	瀬谷区三ツ境2-1　三ツ境ライフB館	360-3558
本郷クリニック	瀬谷区本郷3-20-2	304-2017

小児科定点(91)

医療機関名	所在地	電話番号
古谷小児科	鶴見区潮田町2-113-1	501-9160
田中小児科医院	鶴見区東寺尾2-15-34	581-2880
さくら診療所	鶴見区矢向5-4-34	581-6070
小児科佐久間医院	鶴見区馬場4-31-15	581-2604
山崎医院	鶴見区東寺尾6-32-15	581-4003
渡部クリニック	鶴見区鶴見中央4-43-6	506-3657
大口東総合病院	神奈川区入江2-19-1	401-2411
くぼた小児科	神奈川区新子安1-2-4　オルトヨコハマビジネスセンター1F	438-0291
まつうら小児科内科	神奈川区三ツ沢中町9-2	321-3171
鈴木小児科医院	神奈川区神大寺4-8-15	491-4510
大西医院	神奈川区反町4-27-16	324-2121
村瀬クリニック	神奈川区西神奈川1-12-7　東神奈川イーストアークビル1F	320-3306
富田こどもクリニック	西区藤棚町1-58-6	242-1543
西戸部こどもクリニック	西区西戸部町2-174	260-1495
青木小児科医院	西区境之谷73	231-4144
向山小児科医院	中区本牧三之谷22-1	623-7311
誠友医院	中区山下町113-4-3F	680-1283
寺道小児科医院	中区本牧町1-178	623-1021
小菅医院	中区石川町1-11-2　小菅医療ビル4F	651-6177
宇南山小児科医院	南区永田北3-36-5	714-1036
弘明クリニック	南区通町4-84　メルベイユ弘明寺2F	721-3611
弓削医院	南区睦町1-7-5	731-2653
宮地小児科クリニック	南区六ツ川3-86-5	716-1011
大川小児科医院	南区万世町2-27	231-4443
小島小児科医院	港南区東永谷2-2-20	823-1121
竹田こどもクリニック	港南区上永谷2-11-1　いずみプラザ上永谷112	846-1088
原口小児科医院	港南区丸山台3-41-1	845-6622
ふくお小児科・アレルギー科	港南区港南台1-48-7	833-7737
八木小児科医院	港南区野庭町599-9	845-1177
星川小児クリニック	保土ケ谷区星川2-4-1　星川SFビル3F	336-2260

おざき小児科	保土ケ谷区仏向町121-2	348-4141
宮川内科小児科医院	保土ケ谷区岩間町1-4-1	331-2478
横山医院	保土ケ谷区峰岡町2-118	331-3296
北原医院	保土ケ谷区上管田町59	381-1622
琴寄医院	旭区鶴ヶ峰1-13-2	373-6752
おじま小児科	旭区二俣川2-58　大洋ビル2F	361-0212
サンクリニック	旭区柏町97-8	366-6822
川島医院	旭区上白根町891　西ひかりが丘団地18-5-102	952-2039
小林小児科医院	旭区二俣川1-65	361-6116
育愛小児科医院	旭区中白根1-10-15	951-1152
矢崎小児科	磯子区磯子2-13-13	751-4378
さいとう小児科	磯子区岡村7-20-14	752-4882
住田こどもクリニック	磯子区西町6-39	753-7151
バニーこども診療所	磯子区洋光台6-19-43	830-0767
浅井こどもクリニック	金沢区釜利谷東2-14-11　高野ビル2F	785-1152
江原小児科医院	金沢区並木1-14-2	773-8533
大久保医院	金沢区六浦南2-42-18	788-6565
高橋こどもクリニック	金沢区富岡東5-18-1　長谷川メディカルプラザ富岡2階-G	775-3111
ふじわら小児科	金沢区富岡西1-48-12	773-6333
あべこどもクリニック	港北区箕輪町2-15-22	566-2112
小机診療所	港北区小机町1451	471-9696
大川小児クリニック	港北区綱島東2-12-19　福島ビル1F	546-1071
カンガルーこどもクリニック	港北区北新横浜1-2-3　三橋ビル1F	309-0755
斉藤小児科心とからだのクリニック	港北区高田東1-25-3	531-3574
マリアこどもクリニック	港北区岸根町408-123	430-5415
日吉こどもクリニック	港北区日吉本町1-9-26　MKハイム1F	560-1850
シブヤチャイルドクリニック	港北区大倉山3-56-22　ナビウス大倉山106	542-6915
一色こどもクリニック	緑区白山1-1-3　ダイアパレス鴨居1F	933-0061
吉田小児科医院	緑区霧が丘3-8-3	921-5851
森の子キッズクリニック	緑区中山町750番地1	929-5501
さかたに小児科	緑区台村町309-1　土井ビル1F	930-3110
ぽっけキッズクリニック	緑区長津田みなみ台6-24-13	988-5330
太田こどもクリニック	青葉区あざみ野1-8-2　あざみ野メディカルプラザ3F	909-5335
渡辺医院	青葉区奈良町1670-44	962-8126
武沼小児科医院	青葉区青葉台1-13-13	981-6122
あざがみ小児クリニック	青葉区美しが丘西3-65-6	909-0092
はやし小児科医院	青葉区松風台13-5　ライムライト松風台3	983-3254
有本小児科内科	青葉区美しが丘2-20-18　ドムス有本101	901-6870
あかねファミリークリニック	青葉区あかね台1-17-38	985-6607
水野クリニック	都筑区南山田町4258	593-4040
大山クリニック	都筑区茅ケ崎南5-1-10　ノーブル茅ケ崎	941-7171
山下小児科クリニック	都筑区北山田3-18-15	593-9770
都筑メディカルクリニック	都筑区荏田南1-12-16	943-8801
こどもの木クリニック	都筑区荏田南3-1-7	947-1888
マサカ小児科内科	戸塚区品濃町523-3　マサカビル1F	823-7866
清田小児科医院	戸塚区戸塚町1505-3	861-3015
小雀小児科医院	戸塚区小雀町1123-2	852-2354
小泉小児クリニック	戸塚区汲沢8-5-5	871-5566

ドリーム小児科	戸塚区俣野町1404-8	851-3661
東戸塚小児クリニック	戸塚区品濃町535-2　ニューシティ東戸塚タワーズシティ1st302	825-1799
吉田こどもクリニック	栄区野七里1-4-22	891-8888
若竹クリニック	栄区元大橋1-27-5	891-6900
内山小児科医院	栄区笠間2-31-13	892-4090
あいかわこどもクリニック	泉区中田北2-6-14　アイエイチビルⅡ1F	805-6605
渡辺こどもクリニック	泉区西が岡1-13-6	813-1618
緑園こどもクリニック	泉区緑園2-1-6-201	810-0555
はっとり小児科	泉区和泉町2860-1	804-4153
瀬谷こどもクリニック	瀬谷区中央1-10　カサ・デ・パティオ2F	304-0045
池部小児科・アレルギー科	瀬谷区三ツ境21-10	360-6080
清水小児科	瀬谷区阿久和西3-1-13　あくわメディカルヴィレッジ内	360-9191
ひかりこどもクリニック	瀬谷区相沢2-60-6	306-1066

眼科定点(18)

医療機関名	所在地	電話番号
ちぐさ眼科医院	鶴見区鶴見中央4-16-3　トミヤビル4F	502-0222
安田眼科医院	神奈川区反町1-6-12　リキヘリアンサス1F	313-2022
秋山眼科医院	中区尾上町3-28	641-9361
山科眼科	南区別所3-8-3	731-0010
池袋眼科医院	港南区上大岡西1-18-5　ミオカM202	842-0380
小野江眼科	保土ケ谷区帷子町1-12	335-2171
塚原眼科医院	旭区二俣川1-5　丸伊ビル2F	363-1102
洋光台眼科クリニック	磯子区洋光台3-13-5-110	835-0143
おいかわ眼科	金沢区能見台通8-1-2F	784-8558
つなしま眼科	港北区綱島西2-13-9　ヴィラ綱島ビル1F	531-7132
ひよし眼科	港北区日吉本町1-4-18　平林ビル1F	562-5331
中山北口眼科	緑区中山町306-1　ミヨシズシードビル502	930-3090
眼科中井医院	青葉区美しが丘2-14-7	905-5777
木崎眼科	青葉区青葉台2-9-10　第3フジモトビル2F	985-3719
浜崎眼科医院	都筑区勝田町1298-2	949-4222
秋元眼科医院	戸塚区柏尾町1016	822-2520
緑園都市眼科後藤クリニック	泉区緑園4-1-2　緑園都市ライフ2F	813-2277
高橋眼科クリニック	瀬谷区橋戸2-31-3　グランデュールプラザ2F	302-6337

性感染症定点(27)

医療機関名	所在地	電話番号
さなだ医院	鶴見区鶴見中央4-2-3	501-1117
熊切産婦人科	鶴見区豊岡町10-2	571-0211
原産科婦人科クリニック	神奈川区六角橋1-30-4	401-9511
コシ産婦人科医院	神奈川区白楽71-8	432-2525
横浜相鉄ビル皮膚・泌尿器科医院	西区北幸1-11-5　相鉄KSビル2F	311-3208
石橋泌尿器科皮フ科クリニック	中区長者町9-166-1　ソフィアヨコハマ1F	263-0820
公平泌尿器科医院	南区井土ケ谷下町213　第2江洋ビル4F	713-6311
中尾泌尿器科医院	港南区上大岡西1-19-17　ロッキーイケダ第2ビル4F	845-9620
木下クリニック	港南区丸山台3-11-15	843-4310
杉本皮膚科	保土ケ谷区川辺町2-2　パイロットハウス星川B-108	333-4422
浅井皮膚科クリニック	保土ケ谷区帷子町1-14	334-3412

小関産婦人科医院	旭区二俣川2-62-7	363-0660
希望が丘いずみクリニック	旭区中希望が丘236-19	391-0567
たけだ泌尿器科クリニック	磯子区杉田1-17-1　プララSUGITA201	771-3055
小野医院	金沢区洲崎町5-41	701-8771
片桐レディースクリニック	金沢区谷津町153-3	780-5513
新横浜母と子の病院	港北区鳥山町650-1	472-2911
市川宝クリニック	港北区綱島西1-11-18	543-1103
あまかす医院	緑区白山1-1-3	931-2404
レディースクリニック服部	青葉区美しが丘5-3-2	902-0303
ワキタ産婦人科	青葉区藤が丘2-6-1	973-7081
聖ローザクリニック　センター北	都筑区中川中央1-29-24　アビテノール3C	914-6355
山本内科・タワーズ皮膚科	戸塚区品濃町535-2　中央街区D棟306	825-5871
坂西医院泌尿器科	戸塚区矢部町645-10	862-5677
オカノ泌尿器科皮フ科医院	栄区笠間5-20-19　斉藤ビル2F	891-5860
泌尿器科あべクリニック	泉区中田西1-1-27　ネクストアイ3F	805-5808
まきずみ泌尿器科	瀬谷区瀬谷3-1-29　瀬谷メディカルプラザ2階	300-3711

基幹病院定点(3)

医療機関名	所在地	電話番号
済生会横浜市南部病院	港南区港南台3-2-10	832-1111
横浜市立市民病院	保土ケ谷区岡沢町56	331-1961
昭和大学藤が丘病院	青葉区藤が丘1-30	974-8143

病原体定点(16)

医療機関名	所在地	電話番号
古谷小児科(小児科)	鶴見区潮田町2-113-1	501-9160
室橋内科医院(内科)	中区本牧三之谷23-16	621-0139
とみい眼科(眼科)	中区伊勢佐木町6-143-2　ITビル1F	261-1103
片山こどもクリニック(小児科)	港南区上大岡西2-3-6　ビルディングアルダ2F	844-7577
横浜市南部病院(基幹)	港南区港南台3-2-10	832-1111
横浜市立市民病院(基幹)	保土ヶ谷区岡沢町56	331-1961
さいとう小児科(小児科)	磯子区岡村7-20-14	752-4882
石井内科医院(内科)	港北区日吉本町6-26-5	561-4704
あべこどもクリニック(小児科)	港北区箕輪町2-15-22	566-2112
有本小児科内科(小児科)	青葉区美しが丘2-20-18　ドムス有本101	901-6870
はやし小児科医院(小児科)	青葉区松風台13-5	983-3254
昭和大学藤が丘病院(基幹)	青葉区藤が丘1-30	974-8143
内科小児科むかひら医院(内科)	戸塚区汲沢1-39-24	861-4160
中条小児科医院(小児科)	栄区上之町8-7	892-2583
瀬谷こどもクリニック(小児科)	瀬谷区中央1-10　カサ・デ・パティオ2F	304-0045
清水小児科(小児科)	瀬谷区阿久和西3-1-13	360-9191

疑似症定点（単独は56定点、 内科定点59、小児科定点91を加え206定点）

医療機関名	所在地	電話番号
クリニック寺尾	鶴見区馬場4-40-12	571-0792
鶴見クリニック	鶴見区豊岡町6-9　サンワイズビル3F	584-8233
くらた内科クリニック	鶴見区豊岡町2-3　フーガ3ビル505号室	576-3370
岡本こどもクリニック	鶴見区豊岡町7－7　鶴見駅西口医療ビル一階	570-0377
あしほ総合クリニック	鶴見区鶴見中央3-10	508-3611
井関医院	神奈川区栄町6-1　ヨコハマポートサイドロア弐番館1F	451-6864
ななしまクリニック	神奈川区七島町161-5	401-9884
神之木クリニック	神奈川区西寺尾3-25-19-4F	435-0113
三ツ沢ハイタウンクリニック	西区宮ヶ谷25-2　三ツ沢ハイタウン1-110	312-0290
いちの内科クリニック	西区平沼1-2-12　甘糟平沼ビル2階	314-1125
中島医院	中区大和町2-34-5　山手駅前クリニックビル1F	621-8713
南永田診療所	南区永田みなみ台2-12-102	714-4880
上六ッ川内科クリニック	南区六ッ川1-873-3	306-8026
横浜ひまわりクリニック	南区西中町4-72	231-5550
岡内科クリニック	港南区上大岡西1-19-18　長瀬ビル3F	841-0133
後藤内科医院	港南区日野7-4-6	842-3664
諏訪クリニック	港南区港南台2-11-17	834-1651
豊福医院	港南区上永谷3-18-16	844-2255
新桜クリニック	保土ケ谷区新桜ヶ丘2-24-12-2F	352-4482
くぬぎ台診療所	保土ケ谷区川島町1404　くぬぎ台団地1-5-104	371-5278
小泉内科・胃腸科クリニック	保土ケ谷区星川1-4-5	331-3325
西山皮膚科	旭区中希望が丘100-4　希望が丘センタービル2F	360-7538
いわま内科クリニック	旭区今宿西町475	958-2377
白根診療所	旭区白根5-16-30	953-8881
つくしクリニック	旭区今宿2-63-14	360-0028
藤田小児科	磯子区杉田1-20-22　三葉ビル	771-2671
土屋内科医院	磯子区栗木1-20-5	773-0011
小谷医院	金沢区能見台3-7-7	773-5551
山口診療所	金沢区釜利谷東2-20-9　クリニックビル2F	785-3912
とみおか診療所	金沢区富岡東6-1-3	773-7213
富岡皮膚科クリニック	金沢区富岡西7-3-3　斉木ビル2階	773-2212
高田中央病院	港北区高田西2-6-5	592-5557
大倉山記念病院	港北区樽町1-1-23	531-2546
えびすクリニック	港北区綱島西2-7-2　第7吉田ビル2・3F	546-8611
日横クリニック	港北区日吉本町1-20-16　日吉教養センタービル2F	563-4115
まつみ医院	港北区日吉本町5-4-1	561-9300
佐々木消化器科内科	港北区綱島東2-12-19　福島クリニックビル3F	545-4588
鴨居小児科内科医院	緑区鴨居1-3-13-107号	935-3281
さいとうクリニック	緑区北八朔町1208-1	932-6555
松田クリニック	青葉区美しが丘西2-6-3	909-0130
さつきが丘こどもクリニック	青葉区さつきが丘4-10　アモンクール1F	971-2239
井上小児科医院	青葉区市ヶ尾町1167-1　ラバーブル昌和1F	972-0250
川瀬医院	青葉区田奈町45-6	981-3111
あざみ野皮膚科	青葉区あざみ野2-9-11　サンサーラあざみ野ビル3F	905-1241
山本皮フ科クリニック	青葉区新石川3-15-16　メディカルモールたまプラーザB1F	910-5033
山口医院	都筑区中川1-5-9	912-2188

小川メディカルクリニック	都筑区荏田南3-37-15　横浜青葉クリニックセンター2F	943-6566
荒井皮膚科クリニック	都筑区茅ヶ崎南3-1-60　ザ・グレイス2F	945-1112
うえの小児科クリニック	戸塚区吉田町944-5　KAWARA1F	869-0311
ゆめはまクリニック	戸塚区舞岡町3406	828-2007
わかば医院	戸塚区深谷町55-71	851-3232
しばた医院	戸塚区戸塚町2810-8　土屋クリニックビル1F	865-6666
よしい内科クリニック	戸塚区汲沢1-10-46　踊場メディカルセンター2F	861-2511
山崎脳神経外科	栄区長沼町188-8	871-3996
杉本医院	栄区柏陽20-27	891-5417
みたに内科循環器科クリニック	泉区和泉町3839-1　フォレストいずみ中央	806-5067

横浜市感染症発生動向調査事業実施要綱

制　　定　平成12年11月27日衛感第340号（局長決裁）
最近改正　平成20年5月12日健健安第270号（局長決裁）

第1　趣旨

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」の施行に伴い、厚生労働省が定めた「感染症発生動向調査事業実施要綱」（以下「国要綱」という。）を基本に、横浜市において、感染症発生動向調査事業を実施するために必要な事項を定める。

第2　対象感染症

本事業の対象とする感染症は次のとおりとする。

1　全数把握の対象

一類感染症

(1)エボラ出血熱、(2)クリミア・コンゴ出血熱、(3)痘そう、(4)南米出血熱、(5)ペスト、(6)マールブルグ病及び(7)ラッサ熱

二類感染症

(8)急性灰白髄炎、(9)結核、(10)ジフテリア、(11)重症急性呼吸器症候群（病原体がコロナウイルス属SARSコロナウイルスであるものに限る）及び(12)鳥インフルエンザ（H5N1）

三類感染症

(13)コレラ、(14)細菌性赤痢、(15)腸管出血性大腸菌感染症、(16)腸チフス及び(17)パラチフス

四類感染症

(18)E型肝炎、(19)ウエストナイル熱（ウエストナイル脳炎を含む）、(20)A型肝炎、(21)エキノコックス症、(22)黄熱、(23)オウム病、(24)オムスク出血熱、(25)回帰熱、(26)キャサヌル森林病、(27)Q熱、(28)狂犬病、(29)コクシジオイデス症、(30)サル痘、(31)腎症候性出血熱、(32)西部ウマ脳炎、(33)ダニ媒介脳炎、(34)炭疽、(35)つつが虫病、(36)デング熱、(37)東部ウマ脳炎、(38)鳥インフルエンザ（H5N1を除く）、(39)ニパウイルス感染症、(40)日本紅斑熱、(41)日本脳炎、(42)ハンタウイルス肺症候群、(43)Bウイルス病、(44)鼻疽、(45)ブルセラ症、(46)ベネズエラウマ脳炎、(47)ヘンドラウイルス感染症、(48)発しんチフス、(49)ボツリヌス症、(50)マラリア、(51)野兎病、(52)ライム病、(53)リッサウイルス感染症、(54)リフトバレー熱、(55)類鼻疽、(56)レジオネラ症、(57)レプトスピラ症、(58)ロッキー山紅斑熱

五類感染症（全数）

(59)アメーバ赤痢、(60)ウイルス性肝炎（E型肝炎及びA型肝炎を除く）、(61)急性脳炎（ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く）、(62)クリプトスポリジウム症、(63)クロイツフェルト・ヤコブ病、(64)劇症型溶血性レンサ球菌感染症、(65)後天性免疫不全症候群、(66)ジアルジア症、(67)髄膜炎菌性髄膜炎、(68)先天性風しん症候群、(69)梅毒、(70)破傷風、(71)バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症、(72)バンコマイシン耐性腸球菌感染症、(73)風しん、(74)麻しん

新型インフルエンザ等感染症

(100)新型インフルエンザ、(101)再興型インフルエンザ

2　定点把握の対象

五類感染症（定点）

（75）RSウイルス感染症、（76）咽頭結膜熱、（77）A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、（78）感染性胃腸炎、（79）水痘、（80）手足口病、（81）伝染性紅斑、（82）突発性発しん、（83）百日咳、（84）ヘルパンギーナ、（85）流行性耳下腺炎、（86）インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）、（87）急性出血性結膜炎、（88）流行性角結膜炎、（89）性器クラミジア感染症、（90）性器ヘルペスウイルス感染症、（91）尖圭コンジローマ、（92）淋菌感染症、（93）クラミジア肺炎（オウム病を除く）、（94）細菌性髄膜炎、（95）ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、（96）マイコプラズマ肺炎、（97）無菌性髄膜炎、（98）メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、（99）薬剤耐性緑膿菌感染症

法第14条第1項に規定する厚生労働省令で定める疑似症

（102）摂氏38度以上の発熱及び呼吸器症状（明らかな外傷又は器質的疾患に起因するものを除く。）若しくは（103）発熱及び発しん又は水疱（ただし、当該疑似症が二類感染症、三類感染症、四類感染症又は五類感染症の患者の症状であることが明らかな場合を除く。）

3　オンラインシステムによる積極的疫学調査結果の報告の対象

二類感染症

（12）鳥インフルエンザ（H5N1）

第3　実施主体

実施主体は、健康福祉局健康安全課（以下「健康福祉局」という。）、衛生研究所及び各区福祉保健センターとする。

第4　実施体制の整備

1　横浜市感染症情報センター

地方感染症情報センターとして横浜市感染症情報センター（以下「感染症情報センター」という。）を、衛生研究所感染症・疫学情報課内に設置する。感染症情報センターは、横浜市内における患者情報、疑似症情報及び病原体情報を収集・分析し、健康福祉局及び各区福祉保健センターへ報告するとともに、全国情報と併せて、これらを速やかに医師会等の関係機関に提供・公開する。

2　指定届出機関（定点）

健康福祉局は、定点把握対象の五類感染症について、患者情報、疑似症情報及び病原体情報を収集するため、患者定点、疑似症定点及び病原体定点をあらかじめ選定し、神奈川県へ進達する。

3　横浜市感染症発生動向調査委員会

横浜市内における感染症に関する情報の収集、分析の効果的・効率的な運用を図るため、疫学等の専門家、福祉保健センター及び衛生研究所の代表、医師会の代表等からなる横浜市感染症発生動向調査委員会（以下「感染症委員会」という。）を置く。

感染症委員会の事務局は感染症情報センター及び健康福祉局とし、感染症委員会の運営については、横浜市感染症発生動向調査委員会設置運営要綱に定める。

第5　事業の実施

1　一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、新型インフルエンザ等感染症、指定感染症及び全数把握対象の五類感染症

(1)　調査単位及び実施方法

ア　診断した医師

国要綱に定めるとおりとする。

イ　福祉保健センター

(ア)　当該届出を受けた福祉保健センターは、速やかに国が定める届出基準を参照し、届出の内容が合致するかどうか点検を行う。記載もれや不明な点は、届出を行った医師に確認し、必要に応じて補記・補正を行い、発生届を感染症情報センター及び健康福祉局に送付する。

また、当該患者(四類感染症については、第2の(20)及び(50)を除く。また、全数把握対象の五類感染症については、第2の(59)、(61)、(63)、(64)、(65)、(67)、(68)、(70)、(71)、(72)、(73)又は(74)とする。)を診断した医師に対して、必要に応じて病原体検査のための検体又は病原体情報の衛生研究所への提供について、別記様式「一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症検査票(病原体)」を添付して依頼する。

(イ)　福祉保健センターは、オ(ア)により衛生研究所から検体の検査結果の通知があった場合は、診断した医師に別記様式「一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症検査票(病原体)(医療機関あて検査結果通知用)」により速やかに送付する。

ウ　健康福祉局

(ア)　健康福祉局は、福祉保健センターからイ(ア)による送付があった場合は、直ちに、内容の点検等を行ったうえで、感染症情報センターと連絡もれがないか等、確認する。

(イ)　健康福祉局は、届出を受けた感染症にかかる発生状況や感染症情報センターから提供のあった患者情報及び病原体情報等について、必要に応じ、区内の関係機関に情報提供し連携を図る。

エ　感染症情報センター

(ア)　感染症情報センターは、福祉保健センターからイ(ア)による送付があった場合は、直ちに、届出内容を感染症発生動向調査システムに入力する。

(イ)　感染症情報センターは、横浜市域内の全ての患者情報及び病原体情報(検査情報を含む。)を収集、分析するとともに、その結果を週報(月単位の場合は月報)等として公表される都道府県情報、全国情報と併せて、健康福祉局、福祉保健センター、指定医療機関その他の関係医療機関、医師会、教育委員会等の関係機関に提供・公開する。

オ　衛生研究所

（ア）　衛生研究所は、別記様式「一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症検査票（病原体）」及び検体又は病原体情報が送付された場合にあっては、当該検体を検査し、その結果を別記様式「一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症検査票（病原体）（福祉保健センターあて結果通知用）」により福祉保健センターに送付する。また、感染症発生動向調査に必要な項目をコンピュータ・オンラインシステムにより、中央感染症情報センターへ伝送する。

（イ）　検査のうち、衛生研究所において実施することが困難なものについては、必要に応じて国立感染症研究所に検査を依頼する。

（ウ）　衛生研究所は、患者が一類感染症と診断されている場合、横浜市域を超えた集団発生があった場合等の緊急の場合にあっては、検体を国立感染症研究所に送付する。

2　定点把握対象の五類感染症

（1）　対象とする感染症の状態

国要綱に定めるとおりとする。

（2）　定点の選定

ア　患者定点

定点把握対象の五類感染症の発生状況を把握するため、健康福祉局は、人口及び医療機関の分布等を勘案してできるだけ横浜市全体の感染症の発生状況を把握できるよう考慮し、医師会等の協力を得て、医療機関の中から可能な限り無作為に患者定点を選定する。

なお、患者定点の種類、その対象疾患及び定点数については、国要綱に定めるとおりとする。

イ　病原体定点

病原体の分離等の検査情報を収集するため、健康福祉局は、原則として、患者定点として選定された医療機関の中から病原体定点を選定する。

なお、病原体定点の種類、その対象疾患及び定点数については、国要綱に定めるとおりとする。

（3）　調査単位等

国要綱に定めるとおりとする。

（4）　実施方法

ア　患者定点

（ア）　患者定点として選定された医療機関は、速やかな情報提供を図る趣旨から、調査単位の期間の診療時において、国が定める報告基準により、患者発生状況の把握を行う。

（イ）　2の（ア）により選定された定点把握対象の指定医療機関においては、国が定める基準及び様式に従い、それぞれ調査単位の患者発生状況等を記載する。

（ウ）　（イ）の患者発生状況等の情報については、ファクシミリにより福祉保健センターへ送付する。

イ　病原体定点

（ア）　病原体定点として選定された医療機関は、国が定める病原体検査指針により、微生物学的検査のために検体を採取する。

（イ）　病原体定点で採取された検体は、別記様式「病原体定点からの検査依頼書」を添えて、速やかに衛生研究所へ送付する。

ウ　福祉保健センター

福祉保健センターは、ア(ウ)により定点把握対象の指定医療機関から得られた患者情報を、調査単位が週単位の場合は調査対象の週の翌週の火曜日までに、月単位の場合は調査対象月の翌月の3日までに、感染症情報センターへ送付する。

また、対象感染症についての集団発生その他特記すべき情報があれば、感染症情報センター及び健康福祉局へ報告する。

エ　健康福祉局

福祉保健センターは、感染症情報センターから情報提供のあった患者情報及び病原体情報について、必要に応じ、区内の関係機関に情報提供し連携を図る。

オ　感染症情報センター

(ア)　感染症情報センターは、福祉保健センターからウにより患者情報の送付があり次第、感染症発生動向調査システムに入力する。

(イ)　感染症情報センターは、横浜市域内の全ての患者情報及び病原体情報を収集、分析するとともに、その結果を週報(月単位の場合は月報)等として公表される都道府県情報、全国情報と併せて、健康福祉局、福祉保健センター、指定医療機関その他の関係医療機関、医師会、教育委員会等の関係機関に提供・公開する。

カ　衛生研究所

(ア)　衛生研究所は、イ(イ)により別記様式「病原体定点からの検査依頼書」及び検体が送付された場合にあっては、当該検体を検査し、その結果を病原体情報として、別記様式「病原体定点からの検査依頼書(医療機関あて検査結果通知用)」により病原体定点に通知するとともに、感染症発生動向調査に必要な病原体情報をコンピュータ・オンラインシステムにより、中央感染症情報センターへ伝送する。

(イ)　検査のうち、衛生研究所において実施することが困難なものについては、必要に応じて国立感染症研究所に検査を依頼する。

(ウ)　衛生研究所は、横浜市域を超えた集団発生があった場合等の緊急の場合にあっては、検体を国立感染症研究所に送付する。

3　法第14条第1項に規定する厚生労働省令で定める疑似症

(1)　対象とする感染症の状態

国要綱に定めるとおりとする。

(2)　疑似症定点の選定

疑似症の発生状況を把握するため、健康福祉局は、人口及び医療機関の分布等を勘案してできるだけ横浜市全体の感染症の発生状況を把握できるよう考慮し、医師会等の協力を得て、医療機関の中から可能な限り無作為に疑似症定点を選定する。

なお、疑似症定点の種類及び定点数については、国要綱に定めるとおりとする。

(3) 実施方法

ア 疑似症定点

(ア) 疑似症定点として選定された医療機関は、速やかな情報提供を図る趣旨から、診療時において、国が定める報告基準により、直ちに疑似症発生状況の把握を行う。

(イ) (2)により選定された定点把握の対象の指定届出機関においては、国が定める基準に従い、直ちに疑似症発生状況等を記載する。なお、当該疑似症の届出については、原則として症候群サーベイランスシステムへの入力により実施する。

(ウ) (イ)の届出に当たっては法施行規則第7条に従い行う。

イ 健康福祉局

保健所は、疑似症の発生状況等を把握し、市町村、指定医療機関その他の関係医療機関、医師会、教育委員会等の関係機関に発生状況等を提供し連携を図る。

ウ 感染症情報センター

(ア) 感染症情報センターは、疑似症定点において症候群サーベイランスシステムへの入力を実施することができない場合、当該疑似症定点から得られた疑似症情報を、直ちに、症候群サーベイランスシステムに入力する。

また、対象疑似症についての集団発生その他特記すべき情報があれば、健康福祉局へ報告する。

(イ) 感染症情報センターは、横浜市内の全ての疑似症情報を収集、分析するとともに、その結果を週報等として公表される都道府県情報、全国情報と併せて、健康福祉局、福祉保健センター、指定医療機関その他の関係医療機関、医師会、教育委員会等の関係機関に提供・公開する。

5 オンラインシステムによる積極的疫学調査結果の報告の実施方法

(1) 福祉保健センター

鳥インフルエンザ(H5N1)に係る積極的疫学調査を実施した福祉保健センターは、国の定める基準に従い、関係書類を健康福祉局及び感染症情報センターに送付する。医療機関から検体が提出される場合には、感染症情報センターに連絡した上で、医療機関から検体を受け取り、衛生研究所へ搬入する。

(2) 感染症情報センター

ア 感染症情報センターは、(1)により得られた情報を、直ちに疑い症例調査支援システムに入力する。

イ 医療機関より検体が提出される場合には、疑い症例調査支援システムが発行する検査依頼票を打ち出し、衛生研究所に送付する。

(3) 衛生研究所

ア 衛生研究所は、検体が送付された場合にあっては、当該検体を検査し、その内容を直ちに感染症情報センターに送付する。

イ 鳥インフルエンザ(H5N1)に係る積極的疫学調査の結果を厚生労働省に報告する場合にあっては、法施行規則第9条第2項に従い、検体を国立感染症研究所に送付する。検体を送付する場合においては、(2)イにより感染症情報センターから送付された検査依頼票を添付する。

第6 その他

本実施要綱に定める事項以外の内容については、必要に応じて健康福祉局長が定めることとする。

なお、感染症発生動向調査事業については、本要綱に基づき実施することとし、結核発生動向調査事業については、従来の「横浜市結核・感染症発生動向調査事業実施要綱」に基づき実施することとする。

附　則
（施行期日）
1　この実施要綱は、平成15年11月5日から施行する。

附　則
この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

附　則
この要綱は、平成18年6月12日から施行する。

附　則
この要綱は、平成19年4月1日から施行する。

附　則
（施行期日）
1　この要綱は、平成20年1月1日から施行する。
（経過措置）
2　改正前の要綱の規定により調製した帳票で現に残存するものについては、当分の間、必要なか所を訂正した上、引き続きこれを使用することができる。

附　則
（施行期日）
1　この要綱は、平成20年5月12日から施行する。
（経過措置）
2　改正前の要綱の規定により調製した帳票で現に残存するものについては、当分の間、必要なか所を訂正した上、引き続きこれを使用することができる。

別記様式一覧表

一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症検査票（病原体）（4枚複写式）

（医療機関控）

（福祉保健センター控）

（福祉保健センターあて検査結果通知用）

（医療機関あて検査結果通知用）

病原体定点からの検査依頼書（3枚複写式）

（医療機関控）

（衛生研究所控）

（医療機関あて検査結果通知用）

横浜市感染症発生動向調査委員会設置運営要綱

最近改正　平成18年3月10日　衛感第10396号（局長決裁）

（設置）

第1条　横浜市内における感染症に関する情報の収集、分析の効果的、効率的な運用を図るため、横浜市感染症発生動向調査委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（所掌事務）

第2条　委員会は、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（平成10年法律第114号。以下「法」という。）第16条の規定に基づき、法第12条から第15条までの規定により収集した感染症に関する情報について分析を行い、感染症の予防のための情報を積極的に公表する。

（組織）

第3条　委員会は、委員6人をもって組織する。

2　委員は、次の各号に掲げる者のうちから健康福祉局長が任命する。

(1) 学識経験者

(2) 横浜市医師会を代表する者

(3) 福祉保健センター及び衛生研究所の代表

（委員の任期）

第4条　委員の任期は、3年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2　委員は、再任されることができる。

（委員長及び副委員長）

第5条　委員会に、委員長及び副委員長1人を置く。

2　委員長及び副委員長は、委員の互選によって定める。

3　委員長は、委員会を代表し、会務を総理し、会議の議長となる。

4　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

（招集）

第6条　委員会の会議は、委員長が毎月1回、その他必要に応じて招集する。

（議事の運営）

第7条　委員会の会議は、委員の半数以上の出席がなければ開くことができない。ただし、緊急その他やむを得ない理由があるときはこの限りでない。

（関係者の出席等）

第8条　委員長は、委員会において必要があると認めるときは、関係者の出席を求めてその意見若しくは説明を聴き、又は関係者から必要な資料の提出を求めることができる。

（庶務）

第9条　委員会の庶務は、健康福祉局において処理する。

（その他）

第10条　本要綱に定める他、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附　則

（施行期日）

1　この要綱は、平成14年1月1日から施行する。

（経過措置）

2　この要綱の施行後最初の委員会の会議は、衛生局長が招集する。

附　則

この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

平成22年1月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年1月28日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- **インフルエンザが警報解除レベルの「10」を下回り、1月21日警報が解除されました。**
- **焼肉チェーン店での腸管出血性大腸菌感染症の報告が相次ぎました。**
- **感染性胃腸炎が増加しています。**
- **RSウイルス感染症の報告数が増加しています。**

平成21年12月21日から平成22年1月24日まで、ただし、性感染症については平成21年12月分の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成21及び22年　週－月日対照表

第52週	12月21～27日
第53週	12月28日～1月3日
第 1週	1月 4～10日
第 2週	1月11～17日
第 3週	1月18～24日

全数把握の対象

1 **細菌性赤痢**:1例報告があり、渡航地はマリでした。
渡航予定の際は、予定地の安全情報を確認しましょう。
安全情報についてはこちらをご参考下さい。
http://www.anzen.mofa.go.jp/ （外務省　海外安全ホームページ）

2 **アメーバ赤痢**:4例報告があり、前月の追加報告も2例ありました。うち4例は国内での感染が疑われます。
アメーバ赤痢についてはこちらをご参考下さい。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/entamoeba1.html （横浜市衛生研究所）

3 **腸管出血性大腸菌感染症**:5例報告があり、前月の追加報告も2例ありました。うち2例は、同じ焼肉チェーン店での感染です。他自治体からの同チェーン店での感染事例は20件以上と多数報告されています。
外食、中食、内食を問わず、肉類の喫食の際の充分な加熱について、注意喚起が必要と思われます。
予防対策についてはこちらをご参考下さい。
http://www.mhlw.go.jp/za/0818/c07/c07.html （厚生労働省医薬品食品局）

4 **HIV感染症**:3例報告があり、うち1例は既にAIDSを発病していました。また、うち1例は梅毒との重感染でした。
HIV感染症に関しては、薬剤等治療の進歩等著しいとはいえ、AIDSの段階では治療に難渋することもあり、早い時期の診断が大切です。
HIV感染症についてはこちらをご参考下さい。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hiv.html （横浜市衛生研究所）

5 **梅毒**:2例が報告され、前月の追加報告も2例ありました。
性感染症は予防が何より大切ですが、ここ数年報告数は減っていません。
性感染症に関する正しい知識の普及が必要です。
性感染症についてはこちらをご参考下さい。
http://idsc.nih.go.jp/iasr/29/343/tpc343-j.html （国立感染症情報センター）

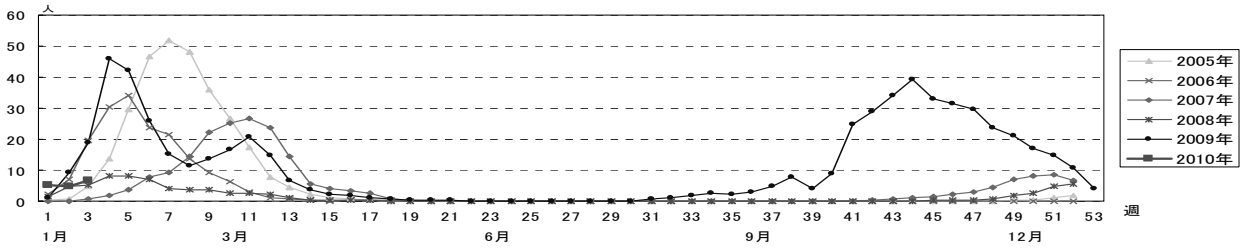
6 **麻しん**:3例が報告され、前月の追加報告も1例ありました。ワクチン接種前の1歳児の感染も報告されました。
1歳の誕生日を迎えたら、すぐにMRの予防接種をするよう勧奨する必要があります。
麻しんについてはこちらをご参考下さい。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/measle1.html （横浜市衛生研究所）

7 **バンコマイシン耐性腸球菌（VRE）感染症**:前月以前の追加報告が10例あり、8例の耐性遺伝子がvanCで、1例はvanB、1例は不明でした。臨床的に問題になるのはvanA、vanBですが、通常無菌であるべき検体よりvanCのVREが検出された場合も届出が必要です。
VREについてはこちらをご参考下さい。
http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g1/k02_16/k02_16.html （国立感染症情報センター）

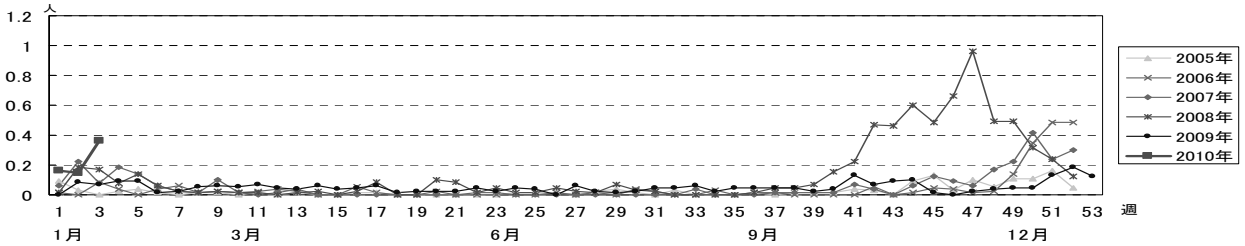
定点把握の対象

1 **インフルエンザ：**市内流行状況については、第32週（8月3日からの週）に流行の目安となる定点あたりの報告数（以下略）1を超え、第44週には39.18と今シーズン最大となりました。第2週は4.70でしたが、第3週は6.70と微増しています。全国で9.03、神奈川県（横浜、川崎を除く、以下県域）8.00、川崎市7.28、東京都6.59でした。

定点医療機関からご協力頂いている迅速診断キットの結果は、A型744件、B型7件、AB陽性が4件でした。施設閉鎖は、第44週は269施設、患者4,969人でしたが、第2週は5施設33人、第3週は14施設123人とやはり微増しています。1月28日現在、季節性インフルエンザは検出されていません。

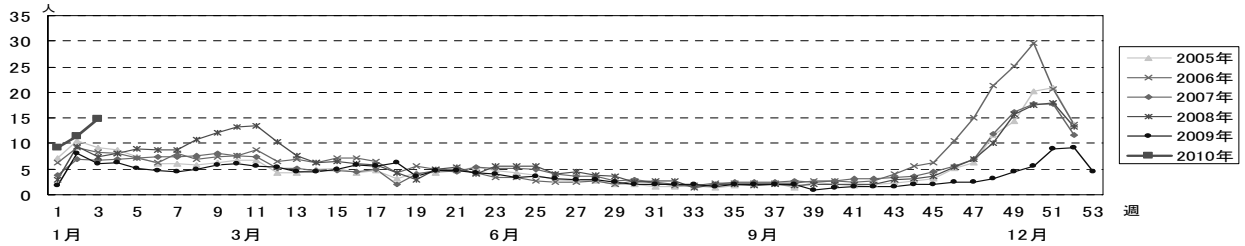


2 **RSウイルス感染症：**例年冬季に流行が見られる小児の重要な感染症であり、第3週は、0.36と増加しています。全国で1.30、県域0.57、川崎市0.38、東京都0.60でした。この時期では過去5年で最大の報告となっており、今後の推移が注目されます。



3 **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎：**第3週は1.83です。過去5年間でも高めで推移しています。行政区別情報では、港北区7.00、磯子区5.33、栄区3.67と続きます。全国では1.33、県域1.02、川崎市1.09、東京都1.60です。

4 **感染性胃腸炎：**第3週は14.86です。例年11月から立ち上がり、12月にピークを迎えますが、今期は1月に入って立ち上がり、報告数としてはこの時季では過去5年間で最大となっています。行政区別では緑区31.33、神奈川区25.50、旭区24.17、泉区20.00と4区が警報レベルの20を超えています。全国13.81、県域17.53、川崎市19.44、東京都16.65と、近隣自治体も報告数が増加しています。市内では集団感染も報告されており、今後は例年のように立ち上がってからの数週間は増加傾向となるのか、今後の動向に注意が必要です。



5 **性感染症：**性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

12月は、11月に比べて全体としては大きな変化はありません。性器クラミジア感染症は、男性14例、女性18例でした。性器ヘルペスウイルス感染症は、男性6例、女性4例です。尖圭コンジローマは、男性2例、女性4例、淋菌感染症は、男性11例、女性2例でした。

http://idsc.nih.go.jp/iasr/29/343/tpc343-j.html （国立感染症情報センター）

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年2月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年2月25日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- **インフルエンザ検出状況は、市内ではすべて新型インフルエンザのみです。**
- **感染性胃腸炎は、緑区、泉区、神奈川区が警報レベルです。**
- **流行性耳下腺炎は、瀬谷区、泉区が注意報レベルです。**
- **麻しんの家族感染と、学級内感染が認められました。全員に予防接種歴が1回もありませんでした。**

平成22年1月25日から2月21日まで(平成22年第4週から第7週まで。ただし、性感染症については平成22年1月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年 週ー月日対照表	
第4週	1月25～31日
第5週	2月 1～ 7日
第6週	2月 8～14日
第7週	2月15～21日

全数把握の対象

1 **麻しん**:2008年1月から感染症法における5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。

http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html (国立感染症情報センター)

2月は24日現在で11例の届出があり、うち5例はきょうだいであり、全員予防接種歴が1回もありませんでした。さらに2例はきょうだいのクラスメイトで、やはり1回も予防接種歴がありませんでした。中学1年、高校3年相当の年齢にMRのⅢ期、Ⅳ期が行われるのは、2008年から2012年までです。ワクチン接種による予防の大切さを周知していく必要があります。

2 **急性脳炎**:1例の届出があり、1月以前の追加届出も4例ありました。新型インフルエンザによるものが2例、迅速診断キットでインフルエンザA型陽性が2例、1例は原因病原体不明です。

3 **腸管出血性大腸菌感染症**:1月の追加届出が2例ありました。2例とも、レバーの生食によるものでした。内臓を含む肉類には充分な加熱が必要です。

一次医療機関の腸管出血性大腸菌感染症の対応については、次をご参考下さい。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html (横浜市衛生研究所)

4 **HIV感染症**:1例の報告がありました。すでにAIDSを発病している状態でした。

性感染症は、予防できる疾患です。感染予防が何より大切ですが、仮に感染しても、早い時期に診断できることで、適切な時期に医療が提供でき、パートナーへの感染予防が可能になります。感染予防に加え、検診の機会の周知が必要です。

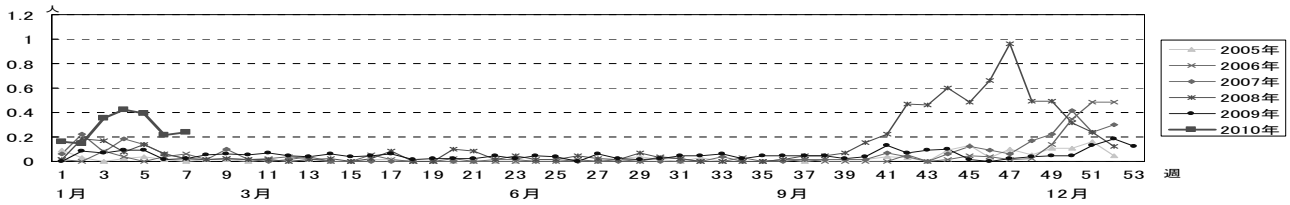
2月12日に発表された厚生労働省エイズ動向委員会報告によりますと、2009年の年間報告の速報値は、国内で新たに報告されたHIV感染者数は1,008件で過去3位、エイズ発症者数は420件で過去2位であり、双方最高だった平成20年より減少していますが、検査が150,252件と昨年より約27,000件減少、相談件数は193,271件と、約37,000件減少しているので、決して増加に歯止めがかかった状態では無いと思われます。

http://api-net.jfap.or.jp/mhw/survey/mhw_survey.htm (エイズ動向委員会報告)

定点把握の対象

1 **インフルエンザ**:今シーズンは、第44週をピークに漸減し、第7週では1.65まで低下しています。この時期としては、例年に比べると報告数が少なく、過去6年で最少となっています。

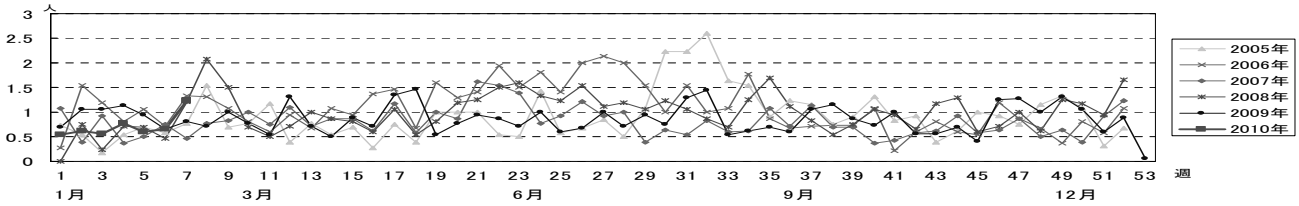
2 **RSウイルス感染症**:定点あたり0.24と、この時期にしては比較的高く推移しています。届出には、抗原の検出かペア血清での抗体検査が必要ですが、抗原の迅速検査が入院対象でしか保険適用が無いために、届出が患者数を直接反映しにくく、定点報告数での比較ができないとされています。



3 **感染性胃腸炎**:例年と異なり、今年に入り上昇が見られています。第7週では定点あたり10.81であり、行政区別では、緑区27.50と警報域であり、泉区17.75、神奈川区16.50と終息基準に達していません。ノロウイルスによる学校等施設内集団感染の報告もありますので、施設管理者の注意が必要です。全国12.45、県域13.20、川崎市15.94、東京都11.55と何れも横浜市より高い値です。

4 **流行性耳下腺炎**:定点あたり0.79ですが、瀬谷区4.00と泉区3.25が注意報のレベルです。全国0.96、県域1.01、川崎市0.22、東京都0.62です。

5 **流行性角結膜炎**:定点あたり1.22ですが、瀬谷区9.00と警報レベルです。全国0.53、県域1.11、川崎市0.86、東京都0.46です。

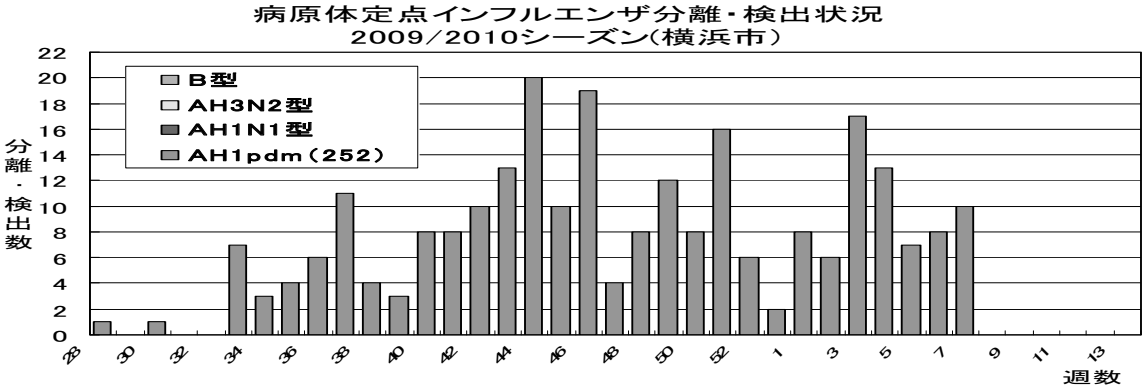


6 **性感染症**:性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。1月は、2009年12月に比べて全体としては横ばいです。性器クラミジア感染症は、男性17例、女性11例でした。性器ヘルペス感染症は、男性7例、女性13例でした。尖圭コンジローマは、男性6例、女性5例でした。淋菌感染症は男性8例、女性3例でした。

病原体検出状況

2月の検出状況は、59件の検体のうち検出されたインフルエンザは35件あり、すべてが新型インフルエンザでした。全国でも新型インフルエンザが主流となっています。また35件中1件はアデノウイルスも同時検出、5件はRSウイルスも同時検出されています。

そのほか、RSウイルスが4件、ノロウイルスGⅡが1件検出されています。



この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年3月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年3月25日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- **インフルエンザの集団感染からB型が検出されました。病原体定点からはまだ検出されていません。季節型インフルエンザのA型は未検出です。**
- **髄膜炎菌性髄膜炎の報告が1件見られました。**
- **水痘の報告が増えています。都筑区が高めです。**
- **伝染性紅斑が増えています。瀬谷区と泉区が高めです。**
- **流行性耳下腺炎が過去5年でも高めに推移しています。**

平成22年2月22日から3月21日まで（平成22年第8週から第11週まで。
ただし、性感染症については平成22年2月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年　週－月日対照表

第 8週	2月22～28日
第 9週	3月 1～ 7日
第10週	3月 8～14日
第11週	3月15～21日

全数把握の対象

1 **腸管出血性大腸菌感染症**：1件の報告がありました。国内での感染です。
感染経路は不明でした。

2 **レジオネラ症**：1件の報告がありました。感染経路は不明です。
全国的にも患者報告数は増加傾向にあります。
2009年は全国で712件（肺炎型681件　ポンティアック型23件無症状病原体保有者8件）でした。

表１．レジオネラ症患者報告数，1999～2008年

診断年	総数	男	女
1999*	56	42	14
2000	154	125	29
2001	86	78	8
2002	167	139	28
2003	147	127	20
2004	160	151	9
2005	281	252	29
2006	518	452	66
2007	668	527	141
2008**	686	529	157

*4～12月、**1～9月
（感染症発生動向調査：2008年10月11日現在報告数）

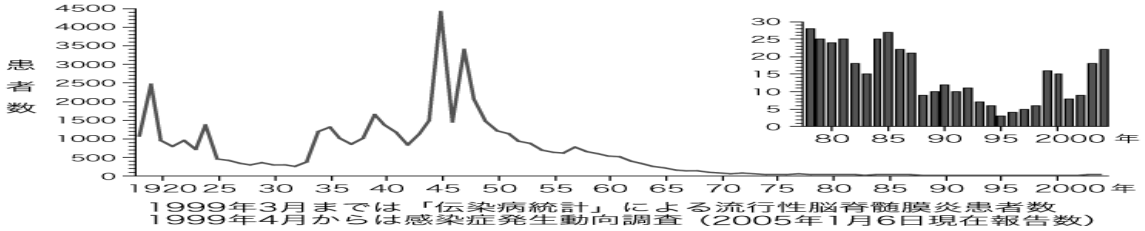
3 **HIV感染症**：2件の報告がありました、2月の追加報告も2件あり、計4件が新たに報告されました。4件のうち、2件はすでにAIDSの状態でした。
HIV感染症については、早い時期の感染の判明で、適切な時期に治療を開始できるほかに、パートナーへの感染予防等が可能なこともありますので、無症状の時期での判明が非常に重要です。

4 **劇症型溶血性レンサ球菌感染症**：1件の報告がありました。
悪性疾患術後でした。

IASR
Infectious Agents Surveillance Report

5 **髄膜炎菌性髄膜炎**：1件の報告がありました。
国内に多いとされるB群髄膜炎菌によるものでした。国内では終戦前後4,000人を超す報告があり、現在では一桁の報告数と著減していますが、アフリカでは「髄膜炎ベルト」と称される高罹患地帯があったり、各国でアウトブレイクが報告されている等世界的には未だ重要な感染症です。諸外国では、健康保菌者は、5～20%と高いのに比べ、日本の健康保菌者は1%以下と低い状況ですが、流行を起こす可能性もあり、注意すべき感染症の一つです。
今回の事例は予防内服等が行われ、感染拡大は見られていません。横浜市での直近の報告は2005年に1件ありました。

図１．髄膜炎菌性髄膜炎患者報告数の推移，1918～2004年

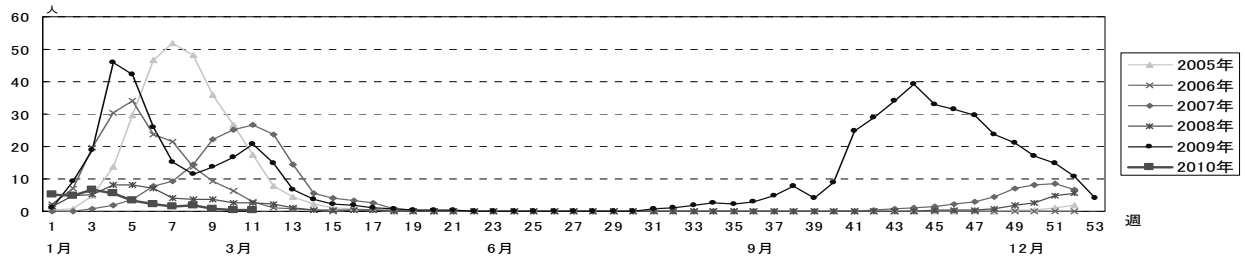


1999年3月までは「伝染病統計」による流行性脳脊髄膜炎患者数
1999年4月からは感染症発生動向調査（2005年1月6日現在報告数）

国立感染症情報センターHPより

定点把握の対象

1 **インフルエンザ**：今シーズンは、昨年第44週にピークを示しましたが、その後漸減し、第11週は、定点あたりの報告数が0.37でした。神奈川県（横浜、川崎を除く県域　以後県域）では0.31、川崎市0.32、東京都0.41、全国0.41と何れも低値です。定点医療機関にご報告いただいている迅速診断キットでは、A型24件、B型28件とB型の報告が多くなっていますが、ピーク時の第44週にはA型4,181件、B型8件でしたので、全体の報告数は著減しています。



2 **RSウイルス感染症**：過去5年で最大の数値で推移していましたが、第11週は0.09と、例年レベルまでに落ち着いてきました。

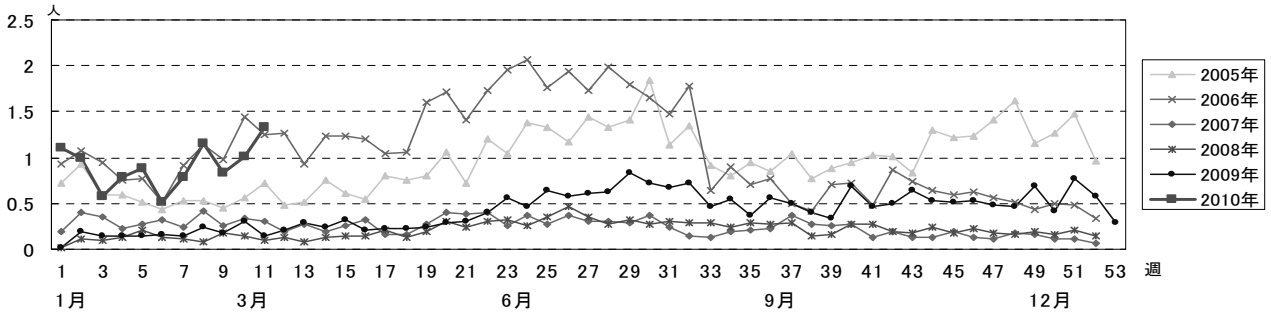
3 **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**：例年、春季を中心とした流行の後に夏季には大きく低下してきます。第11週は定点あたり2.18でした。県域では1.41、川崎市1.72、東京都1.70、全国1.61でした。行政区別では磯子区7.00、港北区4.83、泉区3.67が高めです。

4 **感染性胃腸炎**：今年に入り報告数が増えていましたが漸減し、第11週は8.88でした。県域11.58、川崎市16.19、東京都11.01、全国10.06と何れも横浜市より高めです。行政区別では泉区が18.00と比較的高値です。

5 **水痘**：例年、年末年始にかけて発生が増加しますが、第11週は1.82と漸増しています。県域では1.90、川崎市3.00、東京都2.06、全国1.87でした。行政区別では都筑区8.50、神奈川区4.00、瀬谷区3.00が高めです。

6 **伝染性紅斑**：例年春先から夏にかけて増加が見られますが、第11週は0.49と漸増しています。県域では0.53、川崎市0.34、東京都0.24、全国0.17でした。行政区別では瀬谷区と泉区が2.00と高めです。

7 **流行性耳下腺炎**：過去5年間でも高めに推移しています。第11週は1.32でした。県域では1.24、川崎市0.41、東京都0.69、全国1.157でした。行政区別では泉区と瀬谷区が4.33と高めです。



8 **性感染症**：性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

　2月は、1月に比べて全体としては横ばいですが、淋菌感染症がやや増加しています。性器クラミジア感染症は男性23例女性21例、性器ヘルペス感染症は、男性9例、女性12例、尖圭コンジローマは、男性3例、女性6例、淋菌感染症は、男性15例、女性1例と、1月と同じ状況です。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス　URL　http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年4月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年4月22日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- **4月に、手足口病から、エンテロウイルス71（EV71）が検出されました。EV71は、他の原因ウイルスに比べて重症の合併症が多いので、今後の動向に注意が必要です。**

平成22年3月22日から4月18日まで（平成22年第12週から第15週まで。ただし、性感染症については平成22年3月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年　週－月日対照表

第12週	3月22～28日
第13週	3月29日～4月4日
第14週	4月　5～11日
第15週	4月12～18日

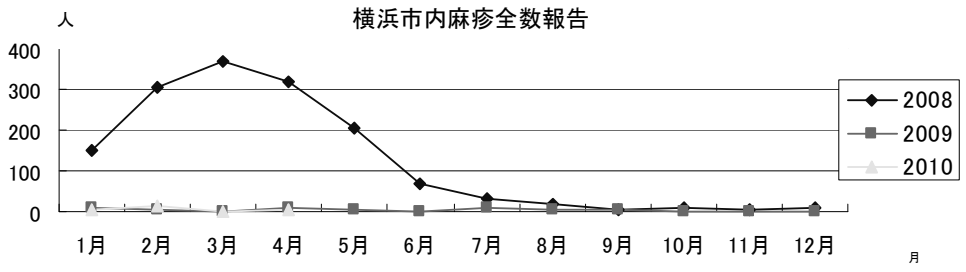
全数把握の対象

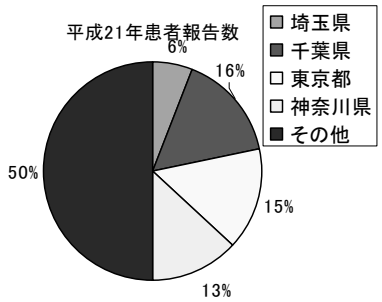
1 **麻しん**：3例の報告がありました。3例とも臨床診断に加え検査診断も行われています。

麻しんの排除を目指して、麻しん患者が減少していくなかで、検査診断は非常に重要です。麻しん特異的IgM抗体検査やペア血清による特異的IgG抗体検査等抗体検査が多く用いられていますが、疫学調査のためには、ウイルスの遺伝子型等性状が把握できるウイルス分離や、PCRのような遺伝子診断が望ましく、検査のためには、感染の早い時期に血液、咽頭ぬぐい液、尿といった検体を採取することが求められます。

麻しん排除のためには全ての年齢で95％以上の抗体保有率が求められますが、平成21年度の全国感染症流行予測調査ではこのレベルに達していないのは、0～1歳を除くと、10歳、15歳のみであり、Ⅲ期、Ⅳ期の予防接種の効果が現れています。

麻疹の検査　http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/360/dj3606.html　（国立感染症情報センター）
抗体保有率　http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/360/dj3602.html　（国立感染症情報センター）
をご参考下さい。





市内では平成20年前半の流行後は大きな流行は見られていませんが、平成21年の報告では、円グラフのとおり、首都4県都の患者数が全国の半数を占めています。迅速な積極的疫学調査のためにも、麻しんを疑われた際は、早めに福祉保健センターへご相談下さい。

2 **マラリア**：1例の報告がありました。三日熱マラリアでした。

世界的に耐性マラリアが問題になっていることもあり、マラリアの治療、診断等はこちらをご参考下さい。
http://idsc.nih.go.jp/disease/malaria/malariaweb/index.html　（国立感染症情報センター）

3 **HIV感染症**：3月の追加報告が5件ありました。

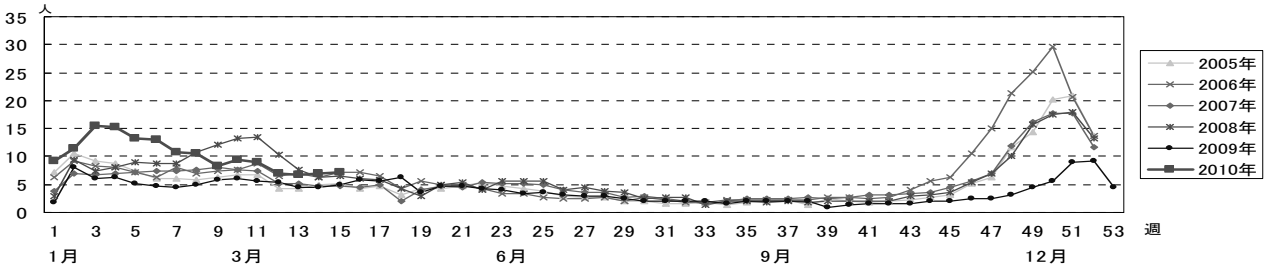
全て男性で、うち3件は、同性間性的接触によるものです。全国でも数年来、男性の同性間性的接触での感染が多く見られています。また、5件とも受診した時には既にAIDSを発病していました。最適な治療のためには、早い時期の診断が望まれます。
http://idsc.nih.go.jp/iasr/30/355/tpc355-j.html　（国立感染症情報センター）

定点把握の対象

1 **インフルエンザ**：第15週は定点あたり0.06と、流行は見られていません。4月に入って、4病原体定点からの5検体に新型インフルエンザが認められています。引き続き耐性等、ウイルスの性状の変異の監視が必要と思われます。第15週の簡易迅速診断キットではA型2件、B型6件でした。

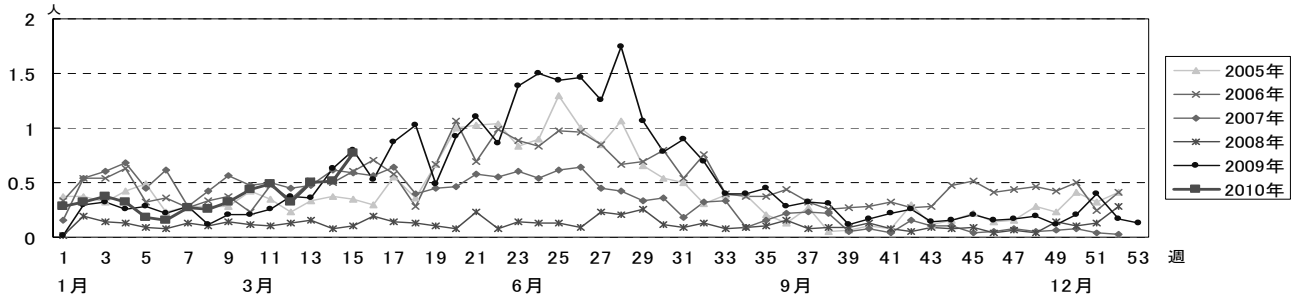
2 **手足口病**：第15週は定点あたり0.18と、流行は見られていません。しかし、市内では4月に入り、エンテロウイルス71（以下EV71）が検出されています。EV71は、過去に死亡例もあり、今後の流行状況の監視が必要です。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/handfoot2.html （横浜市衛研研究所）

3 **感染性胃腸炎**：第15週は定点あたり7.15です。過去5年は12月に流行のピークが見られましたが、今シーズンは1月に入ってから報告増が見られていましたが、例年並みに落ち着いています。全国8.99、神奈川県7.86、東京都8.36です。行政区別では、神奈川区14.50、港南区14.00、磯子区13.67、泉区12.25が高めです。



4 **水痘**：第15週は定点あたり1.72です。全国1.65、神奈川県1.52、東京都1.40です。行政区別では神奈川区4.50、瀬谷区4.00が高めです。

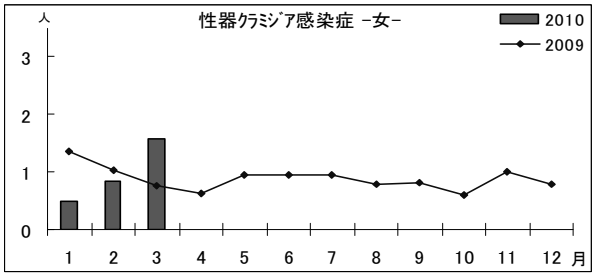
5 **伝染性紅斑**：第15週は定点あたり0.77です。全国0.26、神奈川県0.72、東京都0.52と何れも横浜市より低い値です。行政区別では、瀬谷区5.50、旭区2.67、泉区2.25が高めです。

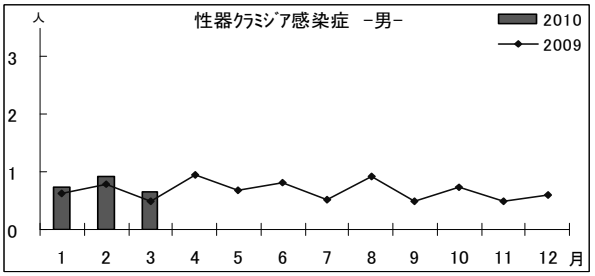


6 **性感染症**：性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

3月は性器クラミジア感染症が男性15件、女性36件、計51件。性器ヘルペス感染症が、男性6件、女性13件、計19件。淋菌感染症が、男性12件、女性1件、計13件でした。

女性の性器クラミジア感染症は、2月の21件に比べると15件と増えています。





この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年5月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年5月27日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が、高めです。**
- **伝染性紅斑が、過去5年と比しやや高めです。**
- **感染性胃腸炎が、過去5年と比しやや高めです。小学校等で集団感染の報告がありました。**
- **水痘が、高めです。**
- **流行性耳下腺炎が、過去5年と比し高めです。**

平成22年4月19日から5月23日まで（平成22年第16週から第20週まで。
ただし、性感染症については平成22年4月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年	週ー月日対照表
第16週	4月19～25日
第17週	4月26日～5月2日
第18週	5月 3～ 9日
第19週	5月10～16日
第20週	5月17～23日

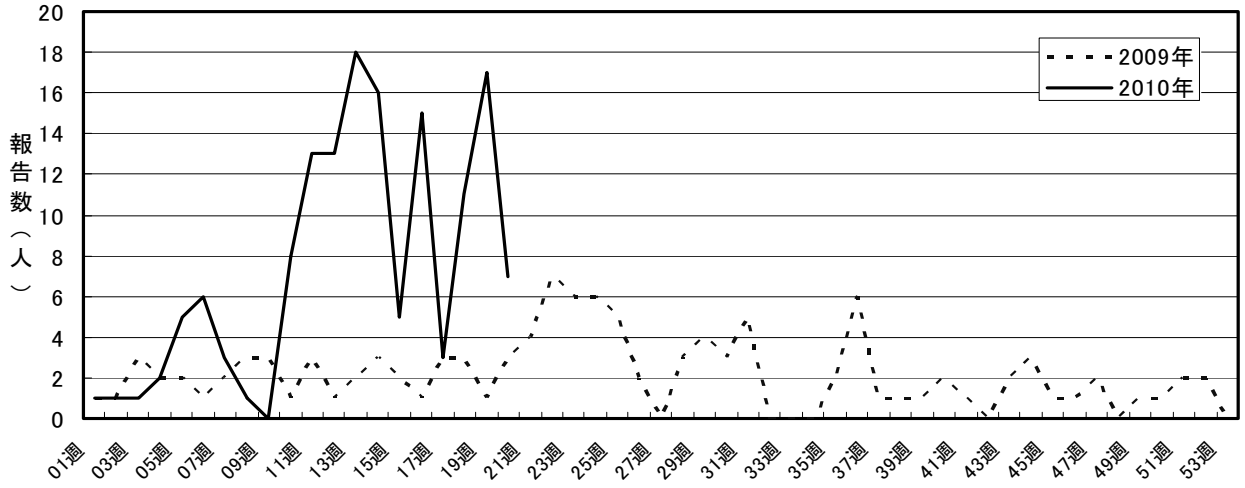
全数把握の対象

1 **細菌性赤痢**:1例の報告がありました。渡航地はベトナムです。

2 **腸管出血性大腸菌感染症**:2例の報告がありました。うち1例の渡航地はブラジルです。

3 **A型肝炎**:1例の報告がありました。春先から全国で国内での感染の報告が増えています。主に魚介類による経口感染によるものですが、性行為による感染も報告されています。他県では劇症肝炎による死亡も見られました。今年度第10週より全国レベルで報告数の増加が見られています。横浜市の22年度に入ってからの報告数は現在までで計2例であり、2例とも医療機関でIgM抗体検査が行われ、その後衛生研究所にてPCRにて陽性が確認されました。

A型肝炎（2010年1～20週　報告数／WISH公開データ）



4 **麻しん**:5例の報告がありました。1歳2例、10歳代2例の計4例にはワクチン接種歴がありました。30歳代の1例のワクチン接種歴は不明です。5月27日現在で27例の報告があり、昨年同期では25例の報告でした。昨年は、年度の前半に報告数が多く見られました。また、臨床診断としての届出の後に、IgM検査の結果取り下げた例も複数見られました。

麻しん対策のために、麻しんが疑われる場合は早めに福祉保健センターにご相談ください。また、麻しん患者数の減少に伴って、全数検査が重要になっています。診察後、一旦臨床診断で届出後にでも、検査診断で確定診断をしていただけるようお願い致します。

定点把握の対象

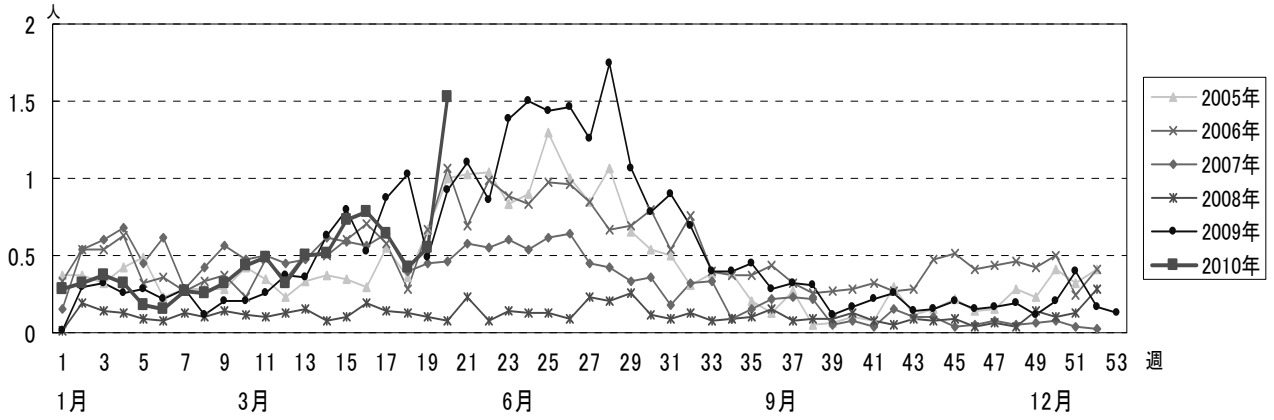
1 **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**：例年夏にかけて流行が見られています。第20週は定点あたり2.23でした。行政区別では、港北区5.29、青葉区3.86、緑区3.75、保土ケ谷区3.40と高めです。全国では1.82、神奈川県（横浜、川崎を除く：以下県域）1.99、川崎市2.63、東京都1.98でした。

2 **感染性胃腸炎**：第20週では定点あたり6.62でしたが、過去5年間との比較では高めです。行政区別では、緑区20.00、泉区15.00がまだ警報域です。全国では8.49、県域7.85、川崎市9.69、東京都7.55でした。

3 **水痘**：第20週では定点あたり1.88でした。行政区別では中区4.67、神奈川区3.75、西区3.33が高めです。全国では1.89と横浜市とほぼ同じですが、県域1.50、川崎市1.41、東京都1.49でした。

4 **伝染性紅斑**：過去5年間と比し、高めで推移していましたが、第19週は定点あたり0.55、第20週は1.52と急増しています。行政区別では泉区9.00、瀬谷区7.25、神奈川区3.25、磯子区2.25の4区が、国の示す警報の基準を超えています。全国では0.53、県域1.84、川崎市0.47、東京都0.65でした。

例年初夏から流行が見られる疾患ですので、今後の推移に注意が必要です。



5 **流行性耳下腺炎**：第20週では定点あたり1.18でした。行政区別では、神奈川区3.25、緑区2.75が高めです。全国では1.24、県域1.91、川崎市0.59、東京都0.89でした。

6 **性感染症**：性感染症は、産婦人科系の定点と、泌尿器科・皮膚科系の定点からの報告に基づき、1か月単位で集計しています。

4月は、性器クラミジア感染症は、男性が14例、女性が19例でした。
性器ヘルペス感染症は、男性が6例、女性が12例です。
尖圭コンジローマは、男性が7例、女性が6例でした。
淋菌感染症は、男性が6例でした。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス　URL:http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年6月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年6月24日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が高めです。
- 水痘と流行性耳下腺炎は、過去5年間に比べて高めに推移しています。
- 伝染性紅斑が高めです。
- ヘルパンギーナが高めです。

平成22年5月24日から6月20日まで（平成22年第21週から第24週まで。ただし、性感染症については平成22年5月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年	週－月日対照表
第21週	5月24～30日
第22週	5月31日～6月6日
第23週	6月 7～13日
第24週	6月14～20日

全数把握の対象

1 **腸管出血性大腸菌感染症**：O26の2例の報告がありました。きょうだい例で、自宅での肉の加熱不十分が疑われます。肉類を喫食する際は、充分な加熱を心がけましょう。発生時の対応につきましてはこちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html （横浜市衛生研究所）

2 **デング熱**：インドネシアからの帰国者に1例見られました。同行者の感染は認められていません。

3 **麻しん**：2010年6月は3例の報告がありました。ワクチン接種歴があったのは1例だけでした。すべて孤発例であり、周囲への感染は認められていません。

《日本は、2008年～2012年の5年間で、麻しん排除を目指します》

① 風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握
② 1歳および就学前1年間の、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底
③ 5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施

http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html （国立感染症情報センター）

4 **劇症型溶血性レンサ球菌感染症**：2例の報告がありました。A群とG群でした。今年に入って5例目の報告です。昨年の報告は1例のみでした。当疾患は、約30％が死亡している極めて致死性の高い疾患です。
詳しくはこちらをご参考下さい。
http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g2/k02_46/k02_46.html （国立感染症情報センター）

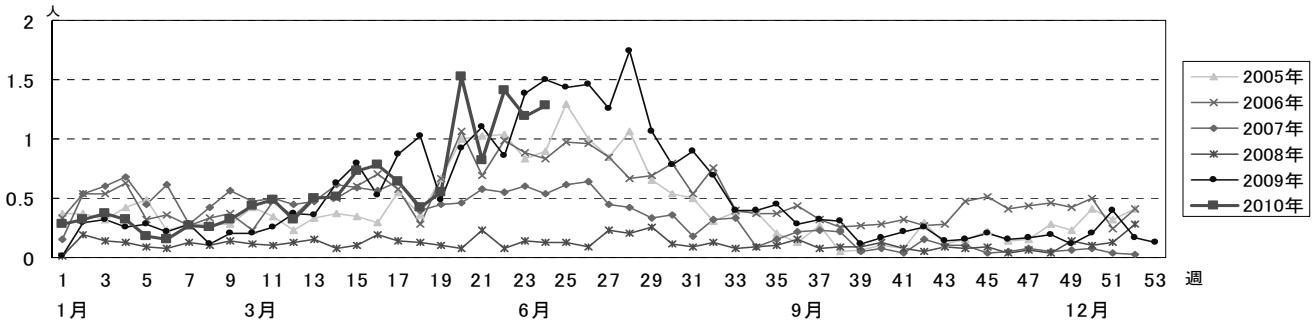
5 **破傷風**：1例の報告が見られました。66歳の方です。転倒による外傷が原因と見られています。全国では年間100人程度報告され、5月から10月といった野外活動が多くなる時期に増加しています。全国で2008年に行われた破傷風毒素抗体の保有状況では、60歳代以上では保有率11％と極めて低く、5年後の次回の調査結果が待たれる状況です。
臨床症状や所見から破傷風と診断した場合は7日以内の届出が必要です。破傷風につきましては、こちらをご参考下さい。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/tetanus1.html （横浜市衛生研究所）
http://idsc.nih.go.jp/iasr/30/349/tpc349-j.html （国立感染症情報センター）

定点把握の対象

1 **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**：第24週は定点あたり2.94でした。この時期では2008年についで高く報告されています。行政区別では、瀬谷区16.00、港北区9.13、都筑区7.00と高めです。全国では1.75、神奈川県域（横浜、川崎、相模原を除く。以下県域）1.69、川崎市2.67、東京都1.85です。

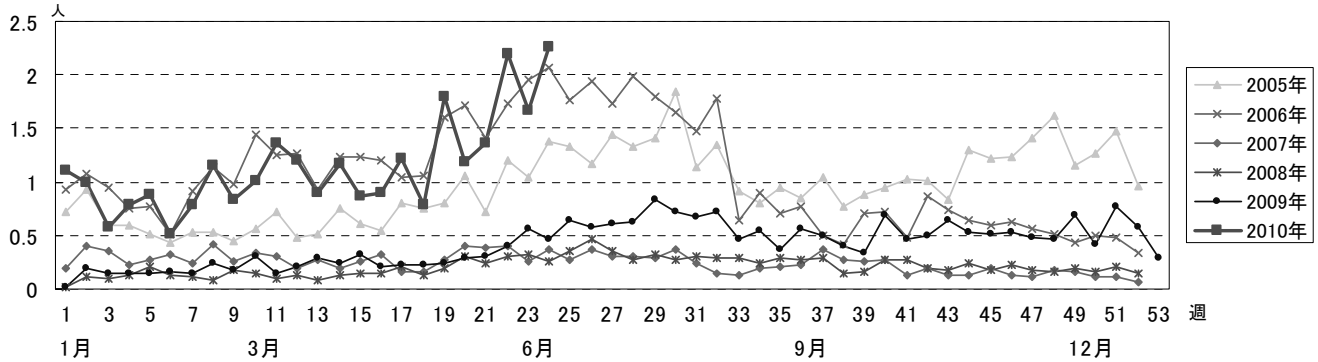
2 **水痘**：第24週は定点あたり2.26です。行政区別では、瀬谷区7.00、緑区5.80と高めです。全国では2.21、県域は（横浜、川崎、相模原を除く）2.46、川崎市1.64、東京都1.86です。

3 **伝染性紅斑**：第24週は定点あたり1.29です。過去5年間の中でも高めで推移しています。行政区別では、瀬谷区7.33、泉区6.00、南区2.80、戸塚区2.50と高めです。全国では0.64、県域2.18、川崎市0.36、東京都0.61です。



4 **ヘルパンギーナ**：第24週は定点あたり2.60です。行政区別では磯子区8.25と高めです。全国では1.56、県域2.31、川崎市2.64、東京都1.90です。

5 **流行性耳下腺炎**：第24週は定点あたり2.25です。行政区別では、神奈川区6.00、泉区5.00、緑区4.60、旭区3.80、瀬谷区3.00と高めです。全国では1.51、県域は2.01、川崎市0.82、東京都1.18です。過去5年でも高めに推移しています。



6 **性感染症**：性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

5月は、4月に比べて全体としては横ばいです。
性器クラミジアは男性12例、女性13例の報告がありました。
性器ヘルペス感染症は、男性4例、女性17例です。
尖圭コンジローマが男性9例、女性1例です。
淋菌感染症は男性12例、女性2例です。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス　URL:http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年7月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年7月29日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- 腸管出血性大腸菌感染症が11件と増加しています。
- ヘルパンギーナに減少が見られていますが、過去5年と比較しても高めです。
- 手足口病にも減少が見られていますが、やはり過去5年と比較しても高めです。
- 流行性耳下腺炎は2週連続で減少していますが、過去5年と比較しても依然高めです。

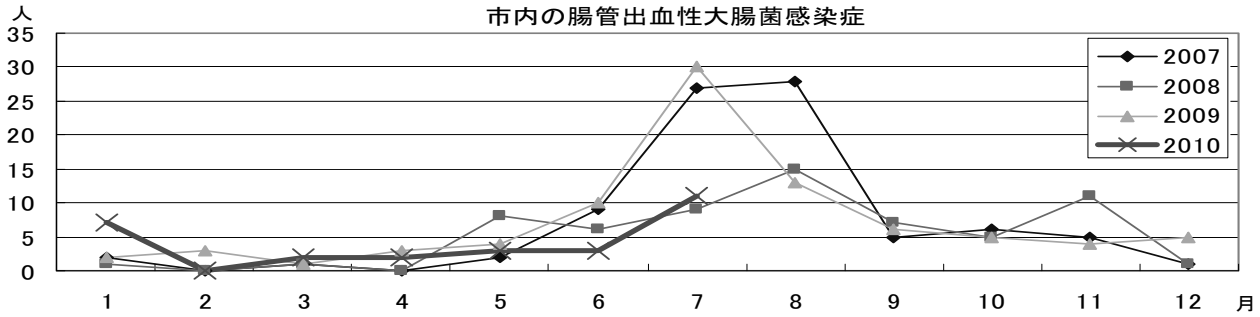
平成22年6月21日から7月25日まで（平成22年第25週から第29週まで。ただし、性感染症については平成22年6月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年	週－月日対照表
第25週	6月21～27日
第26週	6月28日～7月4日
第27週	7月5～11日
第28週	7月12～18日
第29週	7月19～25日

全数把握の対象

1 **腸管出血性大腸菌感染症**：11例の報告がありました。過去3年間の市内の発生状況では、例年夏期にピークが見られています。8月の増加が心配されます。8月は食品衛生月間です。家庭でできる一般的な6つのポイント（①新鮮な食材の購入　②冷蔵・冷凍での食材保存　③手洗いの励行、清潔な調理　④肉・魚の十分な加熱　⑤食事前の手洗いと調理後はすぐに食べる　⑥清潔な容器で保存し温め直すときは十分に加熱、長時間過ぎたものは捨てる）を心がけましょう。また腸管出血性大腸菌感染症は全国的にも件数が多く、幼児が重症化したりすることで問題になっていますが、菌は家畜の腸にいるので新鮮な肉を購入しても菌が付着している可能性があり、生肉を切った包丁まな板の使用の都度の洗浄・消毒や焼肉の取り箸は区別することが大切です。また菌は熱に弱いので、生(焼け)肉を食べないこと。特に、抵抗力の弱い乳幼児には良く焼いた肉しか与えない事が大切です。

発生時の対応につきましてはこちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html　（横浜市衛生研究所）



2 **A型肝炎**：2例の報告がありました。感染経路は不明です。4月から全国的に報告数が多かったのですが、7月に入り全国での報告数は例年並みに落ち着いています（週5～6件程度/全国）。

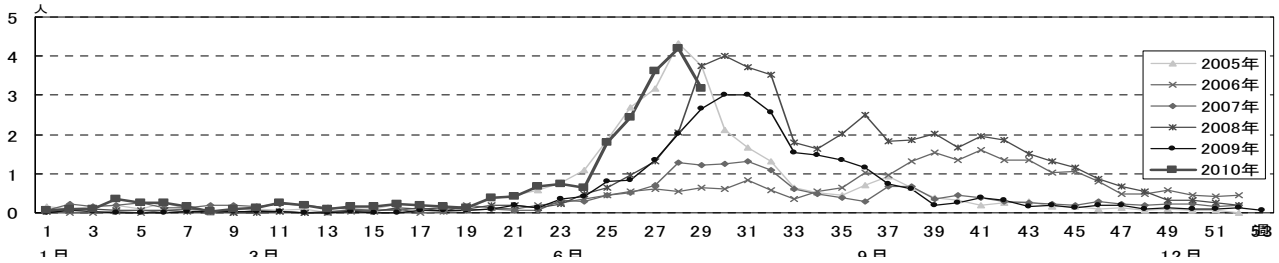
3 **レジオネラ**：5例の報告がありました。5例とも肺炎型でした。6月にも5例の報告があり、4例が肺炎型、1例はポンティアック型でした。2005年10月に成人市中肺炎診療ガイドライン（日本呼吸器学会）が発行され、中等症以上の患者には、レジオネラ尿中抗原検査を実施するとされたことにより、全国的に2005年以降患者が増加しています。昨年1年間、市内では16件の発生報告がありましたので、今後の発生動向に注意が必要です。

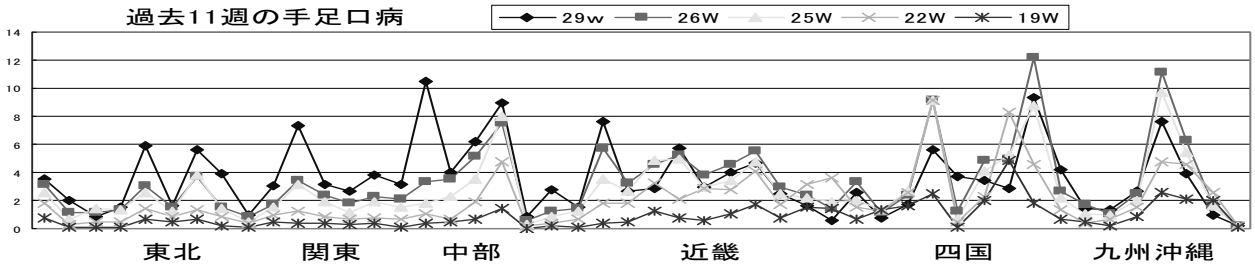
4 **麻しん**：5例の報告がありました。予防接種歴があるのは3例でした。麻しんは非常に重篤な障害も残したり、時には致死的な疾患です。必ず定期の予防接種を受けましょう。

5 **HIV感染症**：6月の追加報告が2例ありました。今年は21例の報告があり、18例（86％）が男性。うち12例（67％）が同性間性的接触によるものです。男性の同性間性的接触への注意喚起が必要です。

定点把握の対象

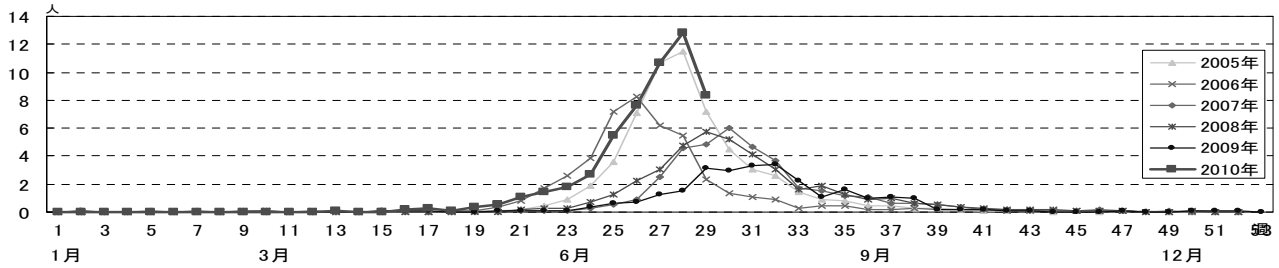
1 **手足口病**:第29週は定点あたり3.18でした。行政区別では泉区6.25、緑区6.00、神奈川区5.67が高めです。全国では3.53、神奈川県域(横浜、川崎、相模原を除く。以下県域)3.39、川崎市2.64、東京都3.78です。全国的にも第20週に入り増加が見られていましたが、第28週の定点あたり3.94をピークに下がっていますが、西日本の減少と、関東、中部を含む東日本の上昇が見られます。横浜では第28週の4.21がピークでした。



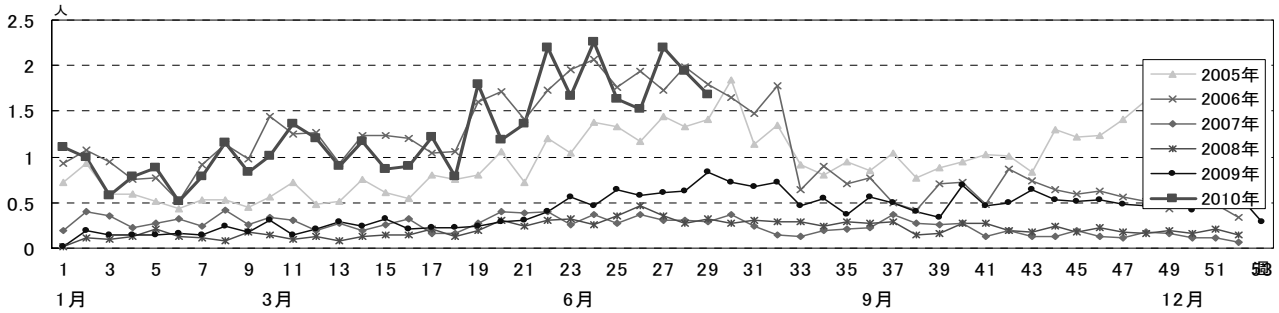


2 **百日咳**:第29週は市内で8人の報告が見られ、定点あたり0.10でした。10歳未満が4人、10歳以上が4人でした。全国0.05、県域0.21、川崎市0.03、東京都0.08です。

3 **ヘルパンギーナ**:第29週は定点あたり8.33です。行政区別では磯子区21.00、緑区16.80、港北区14.75、泉区14.00が高めです。全国では5.04、県域6.78、川崎市9.39、東京都6.45です。未だ過去5年でも高めです。



4 **流行性耳下腺炎**:第29週は定点あたり1.69です。行政区別では、泉区6.00、緑区3.40、神奈川区3.33が高めです。全国では1.30、県域は1.68、川崎市0.91、東京都0.93です。未だに過去5年でも高めです。



5 **性感染症**:6月は、性器クラミジアは、男性19例、女性22例、性器ヘルペス感染症は、男性9例、女性8例です。尖圭コンジローマが、男性2例、女性6例です。淋菌感染症は、男性8例、女性1例です。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス　URL:http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年8月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年8月26日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

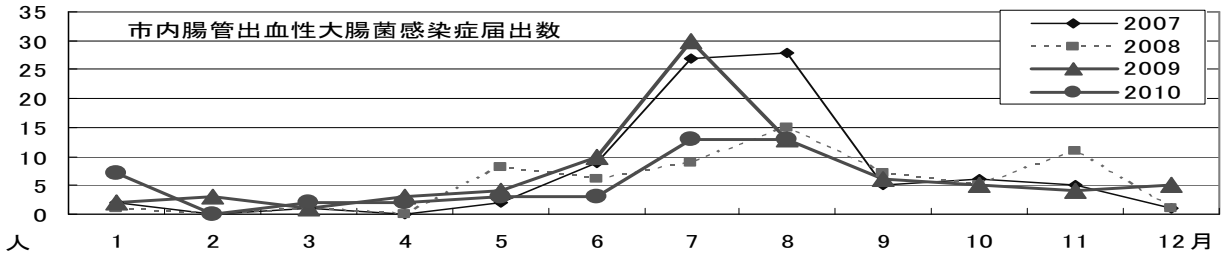
- インフルエンザの集団感染が見られました。迅速キットでA型でした。
- 腸管出血性大腸菌感染症は14件の報告がありました。(8月25日現在)
- デング熱は、7月と8月に計4件の報告がありました。すべて東南アジアでの感染でした。
- HIV感染症が9件報告され、うち6件は男性同性間性的接触によるものでした。
- 流行性耳下腺炎が、依然として過去5年間の中でも高めに推移しています。
- 手足口病、ヘルパンギーナ等、夏の感染症は落ち着きを見せています。

平成22年7月19日から平成22年8月22日まで(第29週から第33週まで。ただし、性感染症については平成22年7月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年	週ー月日対照表
第29週	7月19～25日
第30週	7月26日～ 8月1日
第31週	8月 2～ 8日
第32週	8月 9～15日
第33週	8月16～22日

全数把握の対象

1 **腸管出血性大腸菌感染症**:8月に14件の報告がありました。例年夏に多いので、これからの季節もまだ注意が必要です。



腸管出血性大腸菌感染症についてはこちらをご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html (横浜市衛生研究所)

2 **腸チフス**:1件の報告がありました。推定感染地はインドです。

3 **デング熱**:4件(7月2件、8月2件)の報告がありました。推定感染地はラオス2件とインドネシア2件でした。
世界的にも感染が増加しています。1950年代にフィリピンとタイで最初に報告されてから、1970年代には9カ国で局地的流行が認められ、現在は世界の各地域に流行が広がっています。
国内でも今年は8月8日時点で既に87件が報告され、今月中にも昨年の報告数92件を上回ると見られています。特に渡航歴の確認できた66件のうち39件の渡航先がインドネシアであることが注目されています。
デングウイルス感染情報はこちらをご覧ください。
http://www.nih.go.jp/vir1/NVL/dengue.htm (国立感染症情報センター)

4 **A型肝炎**:1件の報告がありました。推定感染地はインドネシアでした。

5 **アメーバ赤痢**:3件(うち1件は7月の報告)の報告がありました。1件は推定感染地が台湾でした。

6 **HIV感染症**:9件(うち5件は7月以前の報告)の報告がありました。男性8件。同性間性的接触6件です。
昨年の国内のHIV感染症1,021件のうち88%は日本国籍男性で、さらにその74%は同性間性的接触が原因です。男性の同性間性的接触は、HIV感染症のリスクファクターです。HIVは一旦感染すると治癒が困難な疾患です。感染予防をしっかり行うことが大切です。
平成21年の全国のHIV感染症の動向についてはこちらをご覧ください。
http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/366/tpc366-j.html (国立感染症情報センター)

定点把握の対象

1 **インフルエンザ**：昨年は8月に定点あたりの報告数が流行のめやすである1を超えましたが、第33週は定点あたり0.04と、市内での流行はみられません。神奈川県域（横浜市、川崎市、相模原市を除く。）では0.13、川崎市0.00、全国0.03でした。

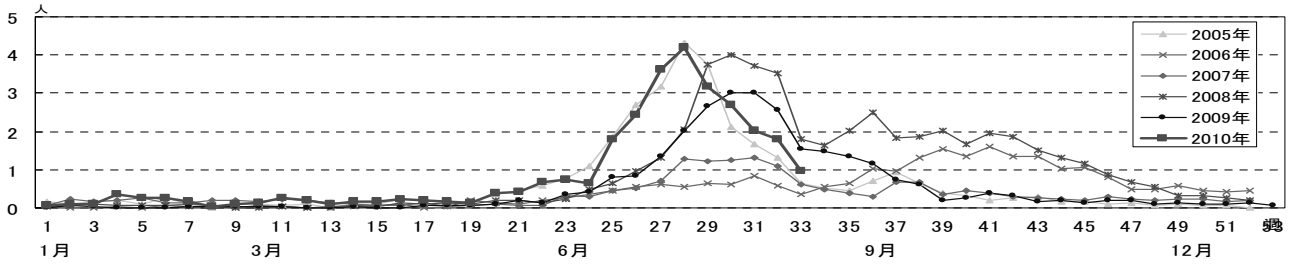
※横浜市内での最近の状況

・都筑区の1施設で11人の集団感染の報告がありました。迅速キットでA型でした。

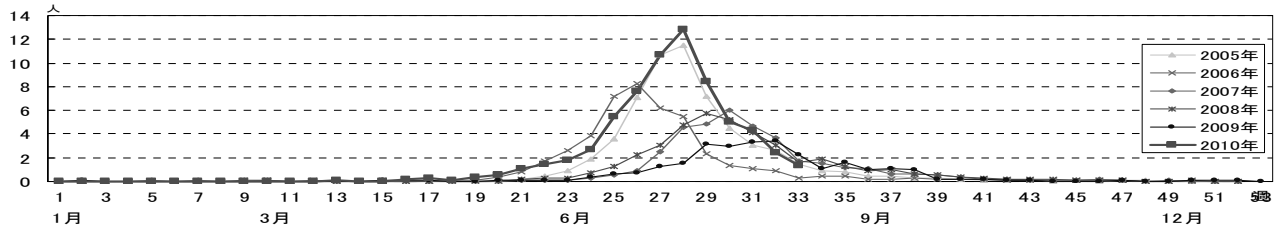
・横浜市衛生研究所の病原体検査では、8月にはタイからの輸入例で新型インフルエンザが、7月にはフィリピンからの輸入例でA香港が、検出されています。

2 **咽頭結膜熱**：第33週は定点あたり0.10で流行はみられません。今年は例年になく、夏の立ち上がりが見られませんでした。

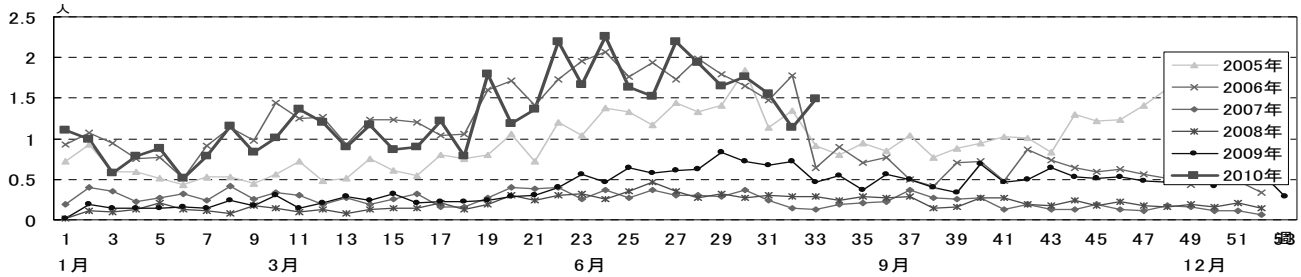
3 **手足口病**：第33週は定点あたり0.96で流行はみられません。第28週に定点あたり4.21とピークを示しましたが、その後順調に漸減しています。神奈川県県域では1.61、川崎市1.80、全国1.34でした。



4 **ヘルパンギーナ**：第26週に定点あたり7.66で、市内全域で警報域となり、第28週に12.83とピークになりましたが、その後漸減し、第33週は定点あたり1.34で流行はみられません。神奈川県域では1.05、川崎市1.37、全国1.32でした。



5 **流行性耳下腺炎**：第19週以降、過去5年と比較して高めに推移しています。第33週は定点あたり1.49と、依然として過去5年と比較してこの時期で最大の報告数です。神奈川県域では1.15、川崎市0.93、全国1.20でした。行政区別では泉区7.33、緑区3.00、神奈川区2.20、瀬谷区2.00が高めです。



6 **性感染症**：性感染症は、診療科でみると産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

8月も例年の傾向と同じです。性器クラミジア感染症が24件（男性8、女性16）、性器ヘルペス感染症は14件（男性3、女性11）、尖形コンジローマは9件（男性3、女性6）、淋菌感染症は8件（男性7、女性1）でした。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス　URL:http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年9月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年9月30日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- **レジオネラの届出が4件ありました。1月からの報告数は22件で、昨年の報告数16件をすでに超えています。**
- **腸管出血性大腸菌感染症の届出が11件ありました。**
- **夏季に流行が見られた、手足口病、ヘルパンギーナ、水痘、伝染性紅斑については、ピークも過ぎ、落ち着いています。**

平成22年8月23日から平成22年9月26日まで（平成22年第34週から第38週まで。ただし、性感染症については平成22年8月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年　週－月日対照表

第34週	8月23～29日
第35週	8月30日～9月5日
第36週	9月　6～12日
第37週	9月13～19日
第38週	9月20～26日

全数把握の対象

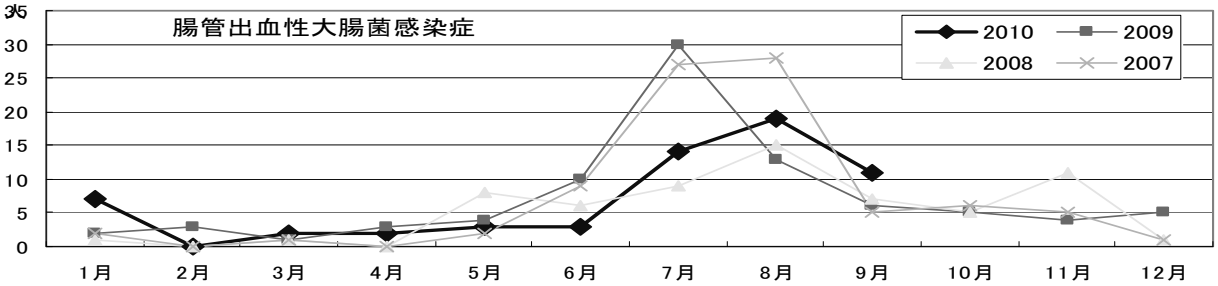
1 **細菌性赤痢**:9月の届出数は、30日現在で2件です。渡航地はスリランカとミャンマーでした。平成22年の届出は6件で、そのうち5件がアジアでの感染です。全国でも感染者の約8割はアジアでの感染と見られています。

細菌性赤痢については、こちらをご覧ください。
http://idsc.nih.go.jp/iasr/30/358/tpc358-j.html
（国立感染症情報センター）

2 **パラチフス**:9月の届出数は、30日現在で1件です。渡航地はインドでした。

3 **腸チフス**:9月の届出数は2件です。家族例（母子）で、母には渡航歴がありました。

4 **腸管出血性大腸菌感染症**:9月の届出数は、30日現在で11件です。例年夏に多く見られる疾患ですが、冬季も発生が認められていますので、肉の十分な加熱を引き続き心がける必要があります。



啓発用チラシ「O157に注意しましょう」も併わせてご利用ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf （横浜市衛生研究所）

5 **レジオネラ症**:9月は30日現在で4件の届出がありました。1月からの報告数は22件となり、既に昨年総報告数より増加しています。2007年より市内では増加傾向にあります（表参照）。

レジオネラは、市中肺炎の起因菌として重要ですが、過去に、ジャグジーや入浴施設、冷却塔等での集団感染も報告されています。診断された際には、浴槽の種類や温泉、銭湯等の利用状況等を確認する事も重要です。

レジオネラ症の報告数の推移（2001年～2010年9月）　2010年は9月まで

年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
全国	86	167	147	160	281	518	668	886	712	527
横浜市	0	3	2	1	8	7	28	32	16	22

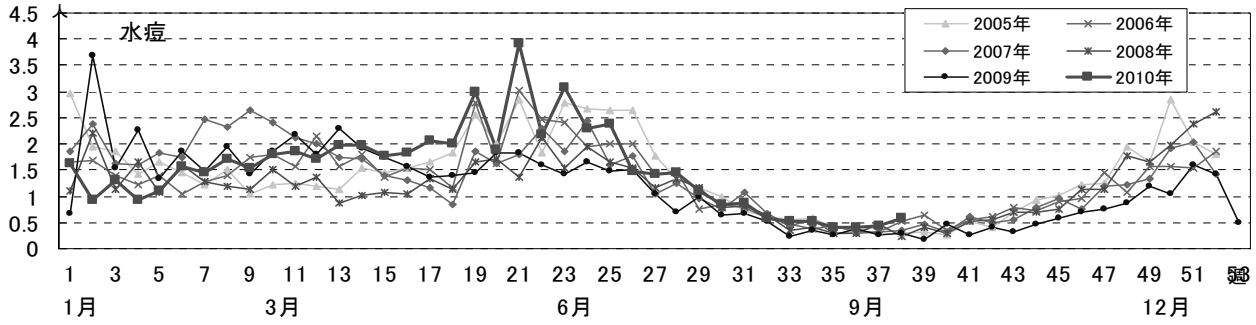
全国のレジオネラ症の報告の傾向は　http://idsc.nih.go.jp/iasr/29/346/tpc346-j.html　をご覧ください。

6 **梅毒**:9月は30日現在で3件の届出がありました。

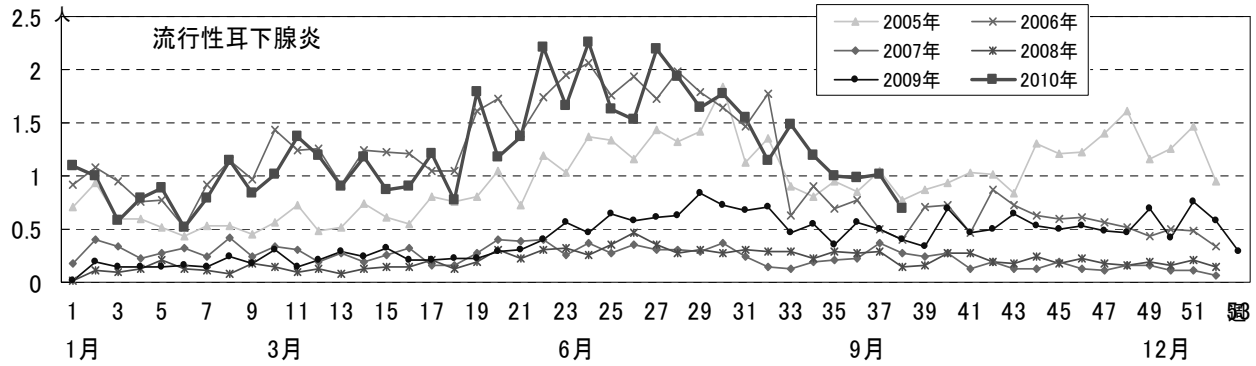
7 **麻しん**:1件の届出がありました。インドからの輸入例と思われます。

定点把握の対象

1 **水痘**:第38週では定点医療機関からの届け出あたり(以下定点あたりとする)0.59です。神奈川県域(横浜、川崎、相模原を除く。以下県域)では0.29、全国0.51といずれも報告数は少ないですが、例年冬にかけて徐々に報告数が徐々に増えていきますので、今後の動向に注意が必要です。



2 **流行性耳下腺炎**:第38週では定点あたり0.70です。県域0.79、川崎市0.61、東京都0.36、全国0.97でした。例年夏季を中心に流行が見られますが、過去5年と比較しても高めに推移しています。



3 **インフルエンザ**:第38週では定点あたり0.03です。県域0.03、川崎市0.07、東京都0.07、全国0.04でした。
病原体定点等からの検査では、A香港型が4件PCR等で確認されています。

4 **性感染症**:性感染症は、診療科でみると産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。
8月は、性器クラミジア感染症の報告数は、男性21件、女性18件でした。
性器ヘルペス感染症は、男性4件、女性9件です。
尖圭コンジローマは、男性11件、女性4件、淋菌感染症は、男性16件、女性2件でした。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年10月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年10月28日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- **細菌性赤痢の感染が同一家族内に認められました。**
- **流行性耳下腺炎が過去5年間との比較では多めです。**
- **病原体定点からインフルエンザA香港が3件検出されました。**
- **RSウイルス感染症の報告が多めです。**

平成22年9月20日から平成22年10月24日まで（平成22年第38週から第42週まで。ただし、性感染症については平成22年9月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年　週ー月日対照表

第38週	9月20～26日
第39週	9月27日～10月3日
第40週	10月　4～10日
第41週	10月11～17日
第42週	10月18～24日

全数把握の対象

1 **細菌性赤痢**：10月の報告数は、28日現在で3件です。1件はフィリピンでの感染と思われますが、2件は、渡航歴のない家族例です。疫学調査の結果と発症日より、家族内感染も疑われます。細菌性赤痢は、10～100個と少ない菌量でも感染するので、二次感染も認められます。感染予防としては、食材の充分な加熱と石鹸による手洗い励行のほかに、海外では更に生水を避け、渡航先の流行状況の把握が大切です。

海外渡航のご予定の方は、こちらをご参考ください。
http://www.anzen.mofa.go.jp/ （外務省　海外安全HPホームページ）
また、細菌性赤痢についてはこちらをご参考ください。
http://idsc.nih.go.jp/disease/shigellosis/2009sokuho.html （国立感染症情報センター）

2 **腸管出血性大腸菌感染症**：10月の報告数は、28日現在では9例5事例です。感染源が特定された例はありませんでした。

発生時の対応につきましては、こちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html （横浜市衛生研究所）

3 **デング熱**：10月の報告数は、28日現在で1例です。インドネシアでの感染と思われます。ウイルス型は2型でした。国内での報告数は、平成21年には92例でしたが、22年では10月第41週（10月17日）で204例であり、過去10年間でも最大の報告となっています。

デング熱についてはこちらをご参考ください。
http://www.nih.go.jp/vir1/NVL/dengue.htm （国立感染症情報センター）

4 **A型肝炎**：10月の報告数は、28日現在で1例です。韓国での感染と思われます。

A型肝炎の国内状況についてはこちらをご参考ください。
http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/368/inx368-j.html （国立感染症情報センター）

5 **アメーバ赤痢**：10月の報告数は、28日現在で4例です。全て男性でした。

アメーバ赤痢に関してはこちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/entamoeba1.html （横浜市衛生研究所）

6 **急性肝炎（B型）**：10月の報告数は、28日現在で1例です。性行為による感染と思われます。

B型肝炎に関しては、こちらをご参考ください。
http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k04/K04_15/k04_15.html （国立感染症情報センター）

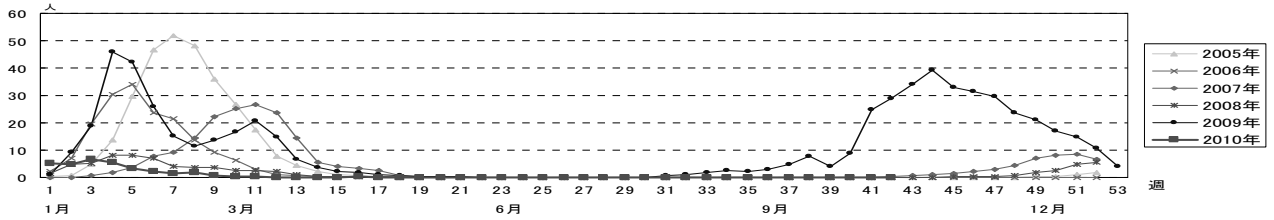
7 **HIV感染症**：10月の報告数は、28日現在で3例です。すべて男性であり、すべて性行為感染と思われます。全国でも感染者の88％が日本国籍男性であり、日本国籍男性のHIV感染者のうち同性間性的接触（両性間性的接触を含む）によるものは74％です。HIV感染症に関しては、依然として治癒に到る治療法が無い現状の中で、日

本人男性の同性間での性的接触による感染は増加しており、今後感染予防と早期発見の更なる対策が必要です。平成21年の現状についてはこちらをご参考ください。
http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/366/tpc366-j.html （国立感染症情報センター）

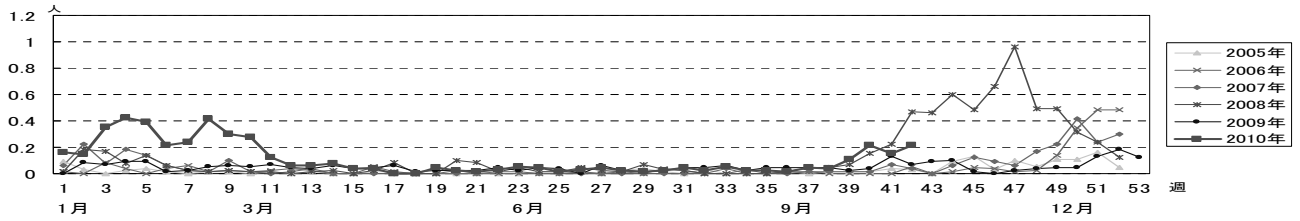
8 **麻しん**：10月の報告数は、28日現在で4例です。すべて臨床診断によるものです。2例はワクチン接種歴はありませんでした。麻しんは、重篤な後遺症が見られたり、時には死にいたる疾患です。対象年齢児への確実な予防接種の実施が望まれます。

定点把握の対象

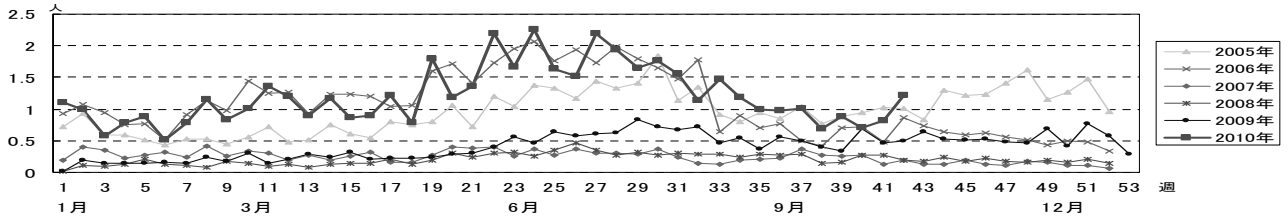
1 **インフルエンザ**：第42週の定点あたりの報告数は0.12でした。
市内の届出は15件あり、うち14件が迅速キットでA型でした。定点あたりの報告数は、全国でも0.12、神奈川県域（横浜、川崎、相模原を除く 以下県域）では0.12、川崎市0.11、東京都0.19と何れも低い数値です。第40週に、沖縄県が定点あたり1.16と、流行の目安である「1」を超えましたが、第42週には0.76と「1」を下回っています。市内病原体定点から、A香港が3件検出されています。



2 **RSウイルス感染症**：第42週の定点あたりの報告数は0.20でした。行政区別では港北区と中区が、いずれも1.00と少し高めです。全国では0.34、県域0.15、川崎市0.06、東京都0.18でした。RSウイルス感染症は、インフルエンザと並ぶ冬季の小児の重要な疾患です。今後の動向に注意が必要です。



3 **感染性胃腸炎**：第42週の定点あたりの報告数は3.00でした。行政区別では瀬谷区が10.33、磯子区が5.33、旭区と緑区が5.00と少し高めです。全国では3.70、県域4.30、川崎市5.33、東京都4.36でした。



4 **流行性耳下腺炎**：第42週の定点あたりの報告数は1.21でした。過去5年との比較では高めに推移しています。全国では1.21、県域1.11、川崎市1.27、東京都0.47でした。

5 **性感染症**：性感染症は、診療科でみると産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。
9月は、性器クラミジア感染症は男性15例、女性 9例、性器ヘルペスウイルス感染症は、男性9例、女性9例です。
尖圭コンジローマは、男性5例、女性3例、淋菌感染症は、男性13例、女性4例が報告されています。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年11月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年11月25日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- **感染性胃腸炎の報告が増えています。過去5年間で最大の流行だった2008年を凌ぐ立ち上がりです。今シーズンはすでに14件の集団感染の報告があり、10件からノロウイルスが検出されています。**
- **病原体定点医療機関から、8月から11月の検体で分離されたインフルエンザは、8検体全てがA香港でした。**
- **インフルエンザの集団感染の報告がありました。金沢区で市内初の施設閉鎖(学年閉鎖)があり、B型のワクチン株であるVictoriaのBrisbene類似が検出されています。泉区・都筑区でも集団感染が報告されています。**

平成22年10月18日から11月21日まで(平成22年第42週から第46週まで。ただし、性感染症については平成22年10月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年 週ー月日対照表	
第42週	10月18～24日
第43週	10月25～31日
第44週	11月 1～ 7日
第45週	11月 8～14日
第46週	11月15～21日

全数把握の対象

1 **腸管出血性大腸菌感染症**:11月の報告数は24日現在で1件です。感染経路は不明です。

2 **レジオネラ症**:11月の報告数は24日現在で3件です。感染地は、現時点では不明です。

レジオネラ症は、レジオネラ属菌の中でもレジオネラニューモフィラによることが多いです。本来土壌細菌ですが、冷却塔や給湯系等の人工環境にもアメーバを宿主として増殖しています。

2005年以降、報告数が増加していますが、2004年にイムノクロマト法の尿中抗原検査が保険適用になり、2005年には市中肺炎診療ガイドライン(日本呼吸器学会)にレジオネラ検査が記載されたことが影響していると思われますが、公衆浴場等での集団感染も国内では報告されています。浴槽水の換水や適切な塩素濃度の他に、レジオネラの温床となるバイオフィルム対策に清掃・消毒も必要です。

市内の公衆浴場の検査結果についてはこちらをご参考ください。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/inspection_inf/201003/pdf/yokujou.pdf

(横浜市衛生研究所 検査月報)

3 **HIV感染症**:11月の報告数は24日現在で3件です。10月以前の追加報告は5件ありました。その8件は全て男性で、そのうち7件は同性間性的接触によるものでした。

全国では昨年のHIV感染者は1,021人が報告され、AIDS患者は431人でした(42%)。感染者の国籍・性別では日本国籍の男性が88%を占め、その中で74%が同性間性的接触によるものでした。

横浜では、今年に入って45件のHIV感染報告があり、そのうちAIDSを発症していたのは13件(29%)でした。4件が女性でした。19件(42%)が30歳代で、40歳代が10件、20歳代が8件、50歳代が5件、60歳代が3件でした。

HIV感染症は、治療法が進歩しているとはいえ、体内から完全にウイルスを排除することが難しい慢性の感染症です。一番の対策は感染防止ですが、早い時期の感染確認によって、適切な治療と、パートナーへの感染防止が可能になります。機会を捉えた検診勧奨が必要です。

HIV感染症につきましてはこちらをご参考ください。

http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/366/tpc366-j.html (国立感染症情報センター HIV/AIDS 2009年)

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hiv.html

(横浜市衛生研究所 HIV感染症について)

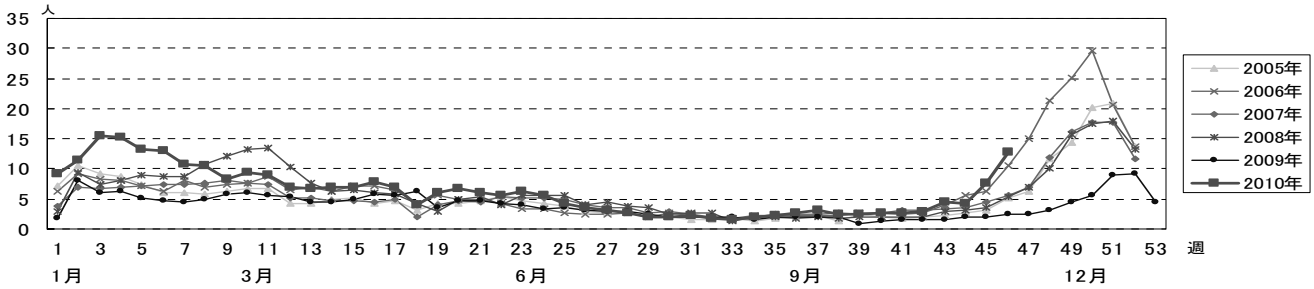
定点把握の対象

1 **インフルエンザ**:第46週では横浜市の定点あたりの報告数は0.57でした。行政区別では、流行のめやすである定点あたり1を超えた、瀬谷区2.43、金沢区2.25、泉区1.71が高めです。神奈川県域(横浜、川崎、相模原を除く:以下県域)では0.42、東京都0.51、全国0.35です。

集団感染としては、金沢区で市内初施設閉鎖(学年閉鎖)がありました。B型VictoriaのBrisbene類似が検出されています。泉区ではインフルエンザによる全園閉鎖がありました。

都筑区でも学級閉鎖が見られています。型については検査中です。

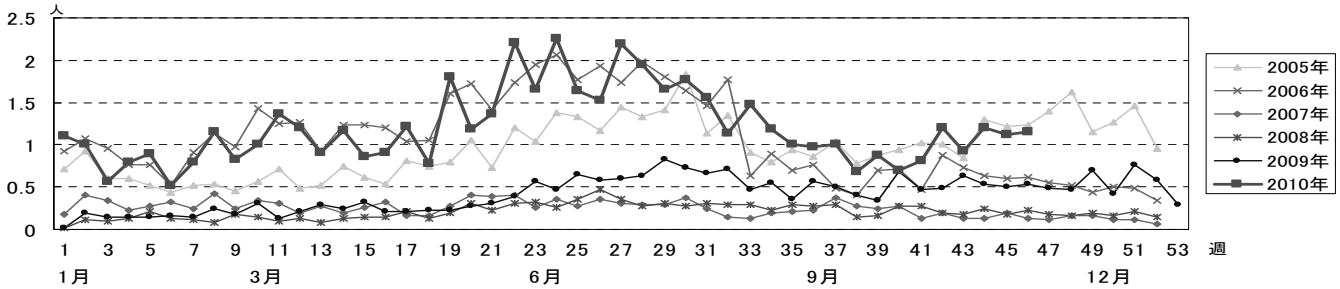
2 **感染性胃腸炎**:第46週では市内定点あたりは12.83でした。行政区別では、旭区31.00、瀬谷区20.50、神奈川区19.50が高めです。県域12.44、東京都12.91、全国10.64でした。市内では集団感染の報告が14件あり、うち10件からウイルスが検出されていて、すべてがノロウイルスGⅡによるものでした。



3 **水痘**:第46週では市内定点あたりは1.38でした。行政区別では保土ケ谷区が6.50と注意報域です。
県域1.17、東京都0.95、全国1.4でした。

4 **百日咳**:第46週では市内定点あたり0.04でした。中区で2件、青葉区で1件の報告です。
何れも20歳以上です。

5 **流行性耳下腺炎**:第46週では市内定点あたり1.15でした。
行政区別では港南区2.75、神奈川区2.00が高めです。県域1.28、東京都0.48、全国1.16です。



6 **性感染症**:性感染症は、診療科でみると産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

10月は、性器クラミジアは、男性25例、女性15例、性器ヘルペスウイルス感染症は、男性8例、女性11例でした。

尖圭コンジローマは、男性8例、女性3例、淋菌感染症は、男性11例、女性2例でした。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年12月期
横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成22年12月16日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- 感染性胃腸炎の定点あたりの報告数が、警報レベルの「20」を超えました。
- インフルエンザは、市全域ではまだ流行の目安となる定点あたりの報告数が「1」に達していませんが、金沢区、戸塚区、栄区及び泉区は高めです。
- 市内のインフルエンザ迅速診断キットにおけるB型の報告割合が3割近くを占めています。B型の多くが金沢区からの報告です。

平成22年11月8日から平成22年12月12日まで（平成22年第45週から第49週まで。ただし、性感染症については平成22年11月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年　週－月日対照表

第45週	11月　8～14日
第46週	11月15～21日
第47週	11月22～28日
第48週	11月29日～12月5日
第49週	12月　6～12日

全数把握の対象

1 **腸管出血性大腸菌感染症**：12月は15日現在で2例の報告がありました。
感染経路については不明です。
腸管出血性大腸菌感染症の発生時の対応については、こちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html （横浜市衛生研究所）

2 **レジオネラ症**：12月は15日現在で1例の報告がありました。感染経路は不明です。レジオネラ症は、水中や土壌に通常存在しているレジオネラ属菌による感染ですが、15～43℃で繁殖し、循環式浴槽水、空調施設の冷却水、給湯器等の人工的な温水中に生息するアメーバ等原虫の細胞内で増殖するために、打たせ湯やジャグジー、加湿器、噴水等で発生したエアロゾルを吸入することで気道感染を起こして発症することが知られています。
レジオネラ症について更に詳しい情報は、こちらをご参考ください。
http://idsc.nih.go.jp/disease/legionellosis/sokuho0718.html （国立感染症情報センター）

3 **アメーバ赤痢**：12月は15日現在で1例の報告がありました。感染経路は不明です。アメーバ赤痢は、飲食物を介した経口感染や性的接触により感染します。横浜市では1月から現在までに34件の報告があり、男性30件に対し女性は4件でした。経口感染によるものが9件、性的接触によるものが6件、感染経路不明が19件でした。
アメーバ赤痢については、こちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/entamoeba1.html （横浜市衛生研究所）

4 **ウイルス性肝炎**：12月は15日現在で1例の報告がありました。B型肝炎でした。性的接触により感染しますが、遺伝子型（genotype）によって、臨床経過に差があることが知られています。
国内のgenotypeについては、こちらをご覧ください。
http://idsc.nih.go.jp/iasr/27/319/dj3191.html （国立感染症情報センター）
また、横浜市での1月から現在までの肝炎の報告は、B型肝炎が2例のみでした。急性ウイルス性肝炎は、A型とE型は四類の届出、それ以外のウイルス性急性肝炎は五類感染症の全数届出となっています。
届出基準と届出様式はこちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/infection/todoke.html （横浜市衛生研究所）

5 **劇症型溶血性レンサ球菌感染症**：12月は15日現在で1例の報告がありました。40歳代の女性です。
創傷感染でした。劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、死亡率の高い疾患です。
詳しい情報はこちらをご参考ください。
http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g2/k02_46/k02_46.html （国立感染症情報センター）

6 **HIV感染症**：12月は15日現在で1例の報告がありました。男性の同性間性的接触によるものでした。
HIV感染症については、こちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hiv.html （横浜市衛生研究所）

7 **梅毒**:12月は15日現在で2例の報告がありました。梅毒についてはこちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/syphilis1.html （横浜市衛生研究所）

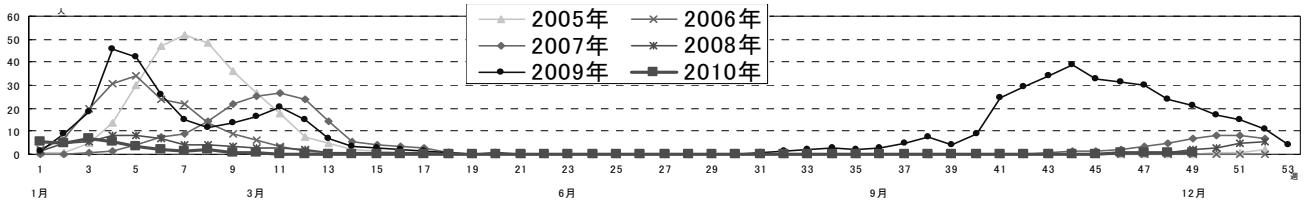
8 **風しん**:12月は15日現在で1例の報告がありました。風疹についてはこちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/rubella1.html （横浜市衛生研究所）

定点把握の対象

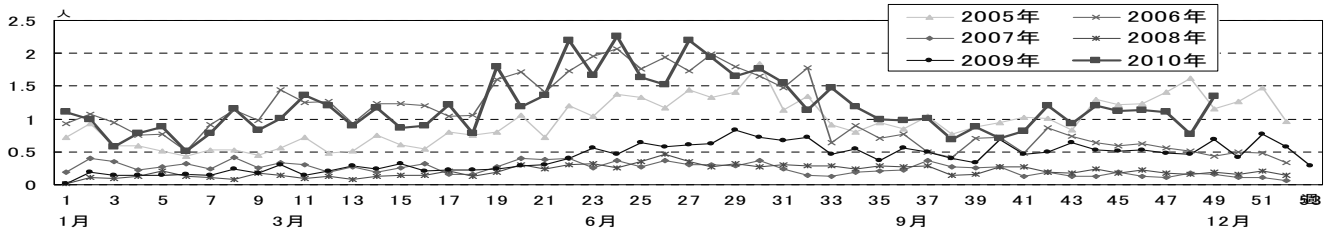
1 **インフルエンザ**:第49週では定点あたりの報告数は0.98です。行政区別では金沢区3.75、戸塚区2.70、栄区1.60、泉区1.57と高めです。

全国では0.93、神奈川県0.92、川崎市0.51、東京都1.04です。

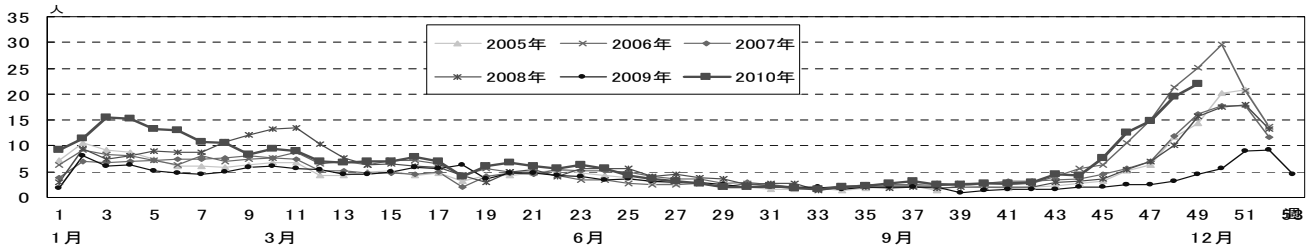
定点医療機関にご協力をいただいている迅速キットでは、A陽性が82件、B陽性が31件でした。金沢区ではA陽性が5件、B陽性が22件と、市内B型の多くが金沢区で報告されています。11月からの市内集団かぜの検査では、金沢区の小学校がB型、泉区、都筑区、戸塚区、瀬谷区の計4施設ではA香港が検出されています。市内病原体定点では、今週はB型が1件（港北区）検出されています。全国の病原体検出状況では第36週から49週までにAH1pdm（新型）が165件、AH1（ソ連）は0件、AH3（香港）は380件、B（ビクトリア）は17件、B(山形)が2件検出されています。今後、金沢区のB型の流行に注目していく必要があります。



2 **感染性胃腸炎**:第49週では定点あたり22.01で、警報レベルです。行政区別では緑区36.60、神奈川区33.17、瀬谷区32.50、旭区32.40、港北区28.25、港南区27.80、泉区25.00、都筑区24.50、戸塚区23.67、磯子区22.00の10区が警報レベルです。全国では17.23、神奈川県21.26、川崎市22.06、東京都19.35と、広い範囲で流行が見られています。



3 **流行性耳下腺炎**:第49週では定点あたり1.34です。行政区別では、神奈川区3.33、磯子区2.75、緑区2.20、港北区2.13の順に高めです。全国では1.30、神奈川県1.23、川崎市1.09、東京都0.37です。



4 **性感染症**:性感染症は、診療科でみると産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

11月は、性器クラミジア感染症は、男性18例、女性13例、性器ヘルペスウイルス感染症は、男性4例、女性9例でした。

尖圭コンジローマは、男性4例、女性4例、淋菌感染症は、男性16例、女性2例でした。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成２２年１月５日

感染症に気をつけよう

１　全数報告感染症（感染症法における１～５類感染症）平成 21 年 12 月

腸管出血性大腸菌感染症：３例報告がありました。
アメーバ赤痢：４例報告がありました。
HIV 感染症：１例報告がありました。

２　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）平成 21 年 11 月 23 日～12 月 27 日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	◎	↘	ピークだった 10 月と比べると患者数は４分の１程度に減っています。今までの流行は殆どが新型インフルエンザによるものでした。
ＲＳウイルス感染症	△	↗	例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。乳児や疾患を持つ幼児では重症になりやすく、注意が必要です。
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	△	↗	例年、初夏の他に冬季にも流行が見られるので、今後の動向に注意が必要です。
感染性胃腸炎	△	↗	例年冬季に流行が見られます。これからの時期に注意が必要な感染症の一つです。
水痘	△	↗	例年冬から初夏に掛けて報告数が増加します。今も少し増加傾向にあります。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし
↗：増加傾向、→：横ばい、↘：減少傾向

３　気をつけたい感染症とその対処法

・ インフルエンザに気をつけましょう。
予防には、うがい、手洗い、マスクなどが有効です。
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou01/pdf/01c.pdf
市内の最新情報は、下記をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/kansen_khama.html

・ ノロウイルスによる感染性胃腸炎は、主に秋から冬にかけて流行します。
ノロウイルスの特徴を理解し、ノロウイルスによる感染を予防しましょう。
最も有効な感染予防策は、調理や食事の前の手洗いの他に、排泄物や吐物の迅速な処理と消毒、その後の手洗いです。
アルコールによる消毒は殆ど効果が無いので、次亜塩素酸等で消毒をしましょう。

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

ノロウイルス感染が増えています

感染症　Q＆A　消毒　編
（衛くんと研子先生の一問一答）

ノロウイルスにアルコールが効かないなんて‥。

衛（まもる）：研子先生。僕のクラスで給食のとき吐いてしまった子がいたんだけれど、インフルエンザ用のアルコールで消毒しても効果が無いって聞いたんですけれど、本当か教えてください。

研子先生：確かにノロウイルスによるものだったら、効果は期待できないわね。

衛：え～。僕んち、消毒薬はインフルエンザ用のアルコールしかないんですけれど‥。どうしたらいいんだろう。

研子：そもそも消毒がなんだか考えてみましょうね。病気を起こす微生物が、病気を起こさないようにすることでしょ。だから、熱湯でも消毒はできるのよ、でも、どんな消毒方法にするかは、消毒方法の強さの他に、消毒する場所で使えるか、使いやすいかということで、消毒方法を選ぶのよ。例えば、ホルマリンは消毒効果が高いけれど、人体に使うには毒性が強すぎるから使えないでしょ。一般には下の表が参考になるわね。

	細菌			真菌	ウイルス	
	通常の細菌	結核菌	芽胞		脂質含	脂質無いもの
高度	＋	＋	＋	＋	＋	＋
中等度	＋	＋	－	＋	＋	＋
低度	＋	－	－	±	＋	－

高度　：ホルマリン、グルタラール　（毒性もあり、扱いも困難で、医療機関以外ではあまり使わない）
中等度：消毒用エタノール、フェノール、次亜塩素酸ナトリウム、ヨード系消毒剤
低度　：第四アンモニウム塩、界面活性剤、グルコン酸クロルヘキシジン

	消毒薬の種類	環境	金属器具	非金属器具	皮膚
中	次亜塩素酸ナトリウム	△	×	○	△
	消毒用エタノール	△	○	○	○
	ヨード	×	×	×	○
	クレゾール	△	△	△	△
低	塩化ベンゼルコニウム	○	○	○	○
	グルコン酸クロルヘキシジン	○	○	○	○
	界面活性剤	○	○	○	○

衛：これを見ると、エタノールは中程度の強さなのに、何でノロウイルスでは効かないんですか？

研：インフルエンザウイルスのように、ウイルスの表面がエンベロープという外套で囲まれていると、それは脂溶性（油で溶ける）なので、アルコールで溶かされ、簡単に消毒できるのよ。でも、ノロウイルスはエンベロープが無いの。それにエタノールが効くには高い濃度が必要なんだけど、胃液等で薄まったりして、有効な濃度が得にくいこともあるわ。また、エタノール自体がすぐ酸化されて、アルデヒドなどになってしまうので、胃酸のある吐物では効かなくなってしまうのよ。あとノロ自体にも胃酸程度の酸性や、ある程度熱に抵抗性があるから面倒なの。85℃以上で1分以上加熱しないと消毒できないのよ。

衛：じゃあ吐いた物は何で消毒するんですか。

研：吐いたものをすぐにキッチンタオル等で除去して、それから塩素系の消毒薬を使うと良いわよ。ノロの他に、サポとかアストロとか、ロタとか、似たような症状を起こすウイルスはいくつかあるけれど、症状では区別しにくいので、吐いたらまず塩素系で消毒することね。

衛：僕んちには、そんなのないなあ。

研：通常のふきんの漂白剤とかが、塩素系よ。市販の塩素剤の濃度は大体5%だから、規定の濃度に薄める必要があるわね。200～1000ppm(0.1%)だけれど、例えば 0.1%にするには、ペットボトルの蓋（約5CC）2杯分を 500ccの水で薄めればその濃度に近くなるわよ。消毒したい病源体に効く薬剤か確かめるのも大切だけど、実際に使えるか、身体に害は無いか等総合的に考えましょうね。

衛：手洗い後の消毒も塩素でするのですか。

研：塩素だと手が荒れちゃうでしょ。石鹸を使ってしっかり手洗いすることが大切よ。石鹸では「消毒」はできなくても、洗い流すのに役立つのよ。

衛：は～い。水じゃなくってお湯で洗いま～す。

平成 22 年２月 12 日

感染症に気をつけよう

１　全数報告感染症（感染症法における１～５類感染症）平成 22 年１月

腸管出血性大腸菌感染症は、５例の報告がありました。２例は同じ焼肉チェーン店での感染でした。近隣自治体からも同様の感染が 20 例以上と多数報告されています。肉類の喫食は、充分な加熱をすることが大切です。

梅毒２例、後天性免疫不全症候群(HIV 感染症) ３例の報告がありました。両疾患とも、現在では主に性的接触で感染し、一番の対策は感染予防です。梅毒は、ここ数年報告が減っていません。ＨＩＶ感染症の報告は増加傾向です。

麻しんは、２例の報告がありました。予防接種前の１歳児の感染も報告されています。麻しんは非常に重篤な感染症です。１歳になったらすぐに予防接種を受けましょう。

２　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）平成21年12月28日～平成22年1月24日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	○	➡	12 月末から減少傾向にありましたが、１月に入ってからは横這いです。学級閉鎖等の報告も相変わらず見られていますので、今後の動向に注意が必要です。
ＲＳウイルス感染症	○	↗	例年インフルエンザの増える前に流行が見られますが、今年は１月に入って報告が増えているので、要注意です。
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	○	↗	過去５年の中でも、報告が高めで推移しています。今後の動向に注意が必要です。
感染性胃腸炎	○	↗	例年秋から初冬に増加しますが、今年は１月に入ってからの報告数が非常に増えています。
手足口病	△	➡	例年夏季に報告が増えます。市全体の流行は見られませんが、泉区での報告が増えています。

◎：流行、　○：やや流行、　△：散発、　×：患者報告なし
↗：増加傾向、　➡：横ばい、　↘：減少傾向

３　気をつけたい感染症とその予防法

・ インフルエンザに気をつけましょう。基礎疾患のない子どもの入院や死亡例も報告されています。感染すると、ほとんどの方が大過なく治癒しますが、抗ウイルス剤が早期から投与されていたにも関わらず、非常に重症になった例も報告されています。現在、国内での流行は新型インフルエンザのよるものです。横浜市でも季節性インフルエンザの発生は見られていません。
　市全体の流行が落ち着いている今こそ、新型インフルエンザの予防接種を受けましょう。
「横浜市インフルエンザ流行情報」もご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/influenza/2010/sokuhou.pdf

・ 麻しん（はしか）に気をつけましょう。現在でも死亡例が報告される非常に重篤な感染症の一つですが、予防接種が非常に有効です。発病阻止ないし修飾麻しんといって、予防接種により症状を抑えることができます。一旦麻しんを発病すると、治癒後も、数ヶ月の間免疫（抵抗力）がおちることがあります。定期予防接種の対象になったら、すぐに予防接種を受けましょう。１歳のほか、年長児、中１、高３相当の年齢が対象年齢になります。

・ ノロウイルスによる感染性胃腸炎に気をつけましょう。例年秋から冬にかけて流行する感染症ですが、１月に入ってから患者や集団感染の報告が増えています。手洗いと、食材の充分な加熱、吐物の迅速な処理が大切です。

・ 腸管出血性大腸菌感染症に気をつけましょう。例年夏に多く報告されていますが、１月になっても報告が多く見られています。肉の喫食には充分な加熱を心がけましょう。

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課　　http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken

輸血や、母子感染以外の感染もあります。

感染症Q&A　B型肝炎 編

（衛くんと研子先生の一問一答）

必要な人が予防接種で免疫をつけることが大切です。

衛（まもる）：研子先生。田舎のいつもお小遣いをくれるおじさんがB型肝炎になって入院したんです。今日は、B型肝炎について教えてください。

研子先生：B型肝炎は、B型肝炎ウイルスに感染することで起こるのよ。昔は医療行為や、輸血のような血液製剤で感染したり、お母さんから赤ちゃんに感染したけれど、今は対策が進んでそのようなことではまず感染することはないけれど、夫婦等家族間等での感染は残っているのよ。感染すると、一過性の急性肝炎を起こすほかに、慢性化して肝硬変や肝臓がんを引き起こしたり、劇症肝炎といって死亡することもある病気を起こすこともある怖い病原体なのよ。

衛：え～。僕これからいったいどうしたらいいのかなあ。まだまだ、お小遣い欲しいし～。

研：知らないうちに感染していることもあるからおじさんの家族中の検査が必要ね。感染者には肝炎の治療を、感染していない人は、予防接種を受けることが必要よ。

衛：予防接種なんてあるんですか。

研子先生：あるし、非常に効果が高いとされているわ。下の表をみてね。米国ではB型肝炎の予防接種は標準予防接種に入っているくらいよ。米国ではB型肝炎の予防接種はこども全員に接種が勧められているのよ。ワクチンで予防できる病気は予防することが大切だし、限られた医療資源を効果的に活用するためにも、必要な人には予防接種が勧められるわね。

	出生時	1ヶ月	2ヶ月	4ヶ月	6ヶ月	1歳	15ヶ月	1歳半	2歳	2~3才	4~6才
B型肝炎	●	●	●				●				
ロタ			●	●	●						
DPT			●	●	●			●			●
Hib			●	●	●		●				
肺炎球菌			●	●	●		●			◎	
ポリオ			●	●			●				●
インフルエンザ					毎年●						
MMR							●				●
水痘							●				●
A型肝炎								●		◎	
髄膜炎菌										◎	

米国標準予防接種スケジュール　●標準接種予定　◎必要時接種勧奨者

一部日本で認められていない予防接種もあります。

衛：僕のおじいちゃんは大人になってから感染したけれど治ったんだって。僕も感染したら自然に治します。

研：今までの日本のB型肝炎は、大人になって感染したら慢性化しなかったんだけれど、最近外国から入ってきた遺伝子型（Ae型）に感染すると、大人になってから感染しても高い確率で慢性化してしまうの。
横浜市内の住民健診（特定健診、エイズ健診等）でも、いろいろな年齢層でB型肝炎の感染者が見られているので、健診の機会を捉えて健診を受けて、もし感染していたら治療を受けること。その上家族は予防接種を受けて感染予防をし、感染者の怪我とかで出る血液等には、感染防止対策が大切になるのよ。

衛：なんだか感染防止って難しそうなんですけれど・・・。

研：子宮がんにウイルスによるものがあることが判ったり、神経難病のある種のものに病原体の感染が関わっていることが判ったりと、医学の進歩で感染症の捉え方は変わってきているの。今後医学がますます進歩して、今知られていない感染症がわかるかも知れないから、標準予防策といって、唾液、血液、尿便等他の人の体から出るものは、基本的に感染性があると思って対処することが大切なのよ。予め触れるときは手袋エプロンを着用し、万が一触れてしまったら、良く洗い流すこと、今でもやっていることよ。

衛：ぼくおじさんにどう接したらいいんだろう。

研：おじさんはおじさんでしょ。今までと同じで甘えていいのよ。でもおじさんが怪我したりしたら、手にビニールをはめて手当てしたりといったことを心がけましょうね。

衛：は～い。

B型肝炎については、下記をご参照ください。
http://idsc.nih.go.jp/iasr/27/319/tpc319-j.html　（国立感染症研究所）

平成22年３月12日

感染症に気をつけよう

１　全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

腸管出血性大腸菌感染症：２例の報告がありました。２例とも牛レバーの生食によるものでした。肉類からの感染のほかにサラダ等から感染した例もあり、食材の充分な洗浄と適切な温度での保存、特に内臓を含む肉類は、調理時に中心温度が１分間は75℃以上になるような充分な加熱が必要です。

麻しん（はしか）：11例の報告がありました。その中の３人は小学校の同級生でした。麻しんは2009年に全国で741名（暫定値）見られ、横浜市では43名。神奈川、東京、埼玉、千葉で369人と、首都圏で全国の過半数を超えています。

HIV感染症：１例の報告がありました。すでにAIDSを発病している状態でした。早い時期の診断は適切な時期に治療を始めることが出来ますし、またパートナーの感染防止にもなります。

２　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）平成22年1月25日～2月28日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	○	↘	今シーズンは、秋から新型インフルエンザが流行しましたが、今年に入って減少傾向が続いています。
感染性胃腸炎	○	→	今年に入り流行が見られています。集団発生の報告もあるため、引き続き注意が必要です。
RSウイルス感染症	○	→	乳幼児の肺炎や細気管支炎の原因になります。１月から増加し、この時期としては、過去５年の中では最大の報告数となっています。
流行性耳下腺炎	○	→	過去５年の中では最大級の流行となっています。引き続き注意が必要です。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし
↗：増加傾向、→：横ばい、↘：減少傾向

３　いま流行っている病気とその予防法

・麻しん（はしか）に気をつけましょう。
Ⅰ期(１歳)とⅡ期(小学校入学前の１年間)、計２回の予防接種を忘れず受けましょう。2007年までは生涯１回の予防接種を受ければ良いとされていましたが、一昨年の首都圏の流行で、予防接種を受けていても感染した人が多数報告されました。
麻しんの有効な予防のためには生涯２回の予防接種が必要とされています。2008年から2012年までの間は、中学１年と高校３年相当年齢に、Ⅲ期、Ⅳ期としての予防接種がありますので、対象年齢になったら、必ず接種するようにしましょう。

・ＲＳウイルス感染症に気をつけましょう。２歳までに多くが感染しますが、新生児や乳幼児、免疫不全者では重症化することがあります。乳幼児の肺炎の約半数の原因と言われています。無呼吸や急性脳炎といった合併症もあり、乳幼児の注意すべき感染症です。

・インフルエンザに気をつけましょう。
３月に入り、季節性インフルエンザ（Ｂ型）による集団感染が市内で初めて確認されました。今後の動向に注意が必要です。

市内の最新情報は、下記をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/influenza/2010/sokuhou.pdf

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

感染症Ｑ＆Ａ　麻しん（はしか）編

（衛くんと研子先生の一問一答）

衛（まもる）：研子先生。友達がはしかで学校休んだんですけれど、母さんが予防接種を受けなさいって言うんです。いまさら受けても無駄でしょ？

研子先生：そうね。まず感染の可能性から考えましょうね。はしか特有の発疹の出る4日前から、発疹が出てから4日後まで感染の危険があるから、その時期に会っていたら感染する危険はあるのよ。感染の危険から72時間以内であれば、予防接種の効果があるの。だから、今まではしかにかかったことがなく、定期の予防接種も受けていなかったら、予防接種は必要よ。

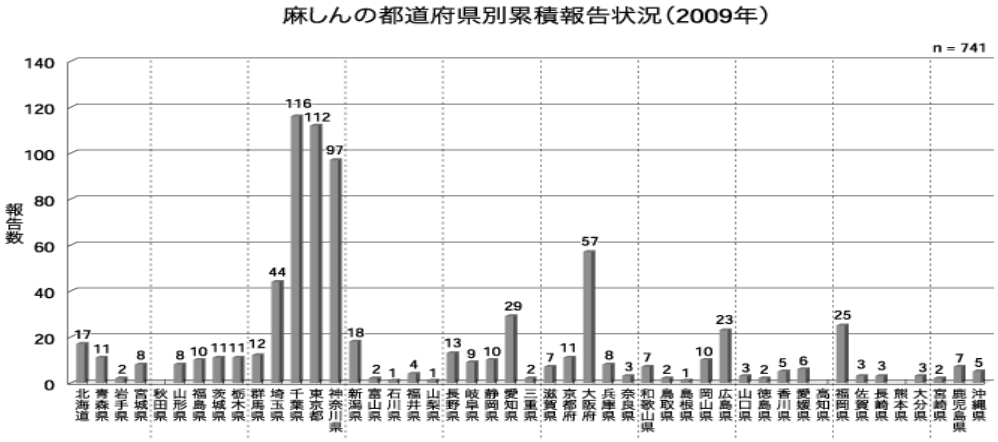
だって、「**はしかって、本当に怖い病気なのよ。**」

接触感染、飛沫核感染、空気感染と「**感染経路も多彩**」だし、しかも非常に「感染力が強い上」に重症だし、「**時に死亡**」することもあるの。

肺炎、脳炎、中耳炎、心筋炎、喉頭（気管支）炎等、「**重い合併症**」もあって、特に脳炎等中枢神経系の合併症では、致死率は15％と高いし、仮に回復しても、知的障害や麻痺、けいれん等、「**後遺症が残る**」ことも多いのよ。

衛：前に、予防接種を受けていればいいんじゃないですか。

研：昔は1回予防接種をすると、予防接種の免疫が効いている間に、免疫に護られているうちに何度か刺激を受けていたりして、それでまた免疫が復活していたの。でも今は、はしかが減ったから、刺激がなく免疫も減る一方で、ついには、はしかにかかってしまうのよ。横浜市でも、ちゃんと予防接種を受けていたのにはしかにかかった人が沢山いたのよ。



衛：でも、僕、体力あるから、かかっても大丈夫だと思うんですけど。

研：衛くんは治っても、衛くんが感染させた人がすごく重症になるかもしれないでしょう。しかも、はしかは、ごく稀に、感染後数年経ってから、**亜急性硬化性全脳炎**といって、知的にも運動的にも徐々に障害が出てきて**死に至る**病気も起こってくるのよ。非常におそろしい病気よ。

予防接種は、個人防衛と集団全体の防衛の考えがあるわ。みんなが免疫を持っていたら、集団感染は起こりにくいでしょ。それに全国の中でも**横浜はまだ患者が多い**し、要注意よ。

衛：ぼく、予防接種を頑張って受けます。

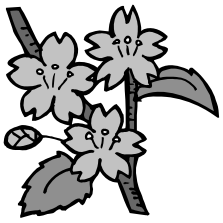
研：そうね。ご両親にご相談して、母子手帳等でいつ予防接種をうったか確認してね。ただし、はしかは原則人からしか感染しないし、予防接種も良く効くから、WHOも撲滅を目指している疾患でもあるわ。定期の予防接種も大切だけれど、今回のように臨時の接種も大切よ。しっかり対応して「**はしか輸出国**」**にならない**ようにしましょうね。

衛：は～い。

市内でもはしかが散発しています。予防接種は必ず受けましょう。

平成22年４月20日

感染症に気をつけよう



１　全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

腸管出血性大腸菌感染症：１例報告がありました。感染経路は不明です。
髄膜炎菌性髄膜炎：１例報告がありました。今では全国で年間数人の報告しかありませんが、戦後、国内で流行した重大な疾患です。今回は、患者からの感染はありませんでした。
HIV感染症：4例報告がありました。２名は、すでにAIDSを発病している状態でした。早い時期の診断は適切な時期に治療を始めることが可能であり、またパートナーの感染防止にもなります。

２　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）平成22年3月１日～22年3月25日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	△	↘	市内に流行は認められませんが、3月に入り季節性インフルエンザB型も認められています。
水痘	○	→	毎年春先から初夏にかけて流行が見られます。都筑区では報告が多く見られました。
RSウイルス感染症	○	↘	乳幼児の肺炎や細気管支炎の原因になります。１月から増加し、この時期としては、過去５年の中で最大の報告数でしたが、やや減少してきました。
伝染性紅斑	○	→	過去５年の中では高めに推移しています。瀬谷区、泉区では報告が多く見られています。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし
↗：増加傾向、→：横ばい、↘：減少傾向

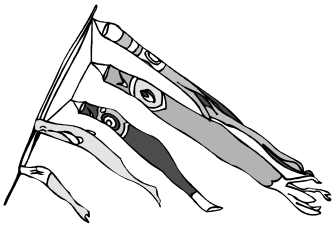
３　いま流行っている病気とその予防法

・ 麻しん（はしか）に気をつけましょう。
Ⅰ期(１歳)とⅡ期(小学校入学前の１年間)、計２回の予防接種を忘れず受けましょう。無症状の時期にウイルスを排出する期間が長いので、インフルエンザのような比較的ウイルス排出期間の短い感染症と異なり、施設閉鎖で感染防止するには限界があります。感染力も強いので、気が付いたときにはすでに感受性者に感染していることが多いです。最も大切なことは予防接種を受けることです。2008年から2012年までの間は、中学１年と高校３年相当年齢に、Ⅲ期、Ⅳ期の定期予防接種(無料)があるので、対象年齢になったら必ず接種しましょう。

・ ＲＳウイルス感染症に気をつけましょう。２歳までに多くが感染しますが、新生児、乳幼児、免疫不全者では重症化することがあります。乳幼児の肺炎の約半数の原因と言われています。無呼吸や急性脳炎といった合併症もあり、乳幼児の注意すべき感染症です。

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/



平成22年５月21日

感染症に気をつけよう

１　全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）平成22年4月

腸管出血性大腸菌感染症の報告が１例ありました。
麻しんの報告が３例ありました。３例とも臨床診断に加えて検査診断も行われていました。

２　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）平成22年３月22日～４月18日

疾患名	市内流行状況		コメント
水痘	○	➡	毎年春先から初夏にかけて流行が見られます。低年齢に多い疾患ですが、成人が罹患するとより重症になることがあります。
伝染性紅斑	○	➡	毎年春から夏にかけて流行が見られます。過去５年の中では、比較的多めに報告が見られています。
流行性耳下腺炎	○	➡	今年の１月から、過去５年間の中では報告数が多めにみられています。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし
↗：増加傾向　➡：横ばい　↘：減少傾向

３　気をつけたい感染症

・手足口病に気をつけましょう。
通常夏に流行が見られます。横浜市でもまだ流行は見られていません。
病気を起こすウイルスは１種類ではなく、エンテロウイルスの中のコクサッキーA16やエンテロウイルス71によりますが、その他のエンテロウイルスが原因になることもあります。
感染しても殆んどが軽症で治癒する疾患ですが、ごく稀ではありますが重症例も見られます。特に、エンテロウイルス71は、髄膜炎や脳炎といった中枢神経系の合併症も報告され、東アジアや近県では死亡例も見られました。
４月に、横浜市内でもエンテロウイルス71が検出されていますので、今年の流行に注意が必要です。

・麻しんに気をつけましょう。
季節的には、春先から夏にかけて流行し、また年によっても流行の波が見られます。
一昨年は市内でも大きな流行が見られました。非常に感染力が強い疾患ですが、一番の対策は、予防接種です。
１歳になりましたら、予防接種を受けましょう。
また、麻しんの予防接種は一回だけでは充分ではありません。
年長（小学入学前の年）でのⅡ期の接種、中学１年、高校３年相当の年齢でのⅢ期、Ⅳ期の接種も対象ですので必ず接種しましょう。

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成 22 年6月 10 日

感染症に気をつけよう

1　全数報告感染症（感染症法における１～5 類感染症）平成２２年５月

Ａ型肝炎は１例の報告がありました。22 年３月から全国で報告数が増えています。
主に魚介類の経口感染が多いですが、家族の間での感染も時に見られることがあります。
麻しんは５例の報告がありました。

2　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）平成 22 年４月 19 日～5 月 23 日

疾患名	市内流行状況		コメント
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	○	➡	例年５月～初夏にかけて流行する疾患です。今後の動向に注意が必要です。
感染性胃腸炎	△	➡	１月のピークから徐々に減少していますが、まだ小学校等から集団感染が報告されているので気をつけましょう。
水痘	○	➡	例年１月から７月頃まで流行が見られる小児に多い疾患です。空気感染、飛沫感染の他接触感染でも感染します。薄着の季節になりますので、気をつけましょう。
伝染性紅斑	○	↗	例年より多く見られています。例年６月頃が一番高くなるので今後注意が必要です。
流行性耳下腺炎	○	➡	昨年は年間を通して流行が見られませんでしたが、今年は例年より高めに報告されています。４，５年前には初夏に多く流行が見られました。今後の動向に注意が必要です。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし
↗：増加傾向、➡：横ばい、↘：減少傾向

3　気をつけたい感染症とその予防法

・ 流行性耳下腺炎に気をつけましょう。MMR としての定期予防接種が中止されてからは、３～４年毎に流行が見られています。この３年間は大きな流行は見られていませんが、今年は例年に比べて多く報告されています。２～３週間の潜伏期間の後、唾液腺の腫脹、発熱、嚥下痛を主症状として発病し、通常１～２週間で軽快する疾患です。治療法が対症療法しかないことに加え、髄膜炎や、膵炎等重篤な合併症があり、時に後遺症として難聴が残ることもある疾患です。唯一の有効な予防法は、事前の予防接種です。集団保育等に入る前に主治医へご相談下さい。

・ 伝染性紅斑に気をつけましょう。両頬の紅斑から「りんご病」ともよばれています。今年は今の時点でも患者が多めです。流行が見られた年は、７月付近にピークが見られていますので、今後の更なる流行に注意が必要です。10～20 日の潜伏期間の後、両頬、手足、体幹等に網目状の紅斑が見られますが、通常１週間程度で消失します。紅斑が現れたときには既に他人への感染の危険はなくなっています。成人では頭痛や関節炎等を起こすことがあります。妊娠中に感染した場合に、時に胎児の異常が見られることがあります。ワクチンもなく、対症療法しかない疾患です。

4　麻しん予防接種について

・ 麻しん（はしか）に気をつけましょう。唯一の予防方法・ワクチンでは、高い効果が得られます。

2008 年４月１日から、Ⅰ期（１歳）とⅡ期（小学校入学前の１年間）に加え、Ⅲ期（中１相当の年齢）、Ⅳ期（高３相当の年齢）の定期接種が始まりました。2012 年までの５年間で、小・中・高等学校世代が全て、２回の接種を完了する事を目指します。

MR ワクチンⅡ・Ⅲ・Ⅳ期の対象者は、早めに接種を受けましょう！

詳しくは横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken

リンゴ病編

感染症Q&A
（衛くんと研子先生の一問一答）

衛（まもる）：研子先生。僕のほっぺた見てくださいよ。こんなに赤くなっちゃったから、昨日お医者さんに行ったらリンゴ病って言われたんですけれど、最近りんご食べてないのにそれでも罹るんですか。

研子先生：リンゴ病は、パルボウイルス B19 という病原体が鼻や口に入ることによって罹る病気ですよ。両頬にリンゴみたいな紅斑が見られるので、リンゴ病という別名があるけれど、正式には伝染性紅斑と言うのよ。

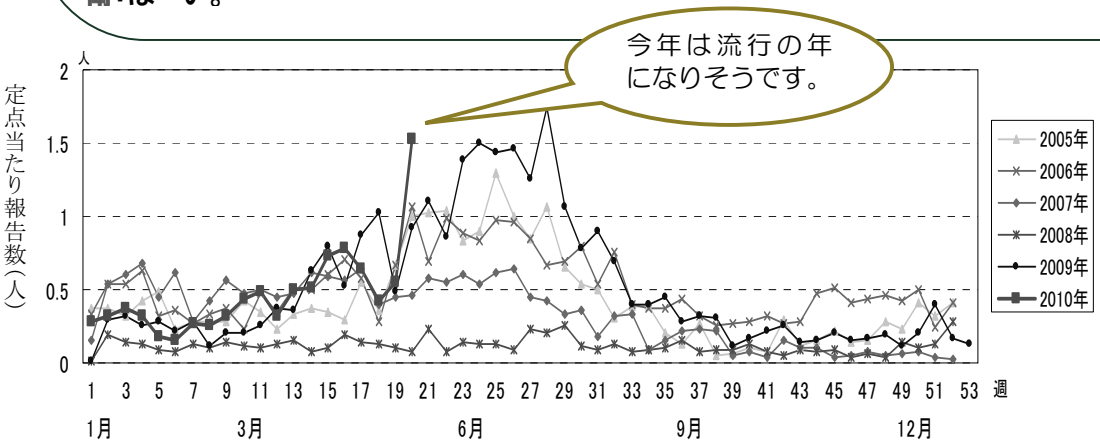
衛：僕これからどうなっちゃうのだろう。

研：紅斑が見られる1週間くらい前に軽い風邪症状が見られることがあるけれど、一般的には1週間位で紅斑も消えてしまう軽い疾患よ。 ただし、成人の場合は頭痛が見られたり、時には歩けないくらいの痛い関節炎が見られたりするけれど、それも一過性で治るのよ。
この病気で怖い合併症は、時に貧血や血小板減少、白血球減少が起こったり、お腹に赤ちゃんのいる方が罹ると、赤ちゃんが貧血になったり、時に亡くなったりしてしまうのよ。

衛：えっ！僕、人に感染させないためにはどうしたらいいの？

研：微熱とかの風邪症状の時には他の方に感染させる可能性はあるけれど、紅斑が出てきたら、もう他人には感染させないので、大丈夫よ。でも今後の流行状況に注意しましょうね。

衛：は～い。



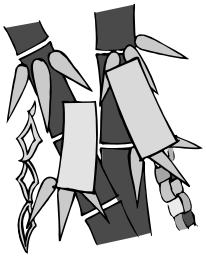
衛：でも、どうしてリンゴ病が流行りそうだとか判るんですか。

研：それはね、感染症法という法律で、お医者さんが患者さんを診察したら保健所に届けなくてはいけないことになっているからよ。結核、チフス、赤痢等の重篤な疾患は診察したら全部届出が必要だけれど、それほど重篤ではないけれど、流行が見られやすいインフルエンザや手足口病などの 12 疾患は、指定された医療機関（定点医療機関）のみが届けなければならないのよ。定点医療機関の届出の報告数で、流行しているかどうか判断しているのよ。

衛：去年のインフルエンザ警報とかも、これで判断したんですか。

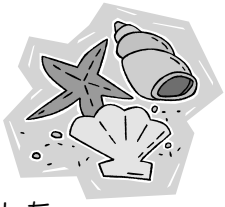
研：そうなのよ。例えば、インフルエンザが、定点あたり 10 人を越えたときは、横浜市が「注意報」の範囲に入ったと判断できるし、インフルエンザが定点あたり30 人を越えたときは、「警報域」に入ったと判断できるのよ。
　横浜市内の約200ヶ所のお医者さんたち（定点医療機関）の地道な努力で市内の流行が判断できるのはとてもありがたいことよ。また随時、感染症情報は、横浜市の衛生研究所のホームページで見ることが出来るわ。衛君も良かったら、衛生研究所（衛研）のホームページを見て勉強してね。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

衛　：は～い。



平成22年７月６日

感染症に気をつけよう



１　全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

腸管出血性大腸菌感染症の報告が２例ありました。自宅での肉の加熱不十分が疑われています。

麻しん（はしか）の報告が３例ありました。２例にワクチン接種歴が見られませんでした。

劇症型溶血性レンサ菌感染症の報告が２例ありました。今年に入り５例目の報告です。

デング熱の報告が１例ありました。インドネシアからの帰国者です。

２　定点報告感染症（感染症法における５類感染症９　平成22年５月24日～６月20日

疾患名	市内流行状況		コメント
ヘルパンギーナ	○	↗	例年夏に多く流行が見られます。これからの季節は注意が必要です。現在磯子区に多く報告が見られています。
伝染性紅斑	○	→	過去５年間で高めに推移しています。妊娠中に感染すると、胎児に影響が起こることもある疾患です。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	○	→	例年初夏に流行する小児に多い疾患ですが、夏休みには減少する傾向にあります。今年は多く報告が見られています。
水痘	○	→	例年初夏に多く見られます。過去５年の中では高めに推移しています。
流行性耳下腺炎	○	→	流行の見られなかった昨年と比し、過去５年間と比べても、今年は当初から報告が多く見られています。

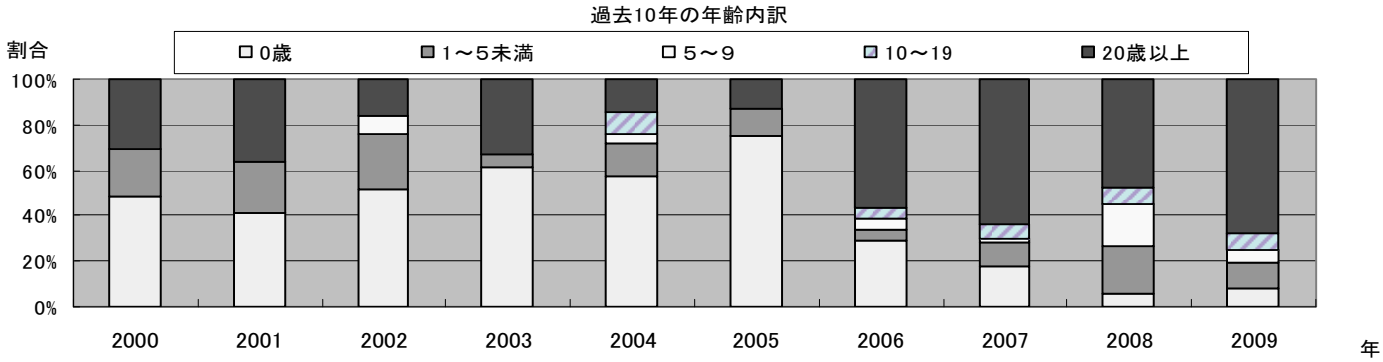
◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし

↗：増加傾向、→：横ばい、↘：減少傾向

３　気をつけたい病気とその予防法

・　百日咳に気をつけましょう。

市内の小児科定点医療機関からは、過去5週間に22例の報告が見られましたが、１歳未満が３例のみで、19例（86%）は15歳以上でした。10年前は５歳未満に多く報告がありましたが、昨年は83人中56人（67%）が成人の感染でした。母親からの移行抗体が有効に作用しないために、乳児期早期から罹患する可能性のある疾患です。生後６ヶ月未満のワクチン未接種の乳児が罹患すると、時に死に到る疾患であり、また大人の長引く咳にも注意が必要です。



・手足口病に気をつけましょう。夏季に流行する手足口の水泡を主症状とした予後良好の急性ウイルス性感染症ですが、時に髄膜炎、脳炎等重篤な中枢神経系の合併症を起こします。今年は、横浜でも過去５年間と比し多めに報告されていますが、全国でも広く流行しています。夏に向けて今後の更なる流行も予想される疾患です。

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html

横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

良性疾患ですが、時には重症になりますので注意が必要です

感染症Q&A　手足口病　編

（衛くんと研子先生の一問一答）

全国で手足口病の報告が増えています

衛：研子先生。妹の花ちゃんが、手足口病に罹ってもう３日で大変なんです。離乳食を食べさせると痛がっちゃって・・・。このままやせほそってしまったら、どうしよう。

研子先生：大丈夫よ。通常３～７日で治まる病気だから、口の中の水泡が無くなればまた元気な花ちゃんにもどるわよ。でも、果汁とかしみるものは避けて、刺激の少ないいつもより軟らかい離乳食にして、脱水にならないように水分はしっかり摂らせることね。

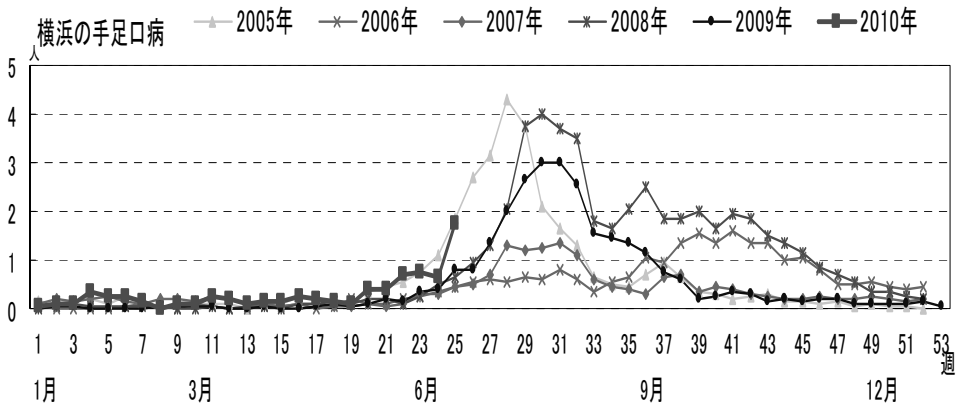
衛：見ていて本当に痛そうだから可哀想で・・。花ちゃんの保育園で、今週初めに同じ症状の子がいたって話なんです。他の子に感染させる危険のある子を登園させていいんですか。

研：あらあら厳しいわね。確かに手足口病は、飛沫感染が主だけれど、糞口感染や接触感染でも感染するから、保育園のような集団だと広がりやすいわね。でも、症状が出ないこともあるし、基本的には軽症の疾患なのよ。成長と共にどこかで感染し免疫（抵抗）ができる疾患のひとつで、かえってたまたま免疫が無くて、成人になってから感染すると皮膚症状が強く出たりして大変なのよ。

　それに、症状が無くなっても３～４週間も糞便にウイルスが排出されるから、この程度の症状で、広く感染する機会がある疾患を１ヶ月も登園自粛させることは現実的じゃないわね。

衛：僕は、年長さんの時に感染したからもう罹らなくてすむの？

研：残念ながらそうじゃないのよ。症状からは見分けが付かないんだけれど、エンテロウイルス71とか、コクサッキーウイルスA16とかが殆んどだけれど、そのほかのウイルスによっても同じ症状が出ることがあるの。だから一度罹っても、また罹る可能性のある病気よ。



衛：じゃあ、花ちゃんも今回は安静で治せばいいね。

研：稀だけど、髄膜炎や脳炎といった重い症状をおこすこともあるのよ。エンテロウイルス71（EV71）の感染で重症例が多く見られるそうよ。今年になってから、中国でも流行が報告されていて、数百人のこどもが亡くなっているし、日本全国の衛生研究所で、ウイルスの型を検査しているけれど、EV71が多く検出されているの。この横浜でも検出されているわ。それに、国内でも広い範囲で手足口病が流行しているから要注意よ。

衛：僕、こわい。

研：基本的には軽症の疾患よ。恐れすぎないでね。発病当初は、高熱が続くか、ぐったりしていないか、嘔吐しないか等注意深く観察していましょうね。それに花ちゃんのおむつを替えたら、しっかり手洗いしましょうね。

衛：は～い。

6月　の
衛研検査情報

インフルエンザ情報

インフルエンザの情報が溢れて、効率の良い情報源を探すのにご苦労されていませんか。そのような方のために、役にたつWEBページをご紹介をしています（抜粋）。

【横浜市衛生研究所：横浜の情報】

発生動向調査週報
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/kansen_khama.html

インフルエンザ流行情報
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/influenza/influenza_rinji_index2009.html

行動計画
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/Hokenjo/genre/kansensyo/pdf/koudoukeikaku.pdf

【厚生労働省、国立感染症情報センターIDSC：全国の情報】

ウイルス分離検出状況　http://idsc.nih.go.jp/iasr/influ.html
学校欠席者数　http://idsc.nih.go.jp/idwr/kanja/infreport/report.html
ワクチン関連情報　http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou04/infuI_vaccine.html
ＩDSCによるパンデミック情報　http://idsc.nih.go.jp/disease/swine_influenza/swine-idscup.html
WHOによるパンデミック情報　http://idsc.nih.go.jp/disease/swine_influenza/swine-whoup.html
検疫所によるパンデミック情報　http://www.forth.go.jp/01_topics/fragment4.html

アレルギー物質含有食品

昨今は、もともとの食材が検討つかないほど加工されている食品も増えていませんか。
アレルギー物質は、食品衛生法等で、表示が義務付けられています（平成13年4月）。
（卵、乳、小麦、そば、落花生、えび、かに　の　７品目）

【今回の検査】　卵の検査　16検体　　えび・かにの検査　8検体　計 24検体　について

【結果】　違反ではありませんが、原料に入っていなくても、製造ラインや蒸し器等が共通した場合に検出されています。
さらにご興味のある方は。衛生研究所ホームページをご覧下さい。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/inspection_inf/201006/pdf/5-6.pdf

結核感染の血液診断法　クォンティフェロン

従来感染の判定に用いられていたツベルクリン反応は、結核菌に特異的でない物質も含まれているために、非定型抗酸菌等、結核以外にも陽性に出たり、あるいは免疫状態によっては、陰性に出てしまうといった不具合もありました。しかも、接種と判定の２日、医療機関を受診しなくてはなりませんでした。

今は結核の感染は血液で判断できるようになりました。
衛生研究所では、より正確に結核を判断できる、クォンティフェロンの検査を行っています。
さらにご興味のある方は。衛生研究所ホームページをご覧下さい。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/inspection_inf/201006/pdf/7.pdf

正しい知識で健康を守る方のために、衛生研究所では毎月検査結果をご報告しています。詳しくはホームページをご覧下さい。

横浜市**衛**生**研**究所　感染症・疫学情報課
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年８月5日

感染症に気をつけよう

１　全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

腸管出血性大腸菌感染症の報告が11例ありました。感染経路は不明です。

Ａ型肝炎の報告が２件ありました。感染経路は不明です。今年春からＡ型肝炎の報告数が増えていましたが、７月に入り例年どおりに落ち着いています。

レジオネラ症の報告が５件ありました。６月も５件でした。昨年１年では16件でした。

麻しん（はしか）の報告が５例ありました。２例にワクチン接種歴が見られませんでした。

２　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）　平成22年6月21日～7月25日

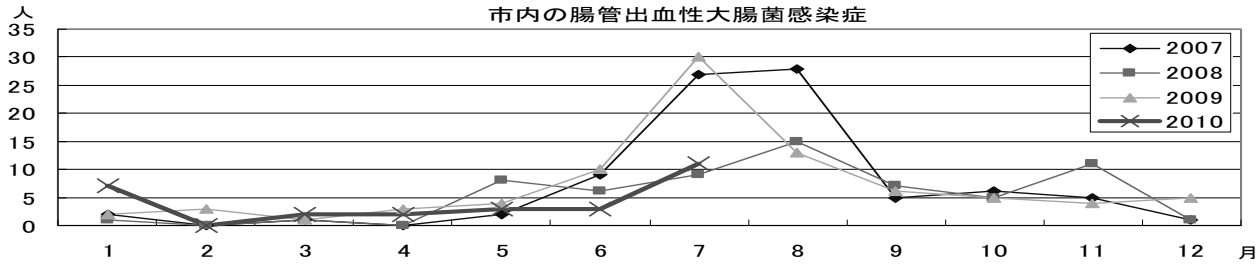
疾患名	市内流行状況		コメント
ヘルパンギーナ	◎	↘	例年夏に流行が認められます。減少傾向にあるとはいえ、まだ市全域で流行の状況です。
手足口病	○	↘	例年夏から秋に流行が認められます。減少傾向にあるとはいえ、まだ例年と比し高めです。
流行性耳下腺炎	○	→	流行の見られなかった昨年と比し、また過去５年間と比べても、高めです。
百日咳	△	→	こどもの疾患と思われていましたが、過去５週では、６割以上が20歳以上の大人の感染でした。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし

↗：増加傾向、→：横ばい、↘：減少傾向

３　気をつけたい感染症

・　腸管出血性大腸菌感染症に気をつけましょう。例年夏に多く見られていますので、この季節は特に注意が必要です。食中毒の他、人から人に感染する２次感染もおこす菌ですが、本市で昨年感染経路が判明したのは、ほとんどが焼き肉等外食での肉やレバー等の内臓肉の加熱不十分、ないしユッケやレバ刺し等の生肉によるものでした。腸管出血性大腸菌は、牛等の家畜が保有していることのある菌です。どんな新鮮な肉でも、菌が付着している可能性があります。肉類や内臓類の喫食の際は、外食や家庭内に関わらず、中心温度が 75℃１分以上を目安に十分な加熱を心がけましょう。



横浜市衛生研究所ホームページをご参考ください

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html

４　家庭でできる食中毒予防の６つのポイントを心がけましょう

①新鮮な食材の購入　②冷蔵・冷凍等適切な温度下での食材保存　③手洗いの励行、清潔な調理

④肉・魚の十分な加熱　⑤食事前の手洗いと調理後はすぐに食べる

⑥清潔な容器で保存し温め直すときは十分に加熱、長時間過ぎたものは捨てる

市内の最新情報は、下記をご覧ください。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/pdf/2010nen/201029.pdf

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html

横浜市**衛**生**研**究所　感染症・疫学情報課

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

市内でヘルパンギーナが警報レベルです。

感染症Q&A　ヘルパンギーナ　編
（衛くんと研子先生の一問一答）

８月７日（土）は衛生研究所の施設公開です。

衛：研子先生。横浜市でヘルパンギーナが警報レベルに達しているって、保健室の先生が言っていたんですけど、ヘルパンギーナってなんですか。僕、聞いたことがないけれど。

研子先生：発熱と口の中の水泡を特徴として、主に就学前のこどもが罹る急性ウイルス性疾患よ。１歳児に一番多く、年齢とともに罹患率は減少しているのよ。症状は、時には40℃にもなる突然の高熱と、上あごの奥のほうの水泡や潰瘍が特徴なの。手足口病と似ているけれど、水疱や潰瘍が、手足口病に比べたら上あごの一番奥の方で場所が違うということと、手足に水泡がでないということで区別がつくわ。潰瘍ができている間は食べ物がしみて痛いので、不機嫌になったり、飲食物を嫌がって、脱水になったりするから、果汁とかしみるものは避けて、刺激の少ない、いつもより軟らかい食事にして、くれぐれも脱水にならないように水分はしっかり摂らせることね。それと、ごくまれだけれど、無菌性髄膜炎や急性心筋炎をおこすので、今回の横浜市くらい流行していると、お医者さんたちも、重症児が起こりえることは念頭においていらっしゃるでしょうね。

衛：ヘルパンギーナは、一回罹ればあとは罹らないで済むんですか。

研：残念ながら違うのよ。これも手足口病と同じで、A群コクサッキーだの、B群コクサッキーだの、エコーウイルスだの、いろいろのウイルスがおこすので、一度罹ってもまた罹る可能性のある病気なのよ。

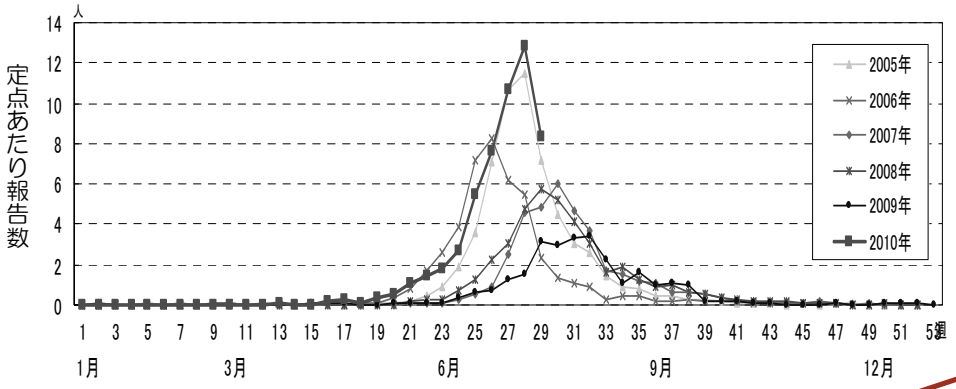
衛：ところで、警報レベルって誰が決めるんですか。いやな病気はすぐに警報だして欲しいなあ。

研：警報や注意報の基準は、国立感染症研究所で決めているのよ。全国一律の基準があるから昨年のように、新型インフルエンザが流行に入りましたとか、各地で比べることが出来たよ感染症は広域行政が必要なものの一つなのよ。

衛：じゃあ、僕、学級閉鎖になって学校休めればいいや。家でゲームやりたいし・・・。

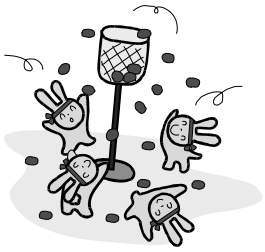
研：学級閉鎖は、学校保健安全法で第一種から第三種まで決められているけれど、対象疾病は、流行の可能性と当然重症度も考慮されて決められるので、ヘルパンギーナは入っていないわ

市内のヘルパンギーナ



新鮮な野菜を安く買えると嬉しいわよね。でもそのほかにも、健康情報が盛り沢山だから、夏休みの自由研究にもお勧めよ。

８月７日（土）は衛生研究所の施設公開の日です（９時半―16時）。朝は、ＪＡ横浜の野菜の販売もあるから、絶対来てね。



平成22年９月8日

感染症に気をつけよう

１　全数報告感染症（感染症法における1-5類感染症）

腸管出血性大腸菌感染症の報告が８月に18例ありました。

デング熱の報告が７、８月で計４例あり、全てが東南アジアで蚊にさされたことによる感染でした。全国の報告でも、殆んどが東南アジアでの感染です。東南アジアへ旅行の際は、虫刺されに気をつける必要があります。

HIV感染症の報告が９例（５例は７月以前の追加報告）ありました。殆んどが男性の同性間性的接触によるものでした。

２　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）平成22年7月26日～8月29日

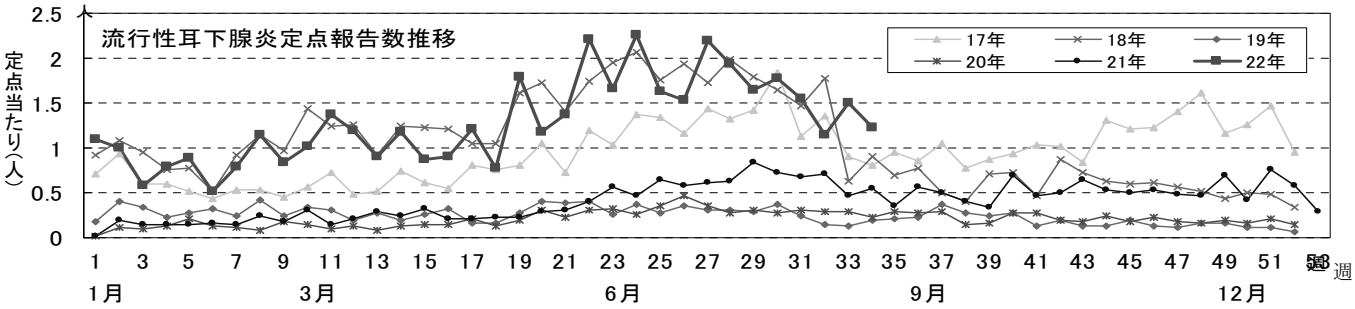
疾患名	市内流行状況		コメント
流行性耳下腺炎	○	➡	今年の１月から、過去５年間の中では報告数が多めにみられていました。通常秋には落ち着きが見られていましたが、今年度は過去５年でも最大の報告数です。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし

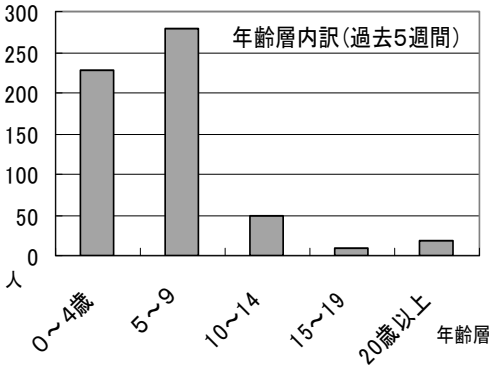
↗：増加傾向　➡：横ばい　↘：減少傾向

３　いま気をつけたい感染症

・　流行性耳下腺炎に気をつけましょう。平成５年にMMRワクチンが中止されたこともあり、平成６年以降になって、全国的に３～４年毎に流行が見られます。横浜市でも平成17年18年は流行の年でしたが、今年も大きな流行の年となっています。感染経路は飛沫感染や接触で、幼児や小学校低学年では集団感染が見られたりします。こどもの夏休みが終わり、集団感染が心配されます。平成17年は冬季にも流行が見られおり、今後の発生動向が注目されます。



また、過去５週の動向では、３～６歳の感染が多く、集団生活に入り始めた年齢層への感染と思われますが、20歳以上の感染が３％報告されています。感染しても２割は不顕性感染で、約半数は呼吸器症状程度の非特異的な軽い症状で済みますが、耳下腺の他にも、髄膜、脳、すい臓、睾丸、卵巣等といったさまざまな臓器に炎症を起こす全身感染症です。頻度は少ないながらも、感音性難聴や脳炎後の多彩な障害といった重篤な後遺症をみることがあります。



感染防御にワクチンは有効です。しかし、患者と接触してからワクチンを接種しても、発病予防にはなりません。集団生活に入る前での接種がすすめられます。

市内の最新情報は、下記をご覧ください。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/pdf/2010nen/201034.pdf

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic_inf/kansen_khama.html

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課 http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年9月８日

薬が効かない菌が増えているって
ホント？

感染症　Q&A　薬剤耐性菌　編
（衛くんと研子先生の一問一答）

薬が効かないなら
一生治らないの？

研子先生：衛くん。最近顔を見ないから、ついでがあったので寄ってみたんだけれど。

衛：薬剤耐性菌の話をテレビで聞いて外に出るのが怖くなっちゃったんです。どんな抗生剤も効かないなんて・・・。今に世界中がその菌で溢れて、僕も罹かってしまうんじゃないかって・・・。

研：抗生剤が70年前から使われ始めて、感染症による死亡は激減したけれど、その反面、耐性菌が増えて、薬剤耐性はいまや全世界的な課題よね。結核や、ブドウ球菌といった細菌の他にも、インフルエンザのウイルスや、水虫類といった真菌、マラリアといった原虫に至るまで広く薬剤耐性が問題になっているわね。話が複雑になるから細菌に限って説明していい？

衛：お願いします。

研：なんで耐性となるかには、大きくわけて三つあるのよ。一つは細菌自体の性質として、そもそも耐性である場合。もう一つは、抗生剤等の力が働いて、細菌自体が変化して新しく耐性の性質を獲得する場合。例えばストレプトマイシンを単独で使った耐性結核菌が有名よ。もう一つは、少し難しいけれど、菌自体が変わるわけじゃなくて、耐性の性質が他から入ってくるの。一つの細菌から別の細菌に、耐性といった性質を伝えてしまうプラスミドというものがあるのよ。もとの菌の耐性の性状が新しい菌にも伝わってしまうのよ。違う種の細菌に伝わると、新しい耐性菌の出現になってしまうわ。

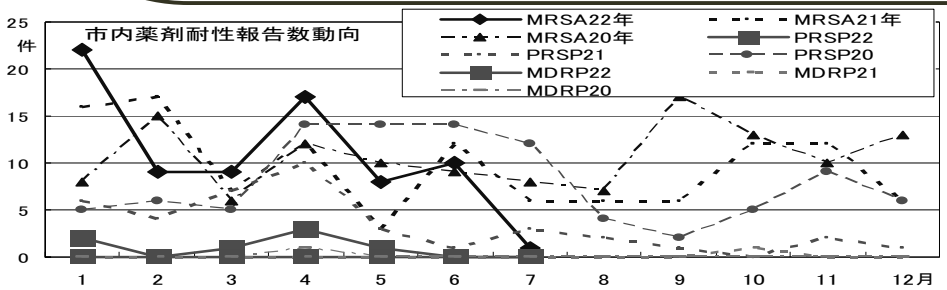
でも、重要なことは、耐性になっても、細菌の基本的性質は変わらないということよ。細菌自体の性質が強毒になるとか、消毒にも耐性になってしまうとか、増殖力や感染力が増すとかいったような変化がおこるわけじゃないのよ。

衛：じゃあ、何で薬剤耐性菌がこんなに問題になっているんですか。

研：多剤耐性の菌が問題になるのは、病院内でなのよ。病院は免疫の弱い方が多いので、そこで患者さんが感染したりすると、薬剤（抗生剤）が効きにくくなるから、治療には苦労するわね。また、耐性の性質が、他の菌にうつって、新しい耐性菌ができてしまうことが一番恐ろしいわね。

衛：僕たちどうしたらいいの？

研：普通に暮らすにはあまり関係無いわよ。でも、病院が対処することが大切ね。細菌に対する監視体制と、手洗い・消毒に加えて、患者さんの隔離まで含めたしっかりした蔓延予防、それに院内だけでなく、行政を含めた情報共有も大切ね。行政でも代表的な菌には監視（薬剤耐性サーベイランス）をしているのよ。バンコマイシン耐性の腸球菌（VRE）やバンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌（VRSA）、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）、ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP）、薬剤耐性緑膿菌・多剤耐性緑膿菌（MDRP）に対して行っているのよ。



研：横浜での耐性菌の報告数では、MRSAが一番多く、これは全国でも同じ動向ね。でもブドウ球菌は人体の常在菌だから、医療機関以外では、MRSAが検出されたからって、隔離や除菌する必要はないのよ。腸球菌も緑膿菌も肺炎球菌も皮膚や消化管の常在菌だったり、環境に普通見られる菌なので、検出されたからって心配しないでね。菌自体が問題ではなくって、【耐性の性質が広がることが問題】なのよ。例えばMRSAに、VREの耐性性質が伝達されたらVRSAといって、すごい耐性菌ができあがってしまうようなことよ。

細菌感染症は、抗生剤を使わなくても、治癒できることが殆んどです。衛くんも、自分の免疫を信じて、菌の正しい情報を踏まえて、過度の心配はしないでね。土壌細菌が怖くて外出しなくなるほうが、健康に悪影響よ。

また衛くんの場合は、来年から保育園に入る妹の花ちゃんの「おたふくかぜ」の予防接種をするほうが現実的な選択よ。インフルエンザも市内で集団発生が２件見られていることもあって、衛くんも、予防接種を考えたほうがいいわよ。

衛：は～い。

平成22年9月24日

感染症に気をつけよう

耐性菌に対して何をしたらよいのだろう？

感染症Q&A　薬剤耐性菌編　その２

衛くんと研子先生の一問一答

なぜ耐性菌が問題なのだろう？

衛：研子先生。最近耐性菌が話題ですけど、どうして急に話題になったのか教えてくれますか？

研子：そうね。約70年前から抗生剤が使われるようになって、それから徐々に耐性が始まり、実際耐性菌が問題にされたのは1980年代くらいからね。それからは、耐性菌が増えて抗生剤が効かなくなると、新しい抗生剤が出て、それも直に効かなくなるといった繰り返しだったのよ。

衛：どうして菌ばかりそんなにしぶといんですか！？

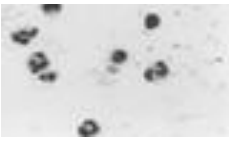
研：生存に厳しい環境を【選択圧】として、そこでも生きられる新しいタイプが現れてくるということはダーウィンも進化論の中で提唱したとおりで、菌ばかりでなく、広く生物に見られている現象なのよ。ウイルスや寄生虫、害虫、雑草、人のがん細胞等にも薬剤耐性は認められるのよ。「化学物質→耐性→新しい化学物質→新しい耐性」といったいたちごっこになってしまっているわね。

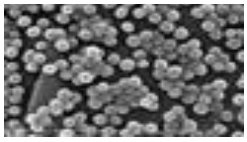
衛：じゃあまた新しい抗生剤がでればいいんですね！

研：薬剤の開発といってもそうは簡単にいかないでしょう。農作物に関しては、やっつけたいものに対してではなくて、守りたいもの（農物）の性質を遺伝子組み換えで変えたりもしているくらいよ。新しい薬剤の開発に関しては、手詰まりになりやすいわね。

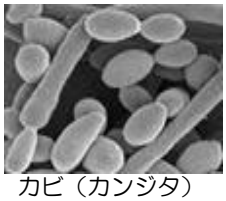
衛：じゃあ僕たち、やられるのを待つだけなの？

研：衛研にも、耐性菌の消毒に関して問いあわせがいくつかあったりするけれど、抗生剤に耐性になっても、もともとの菌の性質<かかったときの人体へのダメージ（病原性）、感染しやすさ（感染性）、消毒されやすさ（感受性）等>が変わるわけではないのよ。一般的な生活をしている人にとっては、からだの中に入ったり、皮膚や粘膜の表面についたりするだけで、すぐに病気になってしまうものでは無いのよ。だけど、からだの抵抗力が落ちているときなどには、多剤耐性菌による感染症にかかることがあり、この場合、抗菌薬（抗生剤）がききにくくて、治療が難しくなる場合があるのよ。

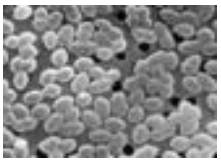

マラリア


黄色ブドウ球菌（MRSA）

インフルエンザウイルス


カビ（カンジタ）

結核菌


腸球菌（VRE）

米国等で問題になっている薬剤耐性微生物の例　（米国疾病予防センターHPより）

衛：耐性菌が増えないように、感染したくない人は無菌室に入って、感染した人は隔離したら、耐性菌が増えることを止められませんか？

研：保菌者（菌は持っていても何の症状も無い人）を隔離するのは人権的に非常に問題よね。またMRSAのように市中に広く認められてしまうと、隔離は非現実的でしょ。施設や入院中の場合は、人権的にも配慮しながら、耐性菌のタイプによって、個室に入るなどの必要な対策を取ることになっているのよ。
病院の無菌室は、骨髄移植等の際に、免疫が非常に低下する人のための部屋だし、一般的な免疫力を持っている人は入る必要は無いわね。
それに、考えてみてね。感染症を克服するのに一番大切なのは免疫力なのよ。免疫力がないと様々な感染症に罹りやすくなるし治癒も難しくなるの。この大切な免疫力を強くするには、適切な食事と運動、十分な睡眠といった規則正しい生活が大切よ。

衛：病気になったとき、お見舞いに行くときなどで病院に行く場合には、どうすればいいですか？

研：病院には免疫の弱い方が多いので、外から菌を持ち込んでしまわないように、また、病院には【選択圧】の関係で耐性菌がいる場合もあるので、外へ耐性菌を持ち出さないように、そして、自分自身の感染を防ぐためにも、病院に入るとき、病院の部屋から次の場所に移動するとき、トイレを使ったあと、帰るときなどに、手洗い・うがいをしっかりしましょうね。

衛：は～い。

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課　http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年10月７日

感染症に気をつけよう

１　全数報告感染症（感染症法における1-5類感染症）

細菌性赤痢の報告が9月に2件ありました。渡航地のスリランカまたはミャンマーでの感染と思われます。
腸チフスの報告が9月に２件ありました。１人には渡航歴はありませんでした。
パラチフスの報告が９月に１件ありました。インドでの感染と思われます。
腸管出血性大腸菌感染症の報告が９月に11件ありました。肉類の加熱不十分による感染に気をつけましょう。
レジオネラ症の報告が９月に４件ありました。市内の昨年１年間の報告が16件であり、今後の動向に注意が必要です。
麻しんの報告が９月に１件ありました。インドからの輸入例と思われます。

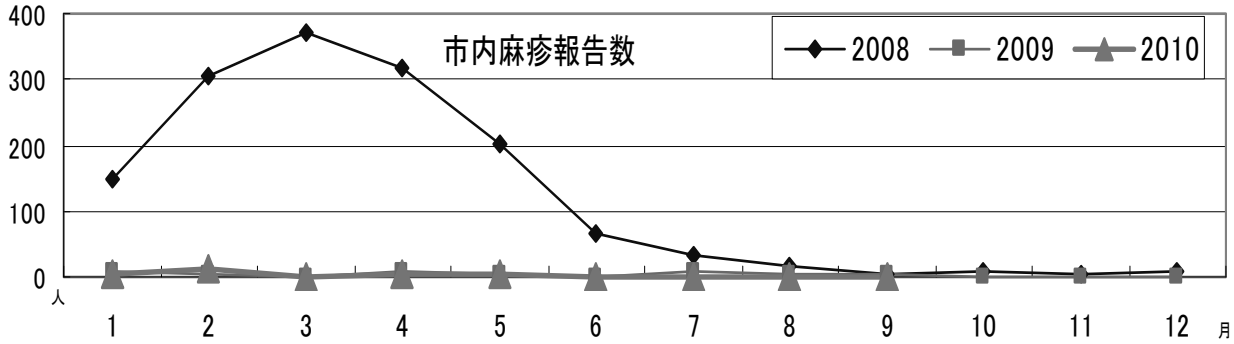
２　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）　平成22年８月23日～９月26日

疾患名	市内流行状況		コメント
流行性耳下腺炎	△	➡	例年夏に多く報告が見られます。この時期としては、過去５年との比較でも多めに報告されています。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし
↗：増加傾向　➡：横ばい　↘：減少傾向

３　いま気をつけたい感染症

・ 麻しん（はしか）に気をつけましょう。



・麻しんは、１回の予防接種では生涯にわたって免疫を持つには効果が不十分とのことで、平成１８年に麻しんの第Ⅱ期の予防接種（就学前年齢相当）が始まりました。
　ところが、平成19年、20年には、10歳代から20歳代を中心に、首都圏で広く感染が見られました。感染者には、子どものころに予防接種を受けた方も見られました。
　そこで、Ⅱ期の接種年齢を過ぎた小学校以降のお子さんには、平成20年度から平成２４年度までの５年間に限って、第Ⅲ期（中学１年相当）、第Ⅳ期（高校３年相当）として、追加の予防接種が行われています。
　麻しんは、今でも生命を失ったり、重篤な後遺症が残ることもある重要な疾患です。罹患するとウイルスに効く薬剤がないので、症状を抑えるといった対症療法しかありません。しかし、予防接種が非常に有効な疾患です。対象年齢になったら、必ず予防接種を受けましょう。
　また、国内数ヶ所で、海外からの輸入例が報告されています。
　麻しんを疑われた場合、早めに福祉保健センターに相談しましょう。
　市内の最新情報は、下記をご覧ください。
　http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/pdf/2010nen/201038.pdf
　詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
　http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html
　横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課 http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

どうして麻しんが急に減ったの？

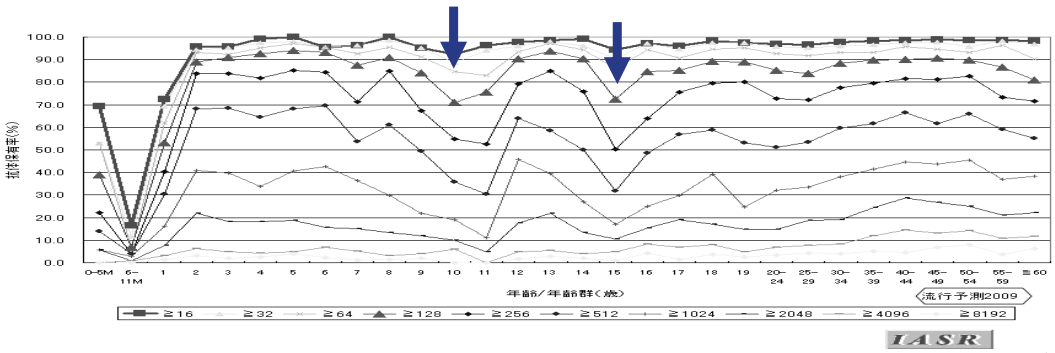
感染症　Q&A　流行調査　編
（衛くんと研子先生の一問一答）

どのように調べているの？

衛：研子先生。どうやって感染症の流行を把握しているのか教えてもらえますか？

研：国内の感染症の流行を把握するには、大きくは４つの方法があるわ。① **感染症発生動向調査（サーベイランス）**として、感染症法に基づいて、医師が保健所に届けるのよ。全部の患者を届出する全数報告と、決まった医療機関が届出をして、流行の状況を見る定点報告があって、今の流行の状況がわかるわ。また、② **病原体微生物検出情報**として、検疫所や地方衛生研究所が血液や便といった検体を調べるのよ。今、日本全国のインフルエンザは新型と香港とB型だとか、今年の手足口病が、諸外国で死亡例も出した型が多かった等は、この調査でわかったのよ。そのほかに③ **感染症流行予測調査**として、予防接種対象疾患について、集団の抗体保有率（数千人の血液検査で、抗体保有の状況を調べる）、豚の日本脳炎抗体保有率等を調べているわ。また、④ **院内感染対策サーベイランス**として、院内感染や、薬剤耐性菌の調査も行っているのよ。

衛：具体的にどんなことがわかるんですか？



麻しんの年齢層別抗体保有率　国立感染症ホームページより改変（↓を加筆）

研：たとえば、麻しんでいうと、① **のサーベイランス**から、国内で感染者が激減したことがわかったでしょ。② **の病原体情報**からは、麻しんウイルスの遺伝子型から輸入例と確定できたのよ。③ **感染症流行予測調査**（2009年）では、麻疹の抗体保有率は、10歳と15歳（↓）が低いけれど、それ以外は十分な抗体保有率があって、予防接種の効果があったこと、その結果集団感染が起きにくくなったこと（集団免疫があると言います）がわかるわ。集団免疫のおかげで麻しんの流行は抑えられ、全国的にもすごく患者が減ったわね。これからもⅠ期Ⅱ期はもちろん、中１・高3にあたる人たちには、Ⅲ期、Ⅳ期の接種をしっかり受けてもらう必要があるわ。

衛：ふ～ん。

研：その他にも流行の調査として、インフルエンザによる学級閉鎖数、予防接種率、重症な合併症の脳炎の発生等、いろいろな流行の調査をしているのよ。横浜市の衛生研究所ホームページでも各種の感染症情報を提供しているから、衛くんもよかったら見にきてね。

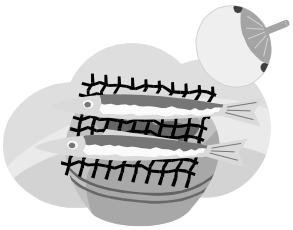
衛：ま、考えてあげてもいいよ。

研：あらあら。

横浜市衛生研究所HP　http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年11月11日

感染症に気をつけよう



1　全数報告感染症（感染症法における1-5類感染症）

細菌性赤痢の報告が10月に３例ありました。２例は海外渡航歴が無く、国内での感染でした。

腸管出血性大腸菌感染症の報告が10月に９例ありました。何れも感染源は特定できませんでした。感染予防には、手洗いのほか食材の充分な加熱が大切です。

デング熱の報告が10月に１例ありました。インドネシアで蚊による感染でした。世界中で感染者が増えている感染症ですが、今年は国内の報告数も昨年に比べ倍増しています。東南アジアへ旅行の際は、虫刺されに気をつける必要があります。

HIV感染症の報告が10月に３例ありました。全て男性でした。日本では、男性の同性間性的接触による感染が多いです。

2　定点報告感染症（感染症法における５類感染症）　平成22年9月27日～10月31日

疾患名	市内流行状況		コメント
流行性耳下腺炎	○	➡	今年の１月から、過去５年間の中では報告数が多めにみられていました。通常秋には落ち着きが見られていましたが、今年度は過去５年でも最大の報告数です。
RSウイルス感染症	△	↗	例年初冬から春先までに多く見られる感染症です。乳児では時に重症化することが知られています。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし

↗：増加傾向　➡：横ばい　↘：減少傾向

3　気をつけたい感染症

ＲＳウイルス感染症に気をつけましょう。殆どが２歳までにかかる感染症ですが、生後６ヶ月未満や心臓や肺に疾患を持つ２歳以下のお子さん、高齢者では重症化することがあります。米国疾病センターによれば、世界中で１歳以下の細気管支炎や肺炎の最大の原因です。初感染での入院の割合は0.5-2%と低いですが、感染者の数が多いために、実際に入院する数としては多くなります。

生涯で何度も再感染することが知られていますが、初感染以外は、軽い風邪様の上気道炎で終わることも多いです。咳やくしゃみといった飛沫感染をしますが、環境中に数時間は生きられますので、おもちゃ等からの接触感染もあります。通常の風邪と思った大人や年長児が家に持ち込んで乳児に感染させることがあるので、赤ちゃんに接するときは、良く手を洗ってからにしましょう。また罹患した時に重症化する危険の高いお子さんは、モノクロナル抗体（筋肉注射）で予防することができます。流行期間は毎月注射する必要がありますが、予防効果は高いですので、心臓や肺に疾患を持つ２歳以下のお子様の保護者は、主治医にご相談ください。

インフルエンザに気をつけましょう。10月に、市内定点医療機関から検出されたインフルエンザウイルスは、３検体ともすべてインフルエンザＡ香港型でした。市内の検査状況で、香港型が多く見られたのは、2005/2006年シーズン、2006/2007シーズンまでさかのぼりますが、2006/2007シーズンは警報閾にまでは達していませんので、直近の大きな流行は2005/2006シーズンです。したがって、４～５歳未満のお子さんは、香港型に対する免疫が非常に少ないと思われますので、香港型が流行した際は、乳幼児の間での流行が危惧されます。流行期に備えるために、早めの予防接種がのぞまれます。

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
http：//www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html
横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課 http：//www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

平成22年11月11日

肺炎球菌って
肺炎以外にも髄膜
炎も起こすの？

感染症　Q&A　肺炎球菌　編
（衛くんと研子先生の一問一答）

冬から早春にかけて見られます。今から要注意！

衛：研子先生。僕のおじさんが、細菌性髄膜炎で入院しちゃって大変なの。原因が肺炎球菌らしいけれど、なんで肺炎の菌が髄膜炎を起こすの？相当危ないってことなの？

研：それは本当に大変ね。肺炎球菌は、こどもの副鼻腔炎や中耳炎といったありふれた病気から、肺炎や髄膜炎、敗血症といった、侵襲性の強い（重篤な）感染症も起こすのよ。どの年齢でもかかる可能性はあるけれど、小児と高齢者、基礎疾患のある人が危ないわ。日本では、普通に暮らしていて感染する肺炎（市中肺炎）の第一の原因よ。細菌性の髄膜炎の大きな原因でもあるけれど、特に小児では、ほとんどが、インフルエンザ菌と肺炎球菌によるものよ。侵襲性肺炎球菌感染症は、世界中のどこでも、死亡率も高いし、高度な障害が残る確率も高い恐ろしい病気よ。おじさんが侵襲性感染症だとしたら、それは大変な話よ。

衛：おじさん、いつごろどこでそんな怖い菌をもらっちゃったんだろうか。

研：潜伏期は１～３日と短いから、最近でしょ。突然に、すごいふるえと寒気、それに非常に高い熱と咳、呼吸困難、胸痛が見られるのよ。でも、不思議なことに、鼻やのど等に定着していても、通常は何の症状も起こさない菌なのよ。それが免疫がおちたり、風邪やインフルエンザといった先行する感染症にかかったあとに、発病してくるのよ。感染経路は、患者や保菌者からの咳やくしゃみ、唾(つば)といった飛沫も知られているわ。でも、どこで、誰からもらったからもらったのは判らないでしょうね。

衛：でも、細菌性って事は、抗生物質が効くんですよね。

研：鋭いわね、でも。問題はそこなのよ。本来効くはずの抗生物質が効かない耐性菌が増えているの。ペニシリン耐性の肺炎球菌感染症が報告対象だけれど、現在はペニシリンだけでなく、エリスロマイシンといったマクロライド系やニューキノロンといった広範囲の抗生物質に耐性の菌も出現していて、地球規模で問題なのよ。

衛：僕たちどうしたらいいの？

研：そもそも、広くみんなが保有している菌だから、むやみに恐れないでね。ただし、一旦侵襲性感染症を起こすと非常に重症だから、リスクの高い人は予防接種を受けることね。肺炎球菌は91種類の血清型があるけれど、大人用ワクチンはその中の23種類、小児用は７種類が含まれていて、実際の感染の相当の割合はそれでカバーできるわよ。気道に定着している菌は排除できないけれど、侵襲性感染症は阻止できるわ。小児と、高齢者と障害を持つ方がリスクがあるけれど、米国では喘息やタバコをすう人も接種の対象になっているわよ。

衛：それだ！　おじさん、タバコ吸っていたからだな！

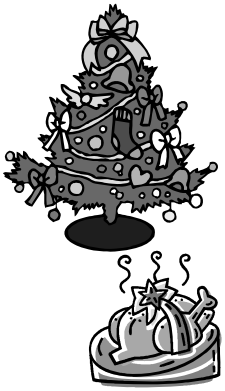
1ヵ月後・・・

衛：研子先生。奇跡的らしいんですけれど、おじさん、何の後遺症も無く退院できました。それで、もうタバコはやめますって。もうこりごりですって。

研：一番いい結果になって本当によかったわね。おじさんには禁煙を一生継続するようにがんばってもらいましょうね。

衛：は～い。

肺炎球菌についてのチラシは、こちらをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/pneumococci.pdf



平成22年12月3日

感染症に気をつけよう

1．全数報告感染症（感染症法における1-5類感染症）

腸管出血性大腸菌感染症の報告が11月に１例ありました。感染源は特定できませんでした。感染予防には、食材の充分な加熱が大切です。

レジオネラ症の報告が11月に3例ありました。感染経路は不明です。

HIV感染症の報告が11月に3例ありました。全国では昨年１年で1021人が報告され、そのうち431人（42%）は、すでにAIDSを発病していました。横浜では１月からの報告は45件で、AIDSを発病していたのは13件(29%)でした。日本では、日本国籍の男性の、同性間性的接触による感染が多いです。

2．定点報告感染症（感染症法における５類感染症）　平成22年10月25日～11月28日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	△	↗	市内で幼稚園・小学校等に集団発生が見られています。病原体としてはＡ香港型、Ｂ型が検出されています。
感染性胃腸炎	○	↗	例年冬に流行が見られます。市内では11月末までの14件の集団感染から、10件にノロウイルスが検出されています。
水痘	△	↗	例年、初冬から春にかけて報告の増が見られますが、初冬の時期にしては高い報告が見られます。
流行性耳下腺炎	○	→	例年夏に多く見られますが、年によって流行の大きさが違います。今年は当初から、過去５年の中でも大きな流行です。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし

↗：増加傾向　→：横ばい　↘：減少傾向

3．気をつけたい感染症

感染性胃腸炎に気をつけましょう。例年冬季に流行が見られます。ウイルスや細菌、寄生虫等さまざまな病原体で同じ症状が見られますが、市内での現時点での集団感染は、ほとんどがノロウイルスによるものでした。

ノロウイルスは、食品にウイルスが付いていて起こる食中毒としての発生のほかに、感染者の糞便や吐物に含まれるウイルスによる感染症としての発生も見られます。10～100個程度という、非常に少ないウイルス量で感染します。

厚生労働省の食中毒事件速報によりますと、平成21年の全国での食中毒は1048件、20,249人の発生がありましたが、288件、10,874人（37.8人/件）がノロウイルスによるものでした。ノロウイルスの食中毒予防のためには、手洗い、器具や食材の洗浄・消毒、充分な加熱（85℃以上で１分以上）等が大切ですが、食中毒対策の他にも感染者の糞便や吐物からの感染症対策も同じように大切です。また、体調の悪いときは、無理して出勤（通学）しない配慮も必要です。急激に発病するので、出勤・通学後に突然に職場・学校等で嘔吐する事もあり、その際には吐物等をしっかりと適切に処理することが大切です。

ノロウイルスに関する対応に関しては、横浜市保健所ホームページをご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/hokenjo/

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課 http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/

ノロウイルスって
昔からあるの？

感染症　ノロウイルス　編
（衛くんと研子先生の一問一答）

平成22年12月３日

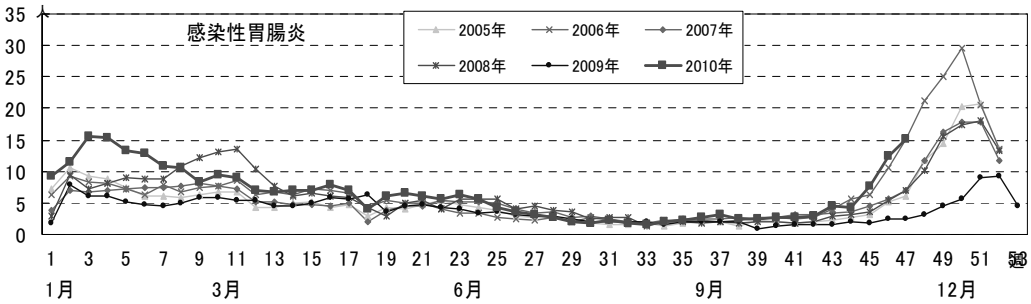
対処の仕方は
どうすればいいの？

衛：研子先生。僕の教室で突然吐いちゃった子がいたの。担任の先生によるとノロウイルスにかかったんですって。お母さんは、昔はノロウイルスなんか無かったし、教室で吐く子なんかもいなかったのに、今のこどもは弱いわねなんて言うけど本当かなあ？

研：そうね、最初のノロウイルス集団感染は1968年ノーウォーク（米国）の小学校だけれど、検査法が進歩して一般にウイルスが検出できるようになったのは1990年代になってからよ。でも以前から貝にあたったり、「お腹の風邪」なんて言われたりしていたから昔でもあったのね。ノロウイルスの遺伝子は５群あって（ＧⅠ～ＧⅤ）、それぞれがもっと細かく分かれるけれどＧⅠとＧⅡが主に人に感染するのよ。先進国等で大規模な流行を起こしてきたのがＧⅡ/４だけど、昔とは性状が異なっているかもしれないわね。今でも遺伝子変異が行われているので、ＧⅡ/4の違う型が出現するとまた世界的大流行になりかねないので、全国の衛生研究所でウイルス監視をしているのよ。例えば2006年からの報告ではＧⅡ/２も増えていることが注目されているわ。

衛：ところでどんな症状なんですか。

研：潜伏期は12～48時間（平均33時間）、急激な嘔吐、水様性下痢、強い腹痛、吐き気の他に半数に微熱も見られて、すごく重症に見えるし本人も苦しいのよ。１～２日でケロリと治ることも多いけど、症状が酷い場合には、脱水症にならない注意も必要よ（水分と電解質の摂取）。軽い症状ですむ人もいるけれど、不思議な事に３割は無症状なのよ。無症状の人でも便の中にウイルスがたくさん出ている人もいるのよ。そして症状が無くなっても３日間～４週間も糞便にウイルスが排出されるのよ。症状の程度とウイルスの関係は謎が多いのよ。しかも根本的治療法が無いから、補液や安静といった対症療法しか無いのよ。



衛：僕、かかりたくないけれどどうすればいいんですか。

研：非常に少ないウイルス量で感染するので、感染経路が①食材の汚染や加熱不充分としての食中毒 ②調理人等の手指による間接的な接触感染 ③便・吐物による人からの感染 の３つの経路があるわ。時には食中毒か感染症か、判断が難しいわね。カーペットについた吐物が乾燥して舞い上がり10日以上も感染源になった事もあるので、便だけではなく吐物の処理が大切よ。ウイルス自体は冷凍でも60℃程度の温度でも10ppm程度の塩素でも死なないから、加熱は85℃以上で１分以上。塩素消毒はそれなりの高い濃度が必要になるの。アルコールは効かないから注意してね。詳しくはチラシを見るようにね。

衛：今流行しているのかどうやって判るんですか。

研：市の決まったお医者さん（定点医療機関）が「感染性胃腸炎」と診断して、毎週報告してくれるから、市内の流行が判るのよ。お医者さんたちに感謝しましょうね。でも同じ症状を起こす病原体は、ウイルス以外にも細菌や寄生虫でもあるので、感染性胃腸炎の一部がノロウイルスによるものよ。

衛：じゃなんで、ノロがはやっているって言いきれるんですか。

研：それはやっぱり決まったお医者さん（病原体定点）が、患者さんからの検体を衛生研究所に届けてくれるのよ。それでこの時期の感染性胃腸炎はほとんどがノロウイルスと判るのよ。ただね、人によっては軽くてすむし、脱水程度の合併症しかないので、先生にしてみれば今市内で流行っている水痘や流行性耳下腺炎、インフルエンザにかかる方が怖いな。でも避けられる感染は避けなくてはならないけどね。
あ、それから、教室で吐いた生徒さんへの配慮がすごく大切よ。

横浜市感染症発生動向調査事業概要
平成 22 年(2010 年)

横浜市健康福祉局 衛生研究所 感染症・疫学情報課
平成 24 年 2 月発行

〒235-0012 横浜市磯子区滝頭 1-2-17
Tel 045(754)9815
Fax 045(754)2210

紙へリサイクル可